海外新潮｛日露の平和問題と世論／外國婦人の見たる日本の夫婦｝

中央公論

第十九年第十號

內容

THE CENTRAL REVIEW

｛明治卅一年一月廿九日第三種郵便物認可
每月一回一日發行明治卅七年十一月一日｝

帝國文學

每月壹回

十日發行

第拾卷第拾（十月十日發行）

定價　一冊金十二錢○六冊六十六錢十二冊一圓廿錢郵稅壹冊一錢申込前金

發行所

東京京橋區銀座一丁目廿二番地

大日本圖書株式會社

大賣捌　東京神田區表神保町三　東京堂

中央公論第十九年第十號目次



ヤーマウズの祭日

中央公論

第十九年 第十號



亦一種の國蠹か

東京に於ける私立學校の生徒現在幾萬を以つて數ふべし、而して其過半は悉く徵兵猶豫の願者なり

吾人は學問をせんが爲めに徵兵猶豫をなすものに對しては、決して苦情をいふものにあらず

而も玆に一團の不忠漢あり、學問を名として國家に對する義務を盡さゞらんとす、豈に輕々に看過すべき事ならんや

年二十に達す、身既に職業あり、兵に徵せられんことを恐れて東京に遊學す、而も學校にありて何事をなしつゝありや、徒らに年月の早く經過せんことを思ふのみ、目的が既に學問するに非ず、唯受くるところは東京の惡毒のみ、而して其身は幾年かの間、そが職業をも放棄する也

或は幾度かの試驗に落第して意氣沮喪し、最早修學するの勇氣なきも、徵兵を厭ひて入學無試驗の學校に籍を置くものあり、講坐に列すれども何事を敎はりつゝあるやを知らず、親の膏を嚙りて長き年月を無意味の内に送る

汝等果して何を以つて國家に對する義務を竭さんとする乎、咄、無用の徒よ、少しく自ら耻づるところあれ、今や國家安危の係る大事に際し、愚夫愚婦も尙ほ腕を扼して國家の安危を思ひ、國の爲めといへば身命を擲たんと願ふもの頻々、然るに汝等徒らに食し、徒らに生く、何の顏あつてか大道を濶歩するぞ

彼の社會主義者の如く、一定の主義あり、信念ありて、而して兵役を厭ふは尙ほ可なり、或は心に大志を

抱き、將來大に國家を利すべき學術技藝を修せんが爲めならばよし、否、將來有爲を以つて目されし多くの英才も、馬革、屍を包んで故山に歸りしもの既に幾百人ぞや

然るに汝等何等の主義もなく、何等の信念もなく、目的なく職業なく、偶々職業あるものも之を棄てゝ學校の教場に逃る、何ぞ其の行爲の卑陋にして、心情の怯懦なるや、吾人汝等を呼んで一種の國蠹といふ、決して酷に非ざる也

今不幸にして社會は汝等と然らざるものとを嚴格に鑒別するの術なく、之に制裁を加ふるの道なし、然れども天は必ず汝等を誅するの日あり

若し吾人の言を理とせば、乞ふ猶つて軍國の義務に服せ、滿州の天地、汝等を容るゝに適すべき也

其本に反れ

……再び東洋移民會社に望む……

吾人は前號に於いて、彼の東洋移民會社の墨西哥移民送還事件の眞相を見、會社側と移民側の兩方より、之れが公平なる評論を揭げ、併せて識者と當局者とに向つて移民事業の危機に瀕せることを注意したり

然れどもまた翻つて再び國家の現狀を思ふに、吾人は此度の事件に就いて、切に東洋移民會社に望まざるを得ざるものあり

吾人をして今會社と移民との理非曲直に關して縷り返へさしむるなかれ、また此事件を以つて單に會社と移民との間に於ける小さき爭として論ずることなからしめよ、水掛論は何處までも水掛論なり、吾人はかゝる小さき曲直利害を捨てゝ、更らに大なる國家の利害より之を見んと欲す、而して會社自身も亦びが見地を高め、區々會社對移民事件として見るを休め、少くとも國家と移民てふ大問題に考へ及ばざる可らず、吾人の會社に望むといふもの、實に會社が此根本觀念を更めんことに外ならず

社會百般の事業一として其の國家と利害關係を共にせざるものなしと雖も、而も移民事業の如くしかく甚

大なるもののあるを見ず、そがたとへ會社又は個人の企業になれるものとするも、確に一方國家事業として見ざる可らざるの地位にあり、我國の如きは特に然りとす、決して會社及び個人が桂庵的利益を貪るを許さゞる也

故に若し此の如き事業を起さんとせば、其創立の根本觀念は宜しく國家的ならざる可らず、故に時に或は會社の不利益となる如き場合も、國家の利害によりては忍んで之を受けざるを得ざることあるべし、かくの如きは企業の當初既に豫想し置かざる可らず、然り吾人は東洋移民會社の精神がこゝにありしを信ぜんと欲す

併しながら墨西哥移民送還事件の經過を見るに、吾人は多少の疑惑を起さゞるを得ず、東洋移民會社は果して前述の精神を以つて、之を處決しつゝありや否やと、即ち此事件が移民事業の將來に及ぼす影響に就いて考へしや否やと

事今日にいたりては既に理非の問題にあらずして利害の問題也、移民事業の盛衰に關する問題也、而して移民事業の盛衰は直ちに國家の利害――少くとも盛衰に直接關係を有す、此論理を推せば即ち會社自身の興亡に關するもの也

會社が今日迄の此事件に對する處置は甚だ感情的にして自殺的なり、餘りに近視眼的なり、理非は兎も角も、彼の移民をして遂に不滿足に終らしめんか、折角盛んならんとする海外出稼ぎの精神を挫き、且つ會社の信頼も忽ちに地を拂ふに至らん、移民の危險と會社の不信、此二者は双輪となりて全國を馳せん、果して然らば其が齎らすべき結果なるもの即ち知るべきにあらずや

再言す、墨西哥移民送還事件は既に理非の問題にあらず、たとへ會社に十二分の理ありとするも、相手は無智の移民なり、之と理非の爭論をなす、餘りに大人氣なく、又餘りに會社の無智を暴露するものにあらずや、吾人は會社がその根本精神に反へりて區々たる眼前の小損害を忍び、國家の大計を思ひ、自家の前途を慮り、此際斷然たる處置に出て、哀むべき無智の移民をして滿足せしめんこと、切望に堪へざる處なり

（以上十月二十二日稿）

武士道の懐古

文學博士　根本通明

日本が今度の戰爭で勝利を得るのは武士道のある爲なることは今更いふの必要がない。然らば其武士道なるものは何時頃から始まつたかといふに、我日本では國の成立ちからあつたもので、即ち天照大神が建國の源を開かれた其時から武といふものが起つたものだ。其證據は今日まで殘て居る、彼の天叢雲劍は即ち夫れで、三種の神器中の第一等のものとして皇孫に傳へられたのである。此劍を作つた人はない、自然に出て來たものである。古には何處の國でも不思議な事が澤山あるものであるが、此劍は素盞嗚尊が大蛇を切つた時に其中から出て來たもので、此劍のある所には常に其上に必ず雲が群がつて居る、夫れ故に叢雲劍と名つけたものである。外國人などは之を聞て奇怪と思ふかも知れぬが實際の話である。此刀は（先生一刀を携へ來りて記者に示し）江義弘の作で、鍔に此通り劍と其上に雲の模樣をつけたのは即ち叢雲劍の形を示したのである、此刀が出來てからですら已に六百年を經過して居る、叢雲劍は日本武尊の時から草薙劍と名を改めて今日まで現存して居ることは誰も知て居ることである。

日本は武を以て立つた國である。而して刀は實に此武を以て立つた國を守護し、鎭定する爲に出來たものだ。刀を凶器といふことは外國の事で、支那から始まつたものである。支那では刀は逆賊の作つたもので、彼の蚩尤が亂を起した時に始めて出來たものであるから、之を凶器といふので、日本とは其起源が違ひ、又其趣意が異つて居る。日本では國家を守護し、天下を鎭定するといふ實に立派な起源と立派な趣意で刀を見るのである。夫れから武士道が漸々發達して、誰れ敎へたとなく連綿として傳はつて來た、武を以て始つた國は、武を以て盛んとなり、武を以て發達して行くのである。

夫の撃劍の如きも、支那は國が早く開けた爲めに支那の方か早く始まつた、矛や鎗も支那の方が早い。然し其撃劍や鎗の業に於ては日本は遙かに支那に優つて居る、古の撃劍の名人は鎭西八郎爲朝で、此れに敵するものは一人もなかつた、其次には源義經で、此二人は他に匹儔を見ぬ達人である。其後撃劍が益々盛んとなり、鎗も亦盛んとなつた。然し鎗は古は天子の御守

護の爲にのみ用ひたもので、他の者が持つことは許されなかつた、楠公に至つて始めて兵士鎗を用ふることゝなつたものだ。夫れで古の事を知らぬ者共は或は鎗を以て楠公の時に始まつたと思うて居るが之れは大いなる間違て、鎗は實に天火矛命の作つたもので、非常に早くから始まつて居る。たゞ之を兵士に用ゆることを許さず之を許したのは楠公の時に始まつたのだ。

武を以て國を建てた日本の國は寐ても起きても武の心を離さぬのである。其爲に古は婦人と雖も懐劍を用ひたものだ。普通坐つて居る側にも刀劍を離さなかつた。武士道の方から見れば、其所謂武士道といふ道が實に重いものであつて身體は惜しくない。武の道の爲めならば身體は惜しくない。戰爭に出て後ろに向けば臆病である。敵に向ふた儘で倒れる。後ろに向けば武士道を汚す、敵に向うたものは決して後ろを見てはならぬ。臆病にして死すべき時に死せず、逃げて歸れば其朋友が之を許さぬ、朋友は其者に腹を切らせたものである。そこで武士道を磨かなければ軍が弱いものであるから皆爭うて之が錬磨を勉めた。後世になつて之を盛んにやつたものは武田信玄であつて其兵法には極力此道を奬勵してある。敵に向ふものは顔を俯伏して進み、少しても仰ぎ見れば臆病だといふてある。何處までも、如何なる事があつても進む。甲冑を帶しては内冑を敵に見せぬとしたものだ。斯の如き方法によつて鍊へられたものであるから日本の武士は強く彼の弘安の軍の時も東北人が行かず、西南人ばかりでも蒙古の軍を鏖にしたのである。武田の兵學では一番鎗といふものは第一等の軍功としてある、敵が林の如く整列して居る所に眞先に鎗を突込むといふことはなか〱容易の業でない、一番鎗は非常の賞を戴いたものだ、又二番鎗も一番鎗と餘り區別がないものだによつて矢張り重き賞を受けた、一番槍とか二番槍とかは素より死ぬる覺悟でなければ出來ぬことだ、今日の突貫の如きも全じことであらうと思ふ。戰爭では前の者が倒れた時に其死體を踏み超えて行く、幾人死んでも乘り越えて進む。前の者が死んだからとて躊躇逡巡すれば臆病で武士道を缺くのである。

又日本の武士道よりいへば、敵に捕へられるのを嫌ふ。虜にせられるなら死ぬ、捕縛は決して武士の受けぬ所である。捕縛せられるなら死ぬのである。維新の時に秋田に志賀爲吉といふものがあつて惡い執政をしたといふので、時の若い者が之を殺して、直ぐに腹を

切て死んでしまつた、若い者でも捕へられるより死ぬといふのである之れ即ち武士道である、彼の常陸丸の出來事なども明かに武士道を示したものである。

武士道は敵に後ろを向けるのを嫌うといふ所から、戰に出て倒れた時には其創を撿査して前から討たれたか、後ろから切られたかを改める、後ろに向かなければ後ろから切られぬ、後創は武士の恥辱であつて前創は其名譽である。夫れであるから武田信玄などが武士を勵ますには何の誰は武士道が堅い、後創は一つも受けぬなどゝいふたものである、一所に行た者が禍を受けると己れも亦一所に禍を受ける、一人討たれたのに一人生きて歸るのは武士道を缺くとしてある、夫故に武田家のものは皆つよい、三河武士は何故人に恐れられたかといふに、徳川家康公は信玄が武士道を敎へ込んだ武士を悉く抱へたからである、武田家の兵法を應用して大に武士道の養成を計つたからである。

上杉謙信も矢張り其通りで、殊に義氣の盛んな人であつた、歴史にもある通り、謙信の親は敵に殺された、其時は謙信僅かに十三歳であつた、兵士が逃げ歸りて主人が敵に殺されたのを謙信に告げると、謙信は大に怒りていふには、主人が殺されたのに其主人を捨てゝ歸るものがあるか、實に武士たるものにあるまじき仕方である、然し汝の首は暫らく汝に預け置く、我と一所に進め、我は親の敵を討つ、汝は主の仇を討て、といふて怒た儘で戰に出やうとする、敵は大勢であるからとて止めたけれども聞かぬ、我れ眞先きに行く、敵の方では大將を殺してしまうて、跡は子供であるから恐るるに足らずと大に油斷をした處に行たのであるから、などかはたまらん、忽ち敗北してしまつた、武士道の戰爭に對する効力といふものは實に斯の如きである。

古は家庭の敎でも武士道を勵ましたもので、幼少の時から喧嘩をしても逃げてはならぬ。喧嘩をして頭をなぐられては武士道は立たぬ、頭を人になぐられては君に仕ふることは出來ぬ、故におとなしくして濫りに喧嘩などしてはならぬと親が敎へ込んだものである。只今ではそんな事はないが古は大名が便所へ行くにも刀を持つたものである、便所にも刀架を置いた、お側のものが之を持てゆく、湯殿へ行くにも髮結にも刀を離さぬ、秋田の明德館といふ我々の居つた學校の生徒なども飯臺に坐つて食事をするにも一刀を離さぬ、便所へ行くにも一刀を帶したものだ、夫れが爲めに門外に出るには無刀では出られぬ、學校の生徒は門外に出

るに一刀でも學校を逐追せられる、門外には必らず二刀をさゝねばならぬ、總て恥辱を受けてはならぬといふので濫りに市中に出ぬのである、髮結所へは行かず生徒が相互に髮を結ふ、又町の風呂屋へは行かぬ、牛頭馬頭と一所に湯に入つては武士が汚れるといふたものだ。

古の武士道といふものは實に今話をしたやうなものであつた、其淵源は甚だ遠くして其歷史は甚だ長いのである。今日の武士道は今回の戰爭に於てよくあらはれて居る。今后益々此道を養成して、我國の强さを永く維持せねばならぬのである。

（文責在記者）

本誌は武士道に關する諸大家の高見を叩き聊か思想界に資せむことを期す

時局より見たる武士道　井上哲次郎氏

武士道と今後の敎育　戸水寛人氏

武士道に就いて　渡邊子爵

は既に記載したり更に諸大家の卓見を紹介すべし

眞理と人生

綱島梁川

理を究めて析髮の微に至るとも、其の事若し人生の要求又は理想と涉る所なくば、其は未だ眞理といふ光輝ある名稱を享くるに堪へじ。眞理とは何ぞやと言はゞ、吾人は到底其が吾人の生活理想に關係するの意義を以て之れに答へざるべからず。生活理想と風馬牛なる眞理は眞理にあらず。如何ばかり抽象的なる、形式的なる、一見人生と無關係なる如き知識といふとも、或人が「一塊の麵麭をだに燒くに足らず」と譏りたる彼の哲學的知識といふとも、尙ほ其の眞理と稱へらるゝ所以は、其が人生と離るべからざる活關係を有する故にあらずや。設令ひ其は直接に或實利實績を擧げずとも、尙ほ吾人の知識的、心靈的生活を豐腴潤澤ならしめ、以て能く人生全體の理想の一要素となるが故にあらずや。眞理といふ語既に一種の價値意識を含めり。吾人が眞理といふ語を打聞いて一種快美（スキートネス）の感を以て撲たるゝ所ある、是れ眞理の語其のものに吾人の理想と觸れ來たる或意義を含めるが故にあらずや。人生の理想組織の一鎖として評價せられざる

眞理は、温味なき光彩なき否全く意義なき空語也。若し一意、眞理を窮めて、眞理の人生的、有極的意義に想ひ到らず、限りなき繁碎叢脞の研究堆裏に埋頭して、無邊の實在の一隅に索居するものあらんか、是くの如きは眞の學究者の面目にあらず。專攻の細は厭はず、分科の密は喜ぶべし、但だ一面常に其の研究をして人生目的の有極に會せしむるを要す。蟻の一肢も解くべし、蜂の一節も剖かつべし、唯だ其の學理刀の向ふ所をして人生的意義と離れざらしむを要す。一切の格物致知、唯だこの用意と相須つて人生と接し來たる。然らずんば天上の星を讀み盡くし、海邊の砂を數へ了はるとも何の詮かあるべき。眞理は人生の理想の最も高上なる一內容也。眞理を戀ふるは是れ人生の理想を戀ふる也。

眞理を眞理其のもの丶爲めに求めよと主張せんは、必ずしも上論の旨趣と背くものにあらず。眞理を眞理そのもの丶爲めに追求する、是れやがて眞理をして眞に深く廣く人生と觸接せしむるの道にあらずや。かの一向に功利眼によりてのみ眞理を觀じ、眼前の實利實績（エッフイシエンシー）を擧ぐることをのみ眞理の用とするは、是れ眞理を待つの道を知らざるもの、是くの如きは未だ眞理の大機大用を知らざるもの也。

眞理は固より實理實益の一源たるべし。されど眞理を以て唯々便利なる功利的器具觀を做すは、是れ特に眞理の光輝あり潤澤ある內容の一面を抽き去つて、之れを淺薄、俗陋、狹隘、貧寒なる形骸と做し了はるものにあらずや。眞理之神は美之神と同じく嫉妬の神也。吾人の之れに奉事する須く主一無適なるべし沒關心なるべし、是くの如くにして眞理の神は其の深秘なる幽光を人生の祭壇に洩らし來たるべく是くの如くにして其の光輝は以て吾人の德を潤し、人格を温め、心靈的生活を豐かにすべく、又復た是くの如くして彼の功利といひ實績といふもの必然の產物として吾人の有たるべき也。誰れか數々として眞理の功利を言ひ實益を言ふ、眞理の特に貴き所以は、其が吾人の身を潤すの光たるが故にあらずや。眞理は人格の光也。眞理を求むるものは先づ此の貴き意義に於いてせよ。「眞理の爲めに眞理を求めよ」といふは、畢竟この光華ある人生の理想を求むるに純粹無雜の一念を以てせよといふの意にあらずや。若しそれ理想を離れ人生全體の要求を離れたる眞理といふが如きは、抽象の空語のみ。若し「眞理の爲めに眞理」の語を解して、是くの如き抽象義

となすものあらば、是れ畢竟眞理の富贍なる意義を知らずして其の空名に迷へる徒なるべきものみ。觀じ來たれば、眞理も藝術も、其の究竟の意義に於いては、道德的（最も高上なる意味に於いての）也、又實に道德的なるべき也。眞理の硏究は知識上の遊戲にあらず。謂ふ所「游於藝」といふとも、一面之れを堂々たる爲學の功夫と聯接せしめて、始めて人生的意義あり、內容あり。かの戲作者的文藝觀は、予輩の取らざる所也。眞理といひ藝術といふ、所詮人生の至上善に參して、其の全人生系統に占むべき自家特殊の位置及價値を要請し來たる外はあらざる也。

　眞理は貴ぶべし、眞理を求むるの心は更に貴ぶべし。美はしきものを慕ひあこがるゝ如き一種の眞情を以て眞理を慕ひ求むるは、如何ばかり貴き事業なるぞ。是くの如き眞情を以てして始めて能く眞理の奧秘に分け入ることを得べく、又是くの如き人に於いて眞理は始めて能く其の貴き趣味となり、力となり、生命となり、人格となり、品藻となる、眞理貴き乎眞理を慕ふの心貴き乎、予輩はレッシングと共に眞理其のものよりも眞理を求め〳〵て休まざるの心を取らんかな。眞理其のものが是くの如き心を操るものに於いて眞個敎養（カルチュアー）の意味を帶び來たる也。

　眞理は乾燥なる理窟三昧にあらず。眞理には甘美あり潤德あり。殊に宗敎、道德等の眞理は、到底吾人心情の要求若しくは賦彩を離れては其の意義を捉へ得べくもあらざる也。世の眞理を究むると稱する學者にして、冷やかなる理窟一邊に走せて、絕えて其の溫潤の感化を受けざるもの多き、是れ彼等が眞理の眞意義に涵泳せざるの致す所にあらずや。眞理其のものを高き理想上の趣味として我が人格に結びつかしめざるが故にあらずや。眞理の追求に對する眼光の、道樂的、學究的なる、然らざれば功利的、職業的、器械的、報酬的なる、是れ我邦近時の學風に於ける一弊にあらずや。

（完）

非戰論と是戰論（續）

文學士　藤井健次郎

●第七戰爭は不生產的の頂上である。之を生產的に消費したならば、如何に人間の幸福を增進することであらうか。其故に戰爭は避くべきであるといふ經濟上の

議論があります。成る程此事も、戰爭は殘酷悲慘な出來事であるといふ事が事實である程事實でありませう。わざ〳〵生產の源の一たる勞力(即ち敵の壯丁)を盡くさんが爲めに、莫大なる味方の勞力を費して居る。是れが第一に生產の要素たる勞力を空費する譯で不生產である。其上に双方共に莫大の軍事費を要する。それ丈け資本をかけても、少しも生產の結果がない。是れ第二に不生產である。それ故僕も或る意味に於いて戰爭は不生產的のものであるといふ事を承認する。併しそれ故その不生產なる戰爭を廢めてしまうべしといふ論には左袒することは出來ぬ。

或は立國の大義は唯々經濟上の損益勘定からのみ見るべきものでない。其損益勘定よりも更らに重大なる者があるといつて、全然經濟的眼光を其間に挾むことを否認せられて居る人もありますが、固より其方からも以上の論を駁することが出來る。併しそれは餘りに經濟的眼光に同情のなき評論で、彼等を屈服せしむるには不適當と思ふ。僕はさうでなく又經濟の上から理窟を立てゝ見たいと思ふ。

凡そ生產不生產といふのは畢竟相對的のことであつて、絕對的の意味でない。猶言を換へて申せば直接間接の差別であつて、絕對的不生產的なるものなく、又絕對的に生產的のものもない。例へば河川の堤防を築いたり、司法警察の費用を支出したりするのは、何であるか彼等は決して直接生產的結果を生む者でない。然らば不生產かといへば、不生產でもない。又堤防費や警察費を不生產として支出しないといふ馬鹿者もありますまい。されば生產不生產は畢竟消費する所の人の意志と、其實際上の效果の如何によつて定まる相對的のことであつて、一般にいふことは難いことであらうと思ふ。

偖て今回の戰爭では、滿洲といふ地方に淸國の主權を確保し、且つ其利源を世界の市場に公開せんとの戰爭である。詮ずる所或る開墾地を開拓せんが爲めに今は近傍の河川に堤防を築きつゝある者である。若し此豫備の仕事が生產無意義でないなら、今回の戰爭も經濟上無意義と謂はれぬのである。併し僕がかやうに申すと、多分言はるゝ方もありませう。それば所謂三百的モグリ的論法である、又たとひさやうでないとしても、若し滿洲の利源を世界の市場に公開する爲めのみの戰爭とすれば、そんな不生產的なることをするに及ばず、外に方法もあつたらうと。併し實際其處に如何

なる策があつたであらうか。我國では單にそれ丈のことで、あらゆる手段であらゆる方法で長い間談判を繼續したのではないか。併し終に仕方なしに時務に適當した行動を取つたのである。即ち殆んど避く可からずに至つて戰爭的行爲を取つたのである。されば其他に良策があつたと思へない。

さらば露西亞に滿洲の經營をまかせて置いても、矢張り滿洲の利源は世界の市場に公開せらるゝてなからうかと言ふものもあるかも知れぬ。併しそれも理窟にならぬと思ふ。露西亞が滿洲を經營することになると、淸韓兩國の獨立が脅かされる。從て我日本の自家防衞の爲めにも多少顧みねばなりますまい。さうするとその滿洲の利害得喪に關係ある諸國は、常に武裝的態度を取らねばならぬ。從て平和の內に滿洲の利源を世界の市場に公開することと出來なくなる譯である。併し是等は經濟政治の專門家の意見と批判とを待つべきことであるから、僕は此事に關しては多くを言ふまい。

第八戰爭をすると少數のものは利益をうくることを得れど、大多數のものは不幸に沈むから戰爭せぬがよい。といふ議論があります。是にも一應は尤もな點も御座います。戰爭につれて商工業が沈滯し、從て多數の職工傭者等が手明きとなつて、殆んど生活にさへ窮して居る。或は一家の稼人を徵されて生活に困る家族もあり、或は若い壯丁を取られて勞力に缺乏して耕地をよし荒廢に歸せしむるやうのことなくとも、多少收穫高を減殺せらるゝを憂ふる農夫もある。成る程多數の者の不利益といふことは一應は承認致さるゝ次第であります。併しよく考へて來ますと、その多數少數といふことも曖昧になつて來て、畢竟分らぬやうになつてしまうのである。多數とは何の多數をいふのであるか。兩交戰國の國民の多數をいふのであるか、將た又直接間接にその戰爭の影響を蒙る處の、世界のすべての人々のうちの多數といふことでありませうか。斯く考へて來ると、日露兩國が戰爭する爲めに、某々の第三國は非常の利益をうくるといふことがありませう。現に韓國は謂ふに及ばず、淸國もまた尠なからざる利益をうくることである。其外歐羅巴に於いても是が爲めに利益をうくる國もありませう。箇樣に考へて來ますれば、多數が不利益を蒙るといふことは、漫然として謂はるゝことでありませうか。又假りに多數といふことは兩交戰國民の多數といふことに限定して考へて見ましても、成る程反りて現在の國民の多數は不利益

をうくるといふことを許すとしても、國民は一代にして滅する者でない、來るべき數代の國民をも共考案の中に入れねばならぬ。若し國家の獨立が不安、危殆の狀態に陷て、國民の多數が安んじて業を取ること出來ぬやうになつて數代續きましたなら、實に多數の人々が非常の不幸不利益を蒙ることとでありませう。此等の數代の國民を考案の中に入れましたならば、果して多數が不利益をうくるといふことが謂はれませうか。それであるからして、多數の不利益といふ、その多數といふことも、實はよくわからないことと申さなければなりますまい。

又不利益といふ事も一概にいへぬ。一見すれば物質的に損耗を受けるやうでありまするけれども、或は勤儉貯蓄の精神を皷吹したり、或は世界的智識を養つたり、或は國民的活動を世界に發表したりする好機會を與ふるものであるとすれば、物質的損耗は精神的利益で償はれて居る。而かも此間を比較計算して、損益勘定をすることが出來ましようか、前者は後者よりも不利益であることを證據立てることが出來ませうか。利益不利益といふことは畢竟比較上の相對的のこと柄である。此戰爭した結果と、戰爭せない結果とを明瞭に比較して、その輕重を定むること出來なければ、どうしても戰爭は多數の不利益であるといふことを斷言すること出來ぬ譯でありませう。

以上八點は非戰論の論據を批評したものであります

次に是戰論の論據を調べませう。

第九今日の處吾人々類は猶不完全であつて社會は猶不圓滿の時代である。斯かる人間社會に於いては、戰爭は實に已むを得ざる罪惡である。即ち吾人は今日の處、已むを得ず戰爭を是認せねばならぬといふ議論があります。併し已むを得ざる罪惡てふ名の下に戰爭は辨護せらるゝ者でありませうか。貧苦の極、實に已むを得ずして一片のパンを盜んだものは、已むを得ざる罪惡として許されませうか。家庭の事情已むを得ずして親を殺害した息子は、同じく已むを得ざる罪惡なる名の下に許さるべきでありませうか。否多くの犯罪は、已むを得ざるに出づる者多いてはなからうか。若し前述の論にすれば、此等は皆當然許さるべきでありませう。是れ甚だ不都合なることではありませぬか。罪惡なら飽くまで罪惡である。之を取り除くのが至當である。それ故、已むを得ざる罪惡なる名の下に戰爭を辨護することを出來ぬ。併し或は言ふかも知れぬ。已むを

得ざる罪惡は、國家の行動には之を許すべきも、個人の行動には許すべきでないと。然らば何故國家に許して、個人には許されぬか。其點は、他の論點第十に入りますから、其場合に讓ります。

●第十國家の行動は絕對的である。それは道德的批判の以上にある者で、國家の行動には善もなく、惡もない、道德は唯國家內に限ることであつて、國家以外には嚴密の意味に於ける道德なる者はない。故に國家が戰爭をしやうとしまいと、其は全く國家の勝手であつて、彼是れ評論すべき限りでないと議論があります。是の論の批判を詳しくすれば國家主上主義の批評となりますが、それは僕が五六年以前「哲學雜誌」で詳しく論じたことがありまするから、其等を御參考に願いまして、茲では簡略の爲めに只一言次のこと丈けを申して置きます。

成る程今日の處、或る點までは國家の行動は自由である。併し是は事實であつて、自由であるべき筈といふ將來の理想に對しては、充分の合理的論據があると思へない。而かも今日でも多少制限を受けて居る點があるではないか、若し國家の行動に毫も善惡の批判を下すべきでないとすれば、日本國家の行動は正しく、露西亞國家の行動が不正であるともいへますまい。吾々日本人が日本國家の行動を正しいといふも、畢竟それは自分免許の手前味噌で、空名に過ぎないことになりはしまいか。此邊の處について加藤先生の說明をよく聽いて見たいものである。而かも事實上我等は我國の行動を以て正義の行動として、內自ら慊き所あり、而して外、列國の同情を惹いて居る。此邊の處に、國家は道德上至上のものでないといふ根柢が橫はつて居るではないか、後にも猶論じますが、正義といふ名は、只交戰國が第三國の同情を博さうといふ、ブルーデンシアル、アクトとばかり言へぬ。その正義といふ名に於いて、列國の同情を惹くといふ點に、根本的の意味が橫はつて居るのである。それ故是も有力なる辯護說と思へぬ。

●第十一凡そ生類には皆自己を保存せんとする衝動がある。之と同じく國家にも亦、自家保存の衝動がある。若し敵あつて自家の獨立主權を脅す時には、此本能に循て劒を執つて立つのが當然である。若し獨立主權が脅されても猶劒を執つて立つの勇がなかつたならば、到底其獨立主權を維持すること出來まい。斯の如き辯護說も御座います。是れも前の第九の論點と同じく甚

だ妙な議論である。此議論は、自然に賦與せられたる衝動本能を滿足せしむる所の行動はすべて是認せらるべきものであるといふ大前提を豫想して居る。此全稱命題が許されないならば、此議論は成立たぬ。然らば此大前提は認容せらるべきものであるか否やと考へて見まするど、否考ふるにも及ばず到底是認すべき命題てはありますまい。若し之が許されましたならば、如何なる行動も悉皆是認せらるゝといふことになるのでありませう。それ故に此辯護說も決して正當の辯護說とならぬのであります。

第十二戰爭は正義を決定する最後の手段である。正義は唯强者の手によつて決定せらるべきもので、正義といふ本來定まれる形のあるのではない。故に今國際的關係に於いて、其正義と信ずる所が、相衝突するやうのことがあれば、之を干戈に訴へて決定するは實に當然の處置であつて、毫も戰爭を非認すべき理由があらぬ。斯やうな議論も御座います。是に本論第二點に述べました、戰爭が正義を決定するといふ二の異なれる意味の第一の意味でいふものでありまして、是については多少考ふべきものと思ひます。

偖正義といふ概念は、深く之を見ますれば、單に社會上の約束とも見えますが、(アリストテレースの正義は稍々之に近きか)、又深く之を考ふれば、凡そ物の則、それが正義とも見えます。(プラトーンの正義、中庸の道は之に近きか)。例へばアリストテレースの百圓の損害に對しては、百圓の賠償を償ひする報償的正義や、又社會の報酬は、その技能勞力に比例すべしといふ分配的正義やは、只單に社會上の約束事とも見える。併何故かくすることを正義と見たてあらうか。それは、斯の如き規律がなければ、社會の秩序が紊亂して、決して生々發展を遂げることが出來ぬ。即ち彼の報償的正義や、分配的正義やは、實に社會發展の道であるといふことが、長い經驗の間に、明らかに、且つ確實となつて來たによつて、之を正義としたのではないか。されば正義とはその內容をいへば、實に社會生活を可能ならしめ、且つ之を發展せしむる所の道であるとも考へられませう。是れよりして、物あれば則ありといふ其の則が正義の內容であると推演することが出來る。是の故に僕は中庸の天命謂性、率性謂之道の道を以て正義なりと見る一人である。斯く考察し來れば、ありとあらゆる物に正義が存するが如く、一國家內に正義あるは勿論、人類全體の上にも必ず一定の正義がある

に相違ない。唯今日の處、人類全體の上に存する所の正義の如何なる者なるかゞ充分彰はされないで、換言すれば、如何するのが人類全體の生々發展の道であるかといふことが、今日また充分確定、表明せられて居らないから、即ち豹の全體が表はされないで、唯其班の一つ二つのみが表はれて居るまでゞあるから、人々の間に、或は列國の間に、彼が正義である、此が正義であるといふ間に違見が生じ來て惑ひ易いのである。併し人類の經驗、智識が今日よりも一層發達した時には、人類の正義は何であるかゞ、充分明かなることがありませう。

斯く正義の概念を分析して考ふれば、正義を創くる爲めに戰爭するといふ議論は不都合のことと思ひます。此論を主張する論者は、國家が戰を宣するに當りて、正義人道の爲めに已むを得ず干戈に訴へるといふのは單に列國の同情を博して、作戰に都合よくせんとの國家のプルーデンシアル、アクトに過ぎないといふのである。成る程前申した通り、今日の狀態に於いては、何が人類一般の道であるか、即ち人道であるかゞ、よく判然して居らないが爲めに、日本で自分のことを正義といへば、露西亞でも自分のことをば正義といつて、所謂烏の雌雄を知らないやうである。即ち正義なる者は、客觀的に存在しないやうである。併しそは吾人々間の智識が淺いために、唯、然やうに見ゆるのみであつて、眞實ではない。正義人道の爲めといふことが、列國の同情を惹くといふのは、漠然ながら、客觀に或者の存在することを默示するものである。此明かなる事實を無視して、國家の戰爭は正義を創くる爲めで必要あるといふことを論ずる說には賛同致すことは出來ませぬ。

以上十二點に亘りて非戰論、是戰論の論據を批評致しましたが、猶此の外にも幾何もありませう。先づ僕の氣の付いた處は此んなもので御座います。（終）

新艦建造意見（續）

有川貞介

三　裝甲巡洋艦

前號に於て論じたる快戰艦に比し、其排水量に於て且つ他の點に於て多少劣れるも而も相當の攻防力を有

する艦型を稱して之を裝甲巡洋艦といはんと欲す、今此級に屬するものを列强に求むれば

(イ)英　カウンテイ、クラス
(ロ)英　アーカイル級(カウンテイ、クラスの改良型)
(ハ)佛　スリ
(ニ)獨　ローン
(ホ)米　チヤーレストン

等を見る、而してこれが武力噸數等は次の如し

	排水量	防禦力 帶甲	防禦力 甲板	防禦力 主砲	副砲	攻擊力	速力
(イ)	九、八〇〇	四—二吋	二—四分ノ三吋	五—四吋	四吋	十四門六吋	二三
(ロ)	一〇、七〇〇	六—二吋	二—四分ノ三吋	六吋	六吋	四門七、五吋 六門六吋	三、四分 一
(ハ)	九、八五六	六—四吋	二吋	七、二分	一吋六、三分ノ一—五吋	二門七、六吋 八門六、四吋	二二
(ニ)	九、三五〇	四—三吋	二、四分ノ三吋	六吋	四吋	四門八、二吋 十門五、九吋	二二
(ホ)	九、七〇〇	四吋	三吋	四吋	—	十四門六吋	二二

今之を比較するに(イ)は最も速力に於て優秀なり、就中此型なるサッフォーク號の如きは全速力二四、七哩に及べり、然れども防禦力比較的不完全なると、六吋砲を上下に幷載せる不利益あり、且つ其砲力が重甲を穿貫するに足らざる缺點あり、故に(ロ)に於ては(イ)の八門の六吋砲を撤し代ふるに四門の七、五吋砲を以てし、尙四吋の裝甲を六吋に改めたり、而して速力に於ては却つて四分の三浬を減ぜり、是れ英國海軍當局者の改良せる所にして、サーウイリアム、ウワイト氏も之れに關係せり、然れども前後砲塔の單裝の七、五吋砲は何が故に幷裝とせざりしや吾人の甚だ疑ふ處なり、由來英國は單裝を尙べり、デユーク、オヴ、エヂンバラー、ドレーク、クレッシー、パワフル等の各級皆然り、これ素より速射砲にありては發射度の增減は威力に至大の關係を及ぼすが故に其增加を欲する點より單獨ならしめたるものなるも、前後砲塔にありては舷側に於ける時の如く必ずしも幷裝を排斥すべきに非ず、而して六吋砲を六門に減じたるは四門の七、五吋砲に依賴するの過大なるより生じたるか將た裝甲の增重より生じたる當然の削減なるか知らざれども、少しく過大の減少たる嫌あり、今兩艦の發射彈量(一分間に全砲を發射するものとす勿論此には小速射砲を除く)を比較せば

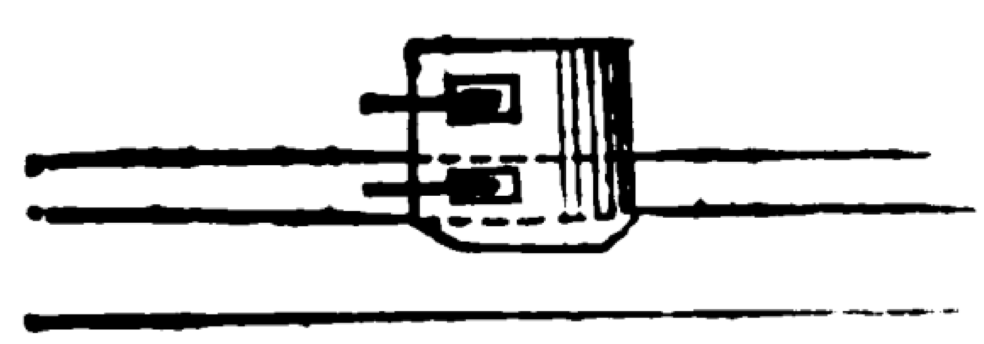
(イ)一四、〇〇〇英斤(ポンド)
(ロ)　九、二〇〇英斤

而して其砲口射力(マツズルヱナーヂー)を比較すれば

(イ)七三五、〇〇〇呎噸(フートトン)
(ロ)六一三、八〇〇呎噸
(但し六吋及び七、五吋砲共に四十五口徑とす)

これによりて見れば(イ)は遙に優勢なり、但し穿甲力

に於ても、五吋の優れるは論ずるまでもなし、而して前後部舷側に於ける上下幷裝砲塔（ダブルストリードケースメート）(圖を見よ)の六吋砲が不結果なりしは主として其裝置の不良なりしにより決して六吋砲そのものゝ罪にあらず、されば(ロ)の七五吋を四門搭載せるは甚適當ならんも、能ふべくは二門の六吋を單裝として舷側に增加せんことを望む、常



に英國式は排水量に比して裝砲の少きを特色とす、こは我國の諸艦に比すれば尙分明なるべし

(ハ)は攻擊力と速力とに於て不充分なり、(ニ)は防禦力と速力とに於て劣れり、(ホ)の前後の最主要部に於て六吋を單裝せるは艦内に於ける地形利用上惜むべし加之裝甲部甚短縮なり。

今玆に以上論ぜし處を綜合して研究するに船型は(イ)式により、前後砲塔に八吋を幷裝し舷側に六吋砲十二門(上甲板四門下甲板八門)を單裝せば十分なるべし、但し(イ)より一千五百噸を減ぜる以太利のギューセペ、ガリバルディ號の如き、兩舷に十四門の六吋を裝へる例なきに非ざれども砲力二門を增加する爲めに速力を割愛せざるべからず、抑も此種の艦は速力が最重要の武器にして戰時に於ける三浬の速力の差は二門の六吋以上の差を生ず、故に砲力の增加より寧ろ速力の增大を望まざる可らず、次に裝甲は(イ)式に於ては不充分なり宜しく六吋板を以て新式集中砲塔（コンセントレーテッドケースメート）を作るべし、但し上甲板に於ける二門の六吋は別の砲塔を用ひて可なり、水線に於ける舷側裝甲は中央部に於て六吋を用ひ前後は三吋にて全艦長に及び防禦甲板は二吋を以て斜に覆ふ、而して排水量は(ロ)に從ふ即ち

排水量	帶甲	甲板	主砲	副砲	武力	速力
一〇、五〇〇	六-三吋	二吋	七吋	六吋	四門八吋 十二門六吋	二三浬

以上說明したる三種の艦型は主戰艦隊を編制すべきものにして、吾人は常に排水量武力の增大せる新型を提出せり、獨伊の造船家が及ぶ限り僅少の噸數を以て而して攻擊力防禦力に於て優勝ならしめんとに努むるは、技術上に於て正に賞讃の價値あるも、實戰に際し英艦に多く見るが如き大噸數の艦型に對して果して效力あるべきや否や疑ひなき能はず、故に吾人は實戰上の利害より見て寧ろ排水量を增大せんと欲す。

又防禦力に於て吾人の提出せる新型は決して十分なるものにあらず、裝甲角度、背面に於ける炭庫、防禦甲板等あらゆる適度の防禦力を裝ふも到底近時の四五

口徑の十二吋砲に對しては完全に防禦し得べきものにあらず、二月九日の戰の如き十二吋砲の命中は之を天に任し、唯八吋以下に對する完全なる防禦を以つて滿足せざるを得ず。

砲數を增加するは必らずしも困難なることに非ず、吾人の新型に於ても重快戰艦型に更に二門の七、五吋を裝ふは不可能といふにあらず、然れども砲の多數が常に有効なるにあらで射角の大、射度の速かなる、而も命中の精確なる、これ砲の威力なり、單に多數をのみ貴ばんかリユーリツクの嘲笑を招くに過ぎず、四門以上の十二吋砲を有する威力は强大なるも容積重量に對する排水量の比例は未だ各國の計畫をして漫に十二吋の搭載を增加せしめずこれを實行せんが爲めには艦型、機關を一新せざるべからざれば也。

近時タルビン式と稱する新式の機關あり、こは容積比較的小にして而も可驚大馬力を現出せしむといふ、今尙ほ試驗の時代にあるるものにして、近き將來に於て發達すべき望あり、我十年計畫の後期に至らば之を採用するに至らん、彼の英船アメサイスト號は既に之を應用せしと雖も、曩にはバイパーコブラの失敗あり、近時稍成功に近きものとしては英國海峽橫斷船（クロスチヤンチルスチーマー）あるも、未だ滿足の結果を示すに至らず近時完成せし有名なるキユナルドの大船は吾人の注目に値す、これタルビンの機關がよく六萬の大馬力を出して三萬噸の巨船を二十五哩の速力を以て續航せしむるを見る、此結果は決して輕視すべからざるものあり

其二　國防艦隊

巡洋艦―偵察艦―水雷砲艦―水雷驅逐艇
―水雷艇　附潜航艇

吾人は既に多少軍艦建造上の智識を得たるものとして以下省略して之を述べん

一　巡洋艦

巡洋艦（クルーザー）に二種あり、一は裝甲なるもの、一は裝甲なきもの、今は後者を意味するもの也、而して玆に提出すべき新型として吾人は智利のブランコエンカラダーを推さんと欲す、裝砲二門の八吋、十門の六吋、速力二十三浬七八、噸數四千四百噸なり、吾人はこれに一千五百噸を加へ、砲塔に於て六―四吋の裝甲を行はんとを欲す、板楯を以つて保護すと雖も爆發力强大なる火藥に對しては却つて危險を甚しくするの恐あり、か

くて吾人は下の艦型を得

噸数	防禦力			装砲	速力
	主砲	副砲	甲板		
六、〇〇〇	六吋	四吋	一、四分ノ三吋	二門八吋 十門六吋	二三

此の如き艦型は國防艦なると共に戰時運送船の護衛として最も適當なるべし

三 偵察艦

此艦型としてはノビック號を以つて最成功せるものなりとすべし、吾人が最近旅順の海戰に於て認め得しが如く、ノビックの活動は一に其快速力による、此外此種の艦型としては英にアドベンチスーア式あり、然れども此兩型は共に装砲薄弱にして僅に其速力と淺吃水とを以つて主なる武器となすに過ぎず、而も戰爭は常に淺吃水の所にのみ起るにあらず、且又砲の威力は六吋と雖も非常なる遠距離に到達する者なれば到底遁逃の時の外利益なきを認むべし、若し此艦がこれと同種の艦型にして六吋砲を有するものと會戰せば、他艦の擊破に先ちて先づ自ら轟沈するを免れず、無装甲艦に對する六吋砲の威力は恰も狼の羊に於けるが如く到底抵抗の比にあらざれば也、されば装砲に於てはノビックの六門四、七吋砲に代ふるに四門の六吋を、八門の一、八吋に代ふるに八門の十二斤砲を以てし、而も速力はノビックの二十五浬を襲用せば最も滿足すべき艦型を得べし。

四 水雷砲艦

こは大水雷驅逐艇と稱すべきものにして近時列强によりて棄てられたる型なり、そは驅逐艇に比して速力弱く、而も三等巡洋艦の威力航續力に對しても拮抗する力を有せざるが爲め也、然れどもこは艦として建造せんとするが故に成功せざるものにして、之を艇として改良せば必ずしも棄つべきにあらず、現時水雷艇は米英に於て漸時排水量を增加するの傾向あり、これ最も注目すべき點ならんか、吾人は此增加を更に大にして六七百噸となし、驅逐艇の十二斤砲に代ふるに一門の四吋を、五門の六斤砲に代ふるに八門の六斤を以てし速力を約二八浬に減じ、航續力凌波力を增大せしむべき事を主張す。

此は我主戰艦隊に向つて攻擊をなす敵の驅逐艇に備へ、之と會戰するの目的とすべく、自ら水雷を發射するは第二の目的ならしむべし、而して或場合には遠洋

を航するの安全を齎し得べけん

五　水雷驅逐艇

現時最も普通なるは四百噸の排水量を有す、これ最も適當なるもの丶如し、英にありては五百五十噸の大型あれども寧ろ發覺され易き處あり、此種の有功なるは二月九日以來其例證極めて多し、今後益々之が建造の必要あり

六　水雷艇附潜航水雷艇

一等水雷艇以下諸種のものを合すれば非常の多數を要すべし、我邦の沿岸到る所水雷艇の出沒に適し、これが出沒する間は如何なる艦隊も海岸に接近する能はず、國防として最適切なるは英國海峽の防備に鑑みて明なりとす。

尚最近の發明に係る潜航水雷艇あり、今日尚ほ不完全の狀態にあるも近き將來に於て必ず進步完全すべき望を有す、其結果を待つて之が建設をなすべきは論を俟たず。

以上余は私見として新艦建造案を述べたり、余は門外漢なり、其所論の如き正に齟齬撞着を以つて充さるゝは自ら疑はざる處、斯技專門の人の眼に映ぜは殆んど一笑の價値すらなきものなるべし、且つ艦の製造は余の說ける如く單に攻擊防禦の力のみを以つて論ずべきにあらず、尚諸種の方面より精確なる論評を加へざる可らざるは云ふまでもなき事なり、而も今回の日露戰爭によりて吾人素人が幾何の智識を得たるやを知るに足るものあらば、また一興とすべからずや。（完）

教育と生存競爭

久津見蕨村

（一）

教育は力なり。教育あるものと之なきものと心意的若しくは技能的の競爭をなすことあらば、教育なきものは之あるものに敗れざるを得ず。勿論境遇若しくは金力等の條件にして其競爭者の一方に加はる時は勝敗の結果を異にせしむ可きも、而かも毫も是等の條件なき場合に於ては、教育あるものは之なきものに打勝つべきこと論を俟たず。文明人と野蠻人との間に生ずる

競爭が、必ずや前者の勝利に歸するは、爭ふ可らざるの事實なり。

普通の場合に於ける勝敗は力の强きものゝ勝利に歸するを常とす。教育あるものゝ之なきものに勝つは、前者が教育の力を有するが故なり。知識ある人は往々之なきものに對して理を非として論爭し、而して議論に勝つことあり。是れ知識の力あるに因る。知識は教育の養ふ所に屬す。教育の力なること是等の事實を以て明かなる可し。

教育既に力なり。之を得たるものは即ち力を得たるなり。競爭に勝ち得べき力を得たるなり。富者は貧者を虐し强者は弱者を壓すとて社會主義の人は痛く之を忌めり。勿論忌むべきことなり。而して教育と云ふ好名稱あるものも、亦斯く力なるが故に、之を得たるものは之を得ざるものを虐することあり。教育を以て仁義人道の事業とすること一般の異存なき所なれども、然れども往々有教育者が無教育者を虐して悲慘の境に陷らしむ。文明人が野蠻人を驅逐して良好の土地產物を掠奪するは即ち之にあらずや。社會の有力者と稱する有教育の階級が無教育なる多數の人民を酷使して、其勞力に生ずる利益を壟斷するも亦即ち之にあらずや。故に教育は必ずしも常に仁義人道の力となるものにあらず。時として暴虐力たり。若し夫れ人道派の教育論者が主唱するが如くに、教育が單に人道の發揮にのみ止まらば、誠に幸ひなりと雖、而かも、今日の教育は一般に唯人に競爭に打勝ち得べき力を授くるに過ぎず。乃ち斯の如く暴虐力の養成に外ならざることあるに至る。

若し或は之を疑ふものあらん乎。疑ふものは試みに今日の生產社會の狀況を稽査せよ。貧富の競爭は至る所に行はれつゝあり。資本家又は地主と號する富者は職工又は小作人と呼ぶ勞働者に對ひて殘酷の事を爲しつゝあるなり。慈悲心ある資本家、地主と雖、恩惠を以てするの外には、其利益を勞働者に分つことを爲さず。其生產に對しては極めて寡少なる賃金を與ふる代りに極めて過大なる勞働をなさしめつゝあるなり。此資本家又は地主と號する階級は即ち教育ある階級にして、勞働者と呼はるゝ階級は教育なき階級に外ならず。其間二三の除外例はあるべきも、其は極めて少數なる可し。而して勞働者は如何にしても、資本家、地主に敵する能はず。其壓搾に遭ふも涙を吞みて之に從ひ、日に悲痛の生活を送り、資本家、地主は常に社會を橫

行濶歩して奢侈放逸なる生活をなす。兩々對照し來れば同じ人間に生れながら何故に斯くは苦樂を異にしたるやを怪まざるを得ざるなり。抑も斯の如き所以のものは他に原因も存すべし。而かも教育ある階級が教育なき階級を虐する所以、即ち力の有無の間に生ずる競爭の悲劇なり。更に詳言すれば人間の生存競爭が公平に同力量者の間に行はれずして、甚だしき力の懸隔即ち教育の有無の間に行はるゝが故に、爾かく一は甚だしく傲り、他は亦甚だしく悲むの不調子不公平を演じ出せるなり。

（二）

社會の生存競爭の悲慘にして甚だ不公平なるは、夙に明敏なる經濟學者――殊にカール、マルクスの如き人の注目する所となり、之を除かんが爲めに、最も大膽にして而かも物質的なる社會改革の企圖を行はんとするに至れり。然れども此企圖を以て全く人間の生存競爭を除き得べきや否やは疑問に屬す。

惟ふに此企圖に出づる社會の改革即ち資本土地の公有、生産利益の公平なる分配、直言すれば社會主義の實行は、社會の不公平なる生存競爭の慘劇を緩和する所以の物質的良法の一たるを失はざる可し。然れども人間の生存競爭を全滅することは恐らくは不可能に屬せん。是を以て其競爭の精神を改良する所以の別法なかる可らず。生存競爭が到底全滅すべからざるものならば、之を吾人々間に取りて最も公明にして且最も快濶なるものたらしむるは、是れ寧ろ快心の事にあらずや。

今の社會の生存競爭は既に說けるが如く、多くは力あるものと力なきものとを取組ましむるが如き不愉快なる角力に同じ。一方に教育あるものを置き、他方に教育なきものを立たしめ、而して生存の競爭をなさしむ。教育あるものゝ間にも、教育なきものゝ間にも生存競爭起るべけれども、有教育者と無教育者との間に於て殊に競爭起りて殊に悲慘なる敗者を生ずるなり。大關と犢鼻褌擔ぎとを土俵に立たしめ、相撲を取らしむるを以て愉快なりとするものなきが如く、有教育者と無教育者とをして斯く生存競爭をなさしむるは、不愉快不公平の甚だしきものなり。犢鼻褌擔ぎが痛く投げ付けられて足腰立たざるに至ると一般、無教育者は亦甚だしく敗れて悲慘に陷るの不愉快不公平を演ずるを常とす。而して是れ識者の最も厭忌する所以なり。

今日文明的の競技と謂ふは、競爭の公平を維持する

ことを力む、自轉車の競爭にハンデキャップ（割增競程）を設け、競馬に速度の均一なる馬を選ぶが如き此一なり。而して武士の戰場に敵に向ふ、敵の武器を有せず、甲胄を着せざるを擊つを以て卑怯の振舞とす。敎育あるものが敎育なきものと競爭して之に勝ちて傲慢を極むるは、所謂文明的競爭にあらず、勇士に對して恥づべきことなり。須らく天下の人をして悉く敎育あるものたらしめ、而る後に堂々として競爭すべきにあらずや。是の點に於て社會主義の實行は恰も社會生存競爭に於けるハンデキャップを設くるの類なり。

（三）

然るに今日の敎育は富者の獨占に歸せり。尋常小學は僅かに無月謝制を布き得たれば、尋常科程度の敎育には貧富の懸隔なかるべきに似たり。而かも尙此低度の敎育をすら受け得ざるものなきにあらず。是れ衣食筆墨紙並に書籍等敎育用品の缺乏に因るもの多しとす。只さへハンデキャップを要するものにして、斯の如く敎育を受くる能はず。即ち力を有する能はず。是れ既に兒童の時に於て生存競爭の敗者たるべき運命を豫定せられたるなり。而して尋常科以上の敎育に至りては、富の度に比例して敎育を受くるの難易を異にす。財力あるものは高等の敎育を受け得べく之あることなければ、中等以下の敎育に甘ぜざるを得ず。到底或る度以上の富を有するものにあらざれば完全に敎育を受くることを得ざるの制度なり。其富を有せざるものは如何に天の賦與に由りて才能に多幸なる人も、敎育を以て之を開く能はず、空しく天賦の才能を萎縮せしめざるを得ざるに至る。之に反して富を有するものは、例令凡庸の徒と雖黃金を以て敎育を買ふことを得べく、天賦以上の力量を僥倖し得べし。乃ち玆に社會の各人をして天賦の才能の差等以外に人爲の差等を甚だしからしむ。而かも妄に之を放つて社會に生活の競爭を爲さしむるが故に、他の社會制度の爲に懸隔せる各個人は其才能力量に於ても亦益す懸隔を大ならしめ、其競爭の敗者をして殊に最も甚だしき悲慘を極めしむるに至る。敎育てふ好名稱あるものにして人を虐するの結果を見るは即ち此にあり。財富を以て敎育を獨占せしむるに因て、以て此悲しむべき慘劇を見、敎育に對して殘虐の名を與へざるを得ざるに至らしむ。富力を以て敎育を獨占せしむる現今の制度は、即ち敎育の神聖を瀆し、社會の悲慘を增さしむる所以に外ならず

（四）

天才奇才は多くは富者の階級に生ぜずして貧者の階級に生ず。貧者の階級に生じたる天才奇才は、多くは非常の辛苦を以て教育を受け若しくは自から己れを教育す。是れ人傑の傳記の吾人に教ふる所に拘はる。若し貧者の階級をして自由に教育を受け、知識を無賃にて買ふことを得せしむるあらば、蓋し更に多くの人傑を此階級よりして起たしめ得べし。畑に蒔ける百万の種子に肥料を與へざるも、尙且四五の良苗を得るものならば、之に一般に肥料を與へなば、更に多くの良苗を得べき理なり。教育を富者の獨占に歸するは人傑を求むる所以に反す。

今日の社會は富者の階級の支配に屬す。凡の物は其社會にある限りは皆彼等の占有する所たり。教育亦爾かく彼等の經營し獨占する所なるや亦勿論なり。故に貧者に教育を與へざるべく財力を以て教育を賣買すと云はゞ亦何にか云はんやなれども、然れども敵に劒を與へずして戰ふは武士の耻づる所ならずや。況んや貧者は富者の仇敵にあらず同胞に外ならざれば、彼等を無力ならしめて而して競爭するは心あるもの丶耻づる所ならずや。乃ち教育を富者の獨占たらしむる制度は仁義博愛の理想に反し、又武士道に反す。今日社會の中心力たる富者は須らく武士の襟度を以て速に富者獨占の教育制度を撤退し、貧者の階級に如何なる教育をも普及せしむるの制度を立つ可し。

教育は普及を尊ぶ。二三個人に占有せらる丶の教育は、他の總ての人民に取りては暴虐力の養成を意味す。二三個人の特に他の一般人民より優等なるは、他を指辱するの益ありと雖、亦往々己れの爲めに他を虐待酷使すべき所以の好名目を案出するの奸智たるに止まることあり。隨て一般の人民より見れば唯害たるのみにして利たること稀れなり。知識が屢ば他を害する用にも供せらる丶間は、單に二三の個人のみを教育するは甚だ恐るべき結果を招く所以なり。此點よりするも教育を富者の階級に獨占せしむるは、一般人類の爲に善をなす所以に非ず。

今日の教育制度は教育の普及を以て本來の性質とす。然るに他の部分には富者にのみ之を占有せしむる條件——授業料の徵收、書籍其他の自辨等の制あり。制度夫れ自身に於て旣に矛盾すと云ふ可し。制度夫れ自身より見るも、此矛盾を去りて其當然の性質なる普及の一方のみを取らざる可らず。即ち何人をも金錢の

有無に拘はらず教育するの仕組となさゞる可らず。

（五）

茲に於て現今の教育制度に對して先づ二個の根本的改革の要求を生ず。

（甲）初等より高等の教育に至る迄、個人は何等の費用をも要せずして、之を受くることを得るの制となす事。

（乙）總ての教育は總て公明なる態度を以て生存の競爭に從ふ所以の力を個人に養ふに力むべき事。敵に武器を授けず又は他の無力なるに乘じて襲撃するが如き卑劣奸詐の精神を起さしめず、所謂文明的競技の如く、又勇士の襟度に學びて、而して實に對等の力にあらざれば敢て競爭を試みざる高尙の精神を涵養する事。

甲の根本的改革は現今の邦國に於ては、之を爲すに難んずべしと雖、然れども國費の中高尙なる理想を以てすれば、極めて不用なるもの多し。元來政府なるものは天下の最も甚だしき亂費者にして、人民に取りては反て害毒の流源たるべきものに向ひても、亦多大の費用を抛つことを得意とす。若し政府にして反省して是等の費用を節せん乎、如何なる政府にても其國の人民の子弟を一切教育して、悉く之に高等の學識を具へしむるの費用を得べきや明なり。大學より尋常小學の末に至るまで悉く之を無授業料とし、生徒學生の自活し能はざるものは其生活費を與ふるも、尙且つ百万の兵を養ふよりも廉價にして成就すべし。乃ち此事や甚だ難きに似たれども亦必ずしも不可能にあらざるなり。

乙の根本的改革は教育の精神に關す。而して今日の教育と雖、通般の高尙なる精神を養はんことを欲せざるにはあらず。人道を語り仁義を說くは由來之あるに因る。此精神を養ふは即ち或は易々の業なりと云ふものなきにあらざるべきも、然れども人道仁義の教は今日に於ては唯夫れ社會の粧飾具たるに止まる。實際は各個人の內に燃ゆる火の如き慾望のみを以て天下を動かしつゝあり。人間の生存競爭と云ふも其實は禽獸の生存競爭のみ。私慾と私慾とが人道仁義を粧飾とせる衣服を纏ひて詐欺の微笑を含み、僞善の假粧を以て社會に競爭を試むる耳。其間に於て人道仁義の無勢力なること憐く可く、人皆自から己れを修めて人を虐することなきを期するは稀れにして、唯夫れ人を苦めて己れを樂ましめんと欲す。斯の如き時に當りて夫の精神

を養ひ之を實現せしめんとするは、誠に難き業なり。天下に卑劣なる武士充ちて、眞の武士道を解せず、暗撃欺襲のみ流行する際に當りて、白晝公然として對等の武器を用ひ、而して潔く決戰すべしと教ふ。恐らくは迂愚の道として聽くものなかる可し。乙の根本的改革を教育上に求むるは恰も之に似たり。行ひ易きが如くして其實は然らざるなり。

遮莫あれ、外面に於ては教育制度の改革を以て、總ての教育を無賃無費用とし、內面に於ては卑劣の競爭を爲さゞる高尙の精神を養ふに力めざる可らず。而して最後に最も根本的なる精神の發揮を要す。即ち「各個人に自から主とし自から治めて毫も他に干渉せず、又他の干渉を仰ぐを要せず、獨り立ちて自由に歩み而して亦毫も他を虐せず、又他の虐する所とならざるの精神勢力を養ふこと是れなり」。此精神勢力にして各個人の身に完全に養はれんか、卑劣なる競爭は迹を斷ちて、公明正大なる勇士の競爭のみを見るを得べし。是に於て乎人間社會に行はるゝ禽獸的生存競爭は止みて、神性的生存競爭を現するに至らん。吾人は此境を想望して其必ず悲慘ならず、壯烈恰も高尙なる悲劇の美を見るが如くなることを知る。人間生存競爭の極致蓋し是ならざる可らず。

教育は力なり。爾かく神性的生存競爭をなすの力を公平に一般の個人に養成すべき也。

拒否す可らざる神の思想

黑岩周六

私は今此拒否す可からざる神の思想と云ふことを演題に掲げましたが、此神と云ふ思想は昔からモードの社會にもありますることとて皆樣の御存じの通りでございます。併し其思想が人智の進むに隨ひ、段々間違つたところが見出されて、元と神であると考へて居たものが、是は神でないと斯う打消されることになりました、そして今まで段々打消されて進んで來て、今日になりましては餘程又進んだ思想がございますが、併し此打消すことが出來る即ち拒否することが出來ると云ふのは、それ丈間違があるのでございますから、神の思想に限らない總て人間の思想と云ふものは打消すことの出來る方から打消すことの出來ない方へ移つて行

くが進歩であつて、世の中の事物と共に神も拒否すべからざる所へ段々進んで行くは是は云ふまでもないことであります。

其思想の變遷はどう云ふ具合に來たかといへば、一番初めは此總て物を拜する所謂拜物教、或は山を拜むとか、或は樹木を拜むとか禽獸を拜むとか云ふ具合に、總て物を拜んだのが一番幼稚な神の思想であつた、それから段々それが偶像教となつて、木で刻んだ佛樣の如き物を拜むと云ふやうなことになりました、併ながら此偶像を拜むと云ふことも今日考へて見ると拒否することが出來る、どうも人間が自分の手で刻んだ木像に何んの神樣があるかと斯う考へると、是もさうでないと云ひたくなりますからして、西洋の基督教の如きは今では一神教を教へて居るやうであります、併し能く考へて見ますると云ふと、一神教と云ふものが果して是は偶像教でないかと云へば、私共が考へる所では是はモー偶像教の極點である、耶蘇基督と云ふ一人の人をば木に刻んで信じ或は十字架を掛けて之をどうかうすると云ふことになりまするど、詰り此偶像教が一層極點に行つて、多くの偶像が一つになり、それから形のある偶像が形の無い偶像になつて、さうして今日に存して居る、それであるからして若し嚴重なる批評眼を以て之を見る時には基督教の云ふ如き神と云ふものは、決して是は拒否すべからざる神ではない、それはどう云ふ所に缺點があるかと申しますると、畢竟此基督教の如き一神教は、一つの神をば誠に人間と能く似た物のやうな考を起し、世の中の事物を説明するのに、總て人間が物を造ると云ふやうな考で説明する、正に是は神が造つて呉れたのである、天に日月の輝くのも神が造つた、世の中の森羅萬象悉く神が造つたのであると、斯う申しつゝ、神とは何んぞやと云ひますると、完全なる力を持つたものと申しますが、此完全と云ふことゝ世の中を造ると云ふこととは決して是は兩立するものではない、なぜと申しまするど、此物を造ると云ふのは、詰り或不完全を補ふことでございます、一つのコップを造るならば何故にコップを造るかと云ふと、人間の手がコップの役をしないから仕方なしにコップを造る、或は眼鏡をかけるは眼に不完全の所があると云ふことが主である、又杖を突くと云ふても身體に不完全の所があればこそ杖を突くのであつて、神が若し人間の如く或は人間の想像することの出來るものであつて、それが社會を造つたとなれば、神

は何を苦んで世界を造つたかと斯う云ふ疑が直ぐ出るのであります、或は神は慰みの爲に世界を造つたと申しまするど、其神と云ふものは何か自分の外の或物を以て慰藉して貰はなければどうも不十分を感ずる神であると云ふことに歸着する、慰みの爲ではない義務の爲に造つたとしても矢張不完全と云ふ思想が伴つて參りますからして、若し神をば宇宙萬物を造つたものとすると、其造られた宇宙が如何に働くものにしても亦其宇宙に籠つて居る物が如何に立派なる物にしても、必ず其神そのものに不完全なる所があつて宇宙を造ると云ふ所の一の動機が起つて來たものと察しなければならぬ、本當に完全なるものにかゝる動機の起る筈はないのであります。

　それで今日の所で一般に申しまするど、神人同形說——神と人間と同じやうな形を爲したと云ふ想像が幾らか殘つて居る、其神の思想と云ふものは自家撞着である、世界を或者が造つたと斯う云ふことは、マア世界を造るならば非常に完全なものでなければならぬが、其造つた其者が或ものを造ると云ふは其言葉の中に既に撞着があるので、若し嚴重な批評を以て云ふ時は此神人同形說は此上に於て立たない、其他に尙ほ色々の批評もございませうが、兎に角今の哲學者が神人同形說を惡いと云ふのは、神人同形說では神の完全を證據立てることが出來ない、若し神の完全を證據立てやうとすれば、神が宇宙を造つたと云ふ議論か破れて仕舞ふ、兩方共立てることが出來ない、

　然らば此基督敎の如き一神敎から又一層進んだ所の神の說は何かと申しまするど、是は汎神論である、神が宇宙萬物を造つたのではない、宇宙萬物が既に悉く神の表現である、神と宇宙萬物とは區別することは出來ない、斯う云ふやうな意味の思想でありますから、是は汎神敎とも云ひ又或は萬有神敎と云ひ、種々樣々の名を付けますが、兎に角是は神人同形說より一層進んで居るには違ひないのであります。

　併ながら此汎神論とても亦非難を免れない點がございます、先づ今の世界に於て神と云ふ思想に於ては汎神論が一番進んだものだとなつて居りますけれども、若し是を本當の眞理として、世の中の物は總て神の實現であつて、何物も神其ものであると斯う云ひまするど、其實是は物質論になつて仕舞ふ、決して是は有神論になつて居ない、なぜと申しまするど萬物皆神でありますから私も神である、諸君も神である、爰にある

コップにしろ水瓶にしろ悉く神と致しますれば、何も吾々と區別して神と云ふ思想を起するに及ばぬ、吾々が神であつてそれから世の中の物の動き且つ變化する有樣は悉く神の變動である、神の働きであつて神てないものは少しもないと致しますれば、是は取分けてこゝに神があると云ふ譯でない、それてありますから汎神論と云ふものはどのやうな物質論者ても是は信ずるとは出來る、如何なる物質論と較べて見ても少しも撞着する所なくして殆んど是は拒否し難い所になつて居りますが、併し汎神論は神が有るか無いかと云ふ兩極端になつて仕舞ふ、或學者が云つて居ります、私は無神論者てありますと云ふは餘り無作法て、集りの席て云ふは恥かしい話てある（それは西洋のことてございませうが）何んと云つてよいかと云ふと禮儀正しく私は汎神論者てございますと斯う云へばよいと云ふのでありますが、宇宙萬物皆神てあると云ふと神は無いと云ふことになりますから、どうも此汎神論は大なる神に對する深き思想を養ふと云ふことは出來ない、今まて此汎神論の著書或は講義の如き物が澤山ございますが、汎神論には神と指して認むべき物はない、世界の物は皆神であると認めると同時に特に神はどう云ふものかと云ふことを認めることは出來ない、先づ大體に於ては汎神論が或はよいかも知れませぬが、併し兎に角汎神論は無神論を去ること誠に近いものでございますから、若し此嚴重なる批評を以て云ふ時には、是よりモー一層進んだ神の思想と云ふものがなくてはならぬ。

かゝる思想が果してあるかないかと云ふことは誠にむづかしい議論てありますけれども、是は別に新しい議論てはありませぬ、隨分日本ても今日まて云ふて居る人が澤山あり、殊に西洋諸國ては哲學者と云ふ哲學者は皆言ふて居りますが、それは何んてあるかと申しますると、絶對無限の思想てある、所謂アブソリュート或はアンコンディションと云ふので、實に宇宙の大と共に大いなる所の何か一つの絶對の物があると云ふ思想てございます、此思想はどう云ふものてあるかと云ふことは大變說き難い事柄てございますか、之を能く味つて見ると云ふと、何人も信ずべき又何人も之に依つて慰藉を得ることが出來、又大いに勵まされることも出來る一つの神の思想が出て來るやうに考へます、それは私のみてはない獨逸邊りの昔の哲學の傾向が總て絶對と云ふことを根據として、それから絶對に依つ

て世の中の總ての現像を考へる、それから此頃西洋の進歩した汎神論者も其多くは絶對と云ふことをインフイニチーと申しますが、インフィニチーと云ふは無限と云ふことで、殆ど限りないと云ふことに依つて言現はして居りますが、此絶對と云ふことはどう云ふものであるか、是は到底私共の言葉で説明することは出來ませぬが、極く平たい所で考へて見まするど云ふと、先づ此吾々人間の智恵に分らない物は種々樣々ございますが、其内の一つは極く分り易いやうで分らない、例へば世の中で云ふ濱の眞砂の數の如きて、濱の眞砂がどれほどの數があるかと云ふことは誰にも分るものでない、けれども其數は絶對的に分らないものであるかと斯う考へますと絶對的に分らないことはない、何所の濱の眞砂でありましても必ず確かなる數があるに違ひない、唯人間に數へられないと云ふに止まつて若し數へ得る手段があつて數へて見れば何千何百億と云ふ極めて確かの數があるに違ひない、其確かの數は誰が知つて居るか、誰も知らない、誰も知らないけれども、誰も知らないと云ふ爲に其數は分らぬと云ふことは出來ない、絶對に人には分らないかと云ふと絶對には分つて居る、又昔の歌に「ほとゝぎす鳴きつる方を眺むれば唯有明の月ぞ殘れる」と云ふのがあるが、是はほとゝぎすが鳴いたから見たが見えない唯月が照つて居るばかりである、其ほとゝぎすはどちらから飛んで來てどちらへ行つたか少しも分らない、併し是は誰にも分らないことかと云ふと月が見て居つたので月には分つて居る、或は此頃戰爭の報告などを讀んで見ると何名戰死して何名行衞の知れない者があるとございますが、果してそれが行衞が知れないかと申しますと、行衞の知れないと云ふことはない筈である、あつた兵隊であつて見れば何處へか行つてどうかなつて居るに違ひない、行衞が絶對的に分らないのではない、唯絶對的の工風が出來ないから分らないので、何處かに居ると云ふ一つの性質は持つて居るのであります、此絶對と此場合に於て云ふのは、是は能くは分らないが幽かに分るとか或は十分には分らないが分る道はあるとか、其分る度合を示す形容の言葉ではございますけれども此絶對と云ふ斯樣な形容の言葉をばモー一層自分の心の中で約めて之を文字の如く考へて見ると、成るほど人には分らないけれども絶對には分つて居る、其絶對と云ふものはどう云ふものであるかと斯う云つて其形容をば一つの物として能く考へて見まするど云ふ

と、此絶對と云ふことは實に總ての物の極度である、或は濱の眞砂の數にしましても人間は知ることは出來ないけれども絶對には知れる、其絶對は何んであるかと斯う考へれば、知ると云ふ一つの力の極點であると云ふ考の出て來るのは、是は誰の心でも同じてあります。

然らば其絶對の知ると云ふことは、吾々人間の知ると云ふことゝ同じものであるか、或は違つたものであるかと斯う云ふやうに考へなければなりませぬが、斯う考へまする と云ふと、此不十分なる吾々の知ると云ふことゝ此絶對に分つて居る絶對の知ると云ふことゝは、同じ知ると云ふことに於ても大變に違ひのあることは亦認めなければなりませぬ、なぜならば吾々が物を知ると云ふは其知り方たるや極めて不十分の知り方であつて、どうかすると忘れることがある、併ながら絶對の知ることは忘れると云ふことはない、一人の兵士が谷の底に落ちて誰も見出すことは出來ない、行くことも出來ない底の底に落ちたとしましても、其谷底に陷つて居ると云ふ事實は決して消えるものではありませぬからして、兎に角此者は陷つて居る、唯人が知らないのであつて、事實其物はどこまでも事實てありますから、其事實の絶對に知れて居ると云ふことはどうしても忘れやうがない、て絶對が物を知ると斯う云ひますると言葉の上では少しく耳慣れない言葉てありますけれども、其事柄としては確かのことである、絶對が絶對的に知つて居ると云ふことは、吾々が知つて居る其度合とは大變に違ふのである、（次號完結）

右は去月十日高輪中學校紀念式に於て演説せられしもの、若し誤謬等あらば、そは筆記者の責なり

柏軒と華山（其一）

美中天

松井柏軒近ごろ「冷語熱語」てふ小論文集を出版す、皆曾て萬朝報に掲げられし氏が得意の文章也、分つて皇室篇、滿韓問題、戰局觀、政治論、經濟觀、風俗觀、雜篇の七篇とす、其體裁等總て茅原華山が動中靜觀と酷似す、但し其外觀は酷似すと雖も、其内容に至つては則ち大差あり

柏軒の文は流暢なり平凡なり、其議論は正確にして前後一貫條理齊然として一髮も亂れず、是の如きは現今稱に見る文章なりとす、然れども其議論を正確ならしめんと努むるの結果、換言すれば破格の文字、文法以外の文を作らざる爲め、多少文勢の弛める如き觀あり、湖水に舟を浮べたる如く、平々淡々として、婦女子も尙ほ乘るべしと雖も、而も甚しく奇なるものを見ず、彼は文章家にあらずして論文家也、文の奇を以つて人をして眩暈せしめんとせず、眞摯なる態度を以つて人を敎へんとする也

海外新潮

海外大勢

日露平和問題と世論

日露平和問題は現今に於ける最大問題にして其決定如何は直ちに世界の形勢に一大變動を與ふべし。依て歐洲世論の重要なるものを譯出して讀者の參考に資す。

其一　「ガゼット、アンド、エッキスプレッス」

お人好しなる佛國人は極東の時局を豫想して思へらく、旅順にして陷落せば我は露に說き、英は日に勸めて以て目出度平和の終結を見るべしと、彼等は如何なる理由よりしてかゝる輕易なる斷案を下さんとするか予をして少しく日露兩國の平和問題に就て議する所あらしめよ。予は此問題を解決するに先たち、他に一の問はんと欲する所のものあり、即ち我英國が南亞と戰爭をなしたるや、他の歐洲諸國は如何なる條件を以て吾人に平和を勸誘したるか。此答は極めて簡なり。何もなし。實に吾人に提出せらるべき條件一もなかりしにあらずや。抑も世界に跨る程の大國が己れより劣弱なりと思惟し、又何時かは必ず征服し得べしと信ずる小國に敗を取りて平和を結ぶこと能はざるべきは事理の最も睹易き所のものたり、我英國の南亞に於ける寔に斯の如き關係にありしなり。總ての評論家の稱ふる所によるに露國の日本を見ること又正さに斯の如く、彼等が日本を挫折し得べしとの信念は毫も減ぜざるなり、彼等思へらく、極東に派遣したる兵卒は四百万の露兵の十分の一に過ぎざるなり、又最新にして最良なる軍艦の多數は假令戰地より遠隔の所にあるも、未だ其所有する所たり、一再の敗何の恐るゝ所あるべきやと、彼等露人は實に現今の海軍の事情を知ること極めて薄くかゝる呑氣なる觀察をなしつゝあり。事の實際や斯の如くにして、人の思想や斯の如しとすれば、極東に於ける露國の標準たる旅順を敵の手中に委し、以て平和の局を結ぶが如きことは彼等如何てか、之に滿足し得べき。

然れども平和は實にかゝる方法によるの外得るの途なかるべし、朝鮮の保全は日本が戰爭を開始したる時目的となしたる實際の問題ならん然れども旅順の陷落は實に名譽の點の集まる所なり。されば如何なる平和と雖も旅順の問題によつては決せられざるべし、何となれば旅順にして陷落せば露軍は平和を肯ぜざるべく、陷落せざれば日本は平和を結ばざるべければなり、かるが故に予は斷言す、極東の平和は近き將來に於て決して起ることなかるべし、其平和問題の起るべきは露國内部の狀態に非常なる混亂を呈せんとしたる時にあるべきを信ず。

若し又露軍にしてよく日軍を擊退し、日本を侵略せんとの勢を示すことありとせば平和の終結に至るべきも、かゝることは事實上恐らく起り得べからざることなるべし。若し旅順が陷落し、露軍が滿州より追逐せらるゝことあるべきも、彼等は哈爾賓に至りて其恢復を計り、大に軍備を整へ、以て其失態を挽回するに一二年の星霜を費やすには何の痛心をも感ぜざるべし、かゝる長き忍耐は彼等の性質と歷史より考ふるに全く

あり得べきことにして、此行末を思ひ廻せば戰爭の久遠なるべきを嘆息せずんばあらず。

又一方に日本が成功したる曉のことを考ふるに彼は支那の領地を回復すべきも其實際の管理は之を已れの手に於てせんことを欲し、又支那の軍隊の編成及び其訓練等も自國の士官の手に於てせんことを願ふべし。又益々軍隊の數を增加し、滿洲方面に之を派遣するならん、勿論滿洲は支那の領なるも、彼等は之を借用するが如き姿をなし、之に稅を拂ふならんと考ふ。

予輩は事の實際に亘りて時局を見るに眞に危惧の念に堪へざるものありと雖も、然れども日本は恐らく勝利の適當なる時期に於て、適當なる問題を掲げて平和の局を結ぶを希望するものならん、例へば露國が全く滿洲を放棄すること、露國は滿洲鐵道を支那に賣渡すこと、青泥窪牛莊を世界の自由貿易港となすこと等を呈出すべし、是れ最も溫和にして公明に、且つ寬大なる條件なれば、世界の勢力は露國をして其提出を受納せしむるに力を盡すべき義務あるものなりとす。然れども若し此條件が受納せられ、一日平和の終結を見たりとするも是れ決して眞の平和にあらず、一時の休戰と見做すべきものなることは實に世人の注意せざるべからざる事項なりとなす。

ヷール、ヤコプ所載



露帝進退維れ谷る

前には飢孚充ち後には叛逆迫る―

此問題は決して其儘に落着すべきものにあらず。延て歐洲の通商問題に關係を生ずべきは自然の勢なり、他の事は措いて論ぜざるも先づ獨逸は借地問題を起し、旅順を露國に還し、佛國を欺いて千八百九十五年の同盟を作るべきことに誘ふべし、これ等のことは又我英國をも動かさずんは止まざるべく、今回の事件につきて樂天觀をなし、平和が速かに來りて兩國莞爾として握手するが如くに說くは事の實際を知らざるものといはざるべからず、

其二

「スタテスト誌」

若し事情にして之を許すとせば日本が直ちに浦鹽斯德を占領せば日本の利益の洪大なるべきこと疑を容れず、若し旅順を陷落せしめ、黑鳩公をして降服せしめたりと假定するも日本は露國をして必ずしも償金を出さしむることを得べしといふべからず、滿洲內部の鐵道は勿論日本の手に落つべきも露國が形式上の平和をなすことを拒めば、日本は之に償金を請求することは不可能なりといはざるべからず、されど若し浦鹽斯德を占領するあらんか、日本は已に露國と交易するを得る所のものを得たるなり、露國は必ずや平和をなさん

ことを欲し、此港の還附の爲には償金を出すことに同意すべきなり。

予の推測する處によれば第一旅順陷落し、第二黑鳩公が降服し又モンゴリアまで退却し、第三浦鹽が圍まれ、西比利亞鐵道は之れを救ふべき軍隊を輸送すること能はざるに至るまで露國が償金を出して局を結ぶ者とは思はれざるなり。されど兎に角浦鹽が適當なる軍隊に圍まれたる時は是れ露國にとりて平和を提出すべきの好時機なり。是れより以後、戰爭を繼續せんとするは益々露國の不幸を大ならしむるものにして其軍隊を減少し、爲に海陸の軍事組織を恢復なし、以て自由に其勢力を養成せんとするの事業をもなし能はざるに至るべければなり、平和の局を結ぶべきは實に浦鹽の包圍せられたる時にあるべきを疑はざるなり。

其三

「サンアー、クロニクル」

今日に於て日露戰局の終結を豫想し、平和問題の解決を論議するが如き、餘りに早急に失したりと思惟するものあるべしと雖も、今後遠からざる將來に於て必ず起るべきかゝる大問題に向て熟慮し、機に先んじて其方途を講究するは決して徒勞ならざるべきを信ずるなり。

予は日本人が必ず露軍を哈爾賓まで驅逐すべきを疑はず。予は彼等が必ず旅順を陷落すべきを疑はず。予は彼等が必ず露國をして滿洲を放棄せざるべからざるに至らしむべきを疑はず。若し彼等が此等の事に成功せんか、是れ即ち露國をして昨年十月八日に宣言したる約束を履行せしむることに成功したるなり、其約束は嚴正なる眞面目なるものとして宣言せられたるに拘らず、曲言舞辭、並びに種々の假托の本に終に履行せられずして放棄せられたり、是れ近世歷史上に於て極惡なる一大破約たりき、此約束は獨り日本にのみ向てなされたるにあらず、實に總ての國民に對して誓はれたるものなるに各國皆手を空うし、日本は獨力にして其履行を請求したるにあらずや。日本の勇氣や實に多とせざるべからざるなり。

海陸の兩軍共に充分なる勝利を博し、日本が此約束を履行せしむるを得ば、各國民は此偉大なる事業に向て日本に感謝すべく、日本は其報酬として適當なる要求を呈出すべきは明かなる事實なり。予は戰勝の後日本が果して如何なる要求をなすべきかにつき、種々の名士に對して其意見を叩きたるに各々其見解を異にし、未だ一定の決案を附することを得ざるも其最も重要なること三四を擧げんに

第一の問題は日本は旅順を保有することを願ふべきや否やといふことなりしが、こは殆んど多數の一致したる解決を得たり、即ち日本は特に旅順の保持を必要とすべき理なし、恐らくは彼等は之を支那に還附すべし、

第二は其代りとして彼等は東察加樺太等の島嶼を得んことを望むべしとのことも略ぼ一致したる見解なりき。

第三の問題は滿洲に關するものにして、即ち此れが日本軍の力によりて支那に還附したる時日本が之に就て支那より其報償を受くべきやのことなりしが、予の談ぜし多數の人は皆之を打消したるも、中には日本が支那の鑛業及び鐵道の允許を得べく、殊に臺灣に面せる支那地方の鑛業の允許を請求すべきは疑を容れずと説きたるものもありたり。

第四の問題は滿洲の鐵道にして、日本は之が實際の財政問題に當らず、たゞ或國際間の交渉によりて一種の有利關係を定むるべしとの事に一致したり。

又日本が露國に要求すべき償還問題に就ては其議論區々にして殆んど一定せず、是れ日本の戰爭に使ひたる費用の不確なると又戰爭繼續の時日の不明なるより誠に止むを得ざるの事なるべし、然れども此最も重大

なる問題は若し彼等が浦鹽斯徳を占領せば、適當なる償還を得べきは明かなり、何となれば露國は此港による外太平洋に航行するの適當なる港灣を有せざればなり、

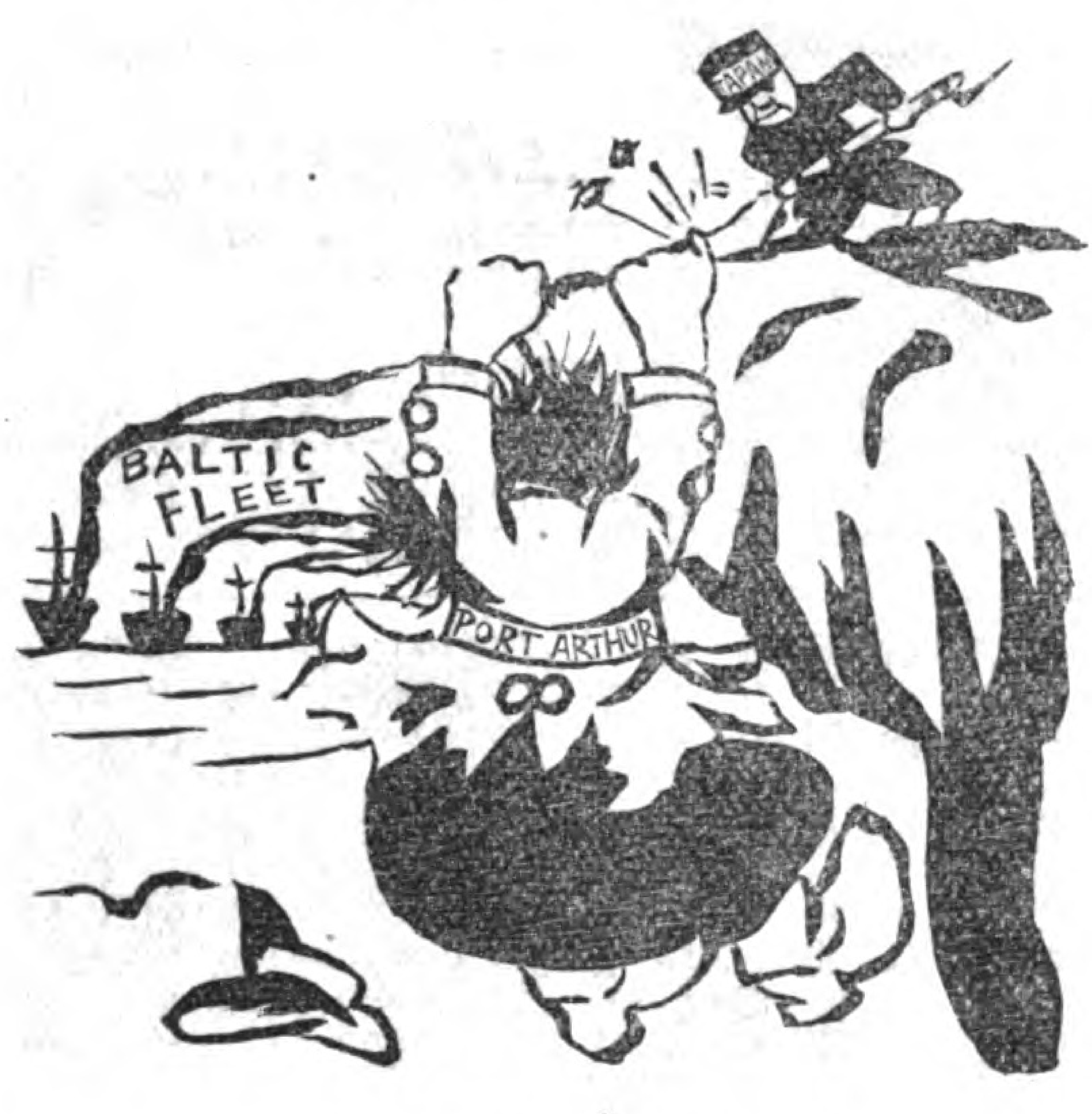
又其他の小なる問題については種々の議論多々ありしが、中に就き露國がコムマンドルスキの島を日本に讓り、北海岸に於ける漁業の權利を日本に渡すべきを唱ふるもの甚だ多かりしなり。

若し日本が今後其勝利を續け、予が先きに擧げたる三大事件に成功したりとせば予が此處に記したる如き條件は必ず不當にあらざるべきを信ず。是れ實に日本が平和に向て要求すべき價格の相當なるものにあらずして何ぞ。

露國士官とコサック兵の眞相

「デーリー、ニユーズ紙」

クリーブランドリーダー所載



助けが來るまて持ち切れぬ

極東の天地に滯留すること凡そ廿五年、其間予は屢々露國士官並びにコサック兵の眞相を觀察するの好機會を有したり、予は此等の觀察によりて斷言す、世の露國士官並びにコサック兵に就て談ずるもの甚しく事の實際を誤解せるもの多きを。現今の世論を概觀するに、日本人を以て唯一の英雄となし、露國人を以て無二の臆病者と論ずれば、大に喝采を博するが如き傾ありと思はる。然れども人何時までか、かゝる謬見を繼續し得べき、早晩彼等は其迷妄を擲破せざるべからざる時期に達すべきを信ず。彼の南亞戰爭の當時、極力筆を振てボーア人を罵詈したる彼等操觚者は、未だ幾何ならずして終に之を賞賛するに至りたるの事實は、予の尙ほ明かに記憶する所なり。

露國士官に關する英國の記事は概ね其無能無智なることを罵り、旅順の陷落の近きにあるべきを報じ、且つ或記者の如き旅順は必ず陷落せざるべからざるものと信じたるものか、已に屢々紙上に陷落したるの事實を誇大に畫きたるさへあるなり。予の見る所によれば露國軍人は軍人として決して劣弱なるものにあらず。世人が之を劣弱なるが如くに誤解するは全く、事實に暗き操觚者の畫きたる影法師を以て其眞相なりと信ずればなり。

予は暫しコサック兵の一軍と共に騎行するの機會を有したるが、嘗て

書籍に就て讀みたる所とは甚しく事實を異にすることを發見しぬ、彼等は世界に於ける最良の騎兵にはあらざるも、其善良の地位を占むるものなることは疑なく、之を日本の騎兵に比して遙かに優勝なるは、明かなる事實なり、今世界各國の騎兵を以て之に比するに、ボーア人は一層優秀なる技倆を有し、墺太利人又稍々卓越したる地位にあるべし、コサック兵の短所は長距離の動作に缺くる所あるにあり、今日のコサック兵には所謂純粹のコサック兵ならざるものも混淆せりと雖も、純粹のコサック兵に至れば其軍馬を愛撫すること甚しく、注意周到ならざる所なし、

彼等は軍律上注意せざるべからざるが故に注意するにはあらずして、實に個人的に軍馬を熱愛するよりして然かするなり。予は彼等懇厚き軍人と其軍馬との間の眞正の愛情を發見せしこと屢々なりき。コサック兵が馬より下るや、軍馬が其騎者を繞り、且つ戯れて彼等を舐る、而して彼等は之に就て毫も馬を怒ることなし。彼の荒くれなる騎士が其唯一の食物たる堅き灰色の麪包を割き、之を馬の口に含ましむるの有樣は實に一種の奇觀なり。實に此コサック兵程動物を取扱ふに鄭重なるなく、若し其馬を虐待するを上官に見らるゝあらんか、彼は直ちに重き責罰に處せらるゝなり、

パイカル湖より哈爾賓の間にある處の眞正のコサックが用ふる軍馬に至りては他の雜駁なるものと劃然其面目を異にせり。其馬は情熱強くして勇氣に滿ち、骨太くして體格逞しく、彼等は無暗に疾走することをなさず、秀逸したる形と昂騰したる頭は智力盛んにして性質の鋭なるを示し、一見惡馬にあらざるを知るに足る、加ふるに動作悠揚にして優美なり、而してコサック兵及び其他の騎兵が此馬を養育するの法は、好んで露國人を野蠻と罵る者の夢にだも知らざる所なり、彼等が其馬を養育するに懇切なる、決して馬匹虐待禁止の法令あるが爲めにあらず。實に彼等が其馬を心より愛好すると、又地上に雪の積る頃に至れば戰場に向ふべきの事實を知悉するによるなり。

又コサック兵の馬を御するに巧みなる、毫も手綱を引くことなく、膝の力のみを以て馳驅せしめ、又其馳驅したる馬を直ちに立止り、魔術を用ひたるが如くに横腹にて臥せしむるの術は殆んど感嘆するの外なし、而して其士官は一言にしてよく全隊を動作せしむること他の類例を見ざる所なり、斯の如き騎兵隊が久しからずして日本に接戰せんとす、必ずや大いなる壯觀を呈すべきか、

露國士官は體操術、打毬又は蹴鞠等をなさゞるも、水泳に巧みに、滑術に長じ且つ氷靴にて滑ることに熟達せり。而して彼等は炎暑甚しき夏に於ては總ての動作緩慢なれども、一旦嚴冬に向て朔風膚を劈き、積雪脛を沒して獵夫も山に入るを得ざるが如き時は彼等の最も得意とする時にして、動作敏捷にして毫も疲勞を覺ゆることなきが如く見ゆるなり。

予は或新聞によりて露國人は政府の命令を受くるも前進せず、前進するよりは寧ろ恥辱を受くるを望むといふ記事を見たることあり、之れ僞りなり、眞赤なる僞りなり、予はバイカル湖を東に行く十二万七千人の兵の間にありて其實際を目擊せり、彼等は途にして戰地より傷きて歸る者と逢へり、予は兵士中に泣く者を見たるも、是れ臆病なるが故に泣けるにあらずして實に其父兄又は朋友を悲しめる淚なり、予は實に親子夫婦の別離の有樣を目擊せり、彼等は此悲慘なる時に於て淚を落せり、されど、英國の停車場に於ても、又かゝる時同一の光景に接するにあらずや。予若し時來りて戰場に向ふことあらば、予は笑て別るゝ人よりも泣いて別るゝ人によりて大なる力を與へらるべきを思はずんばあらず。

露國士官は概して快濶にして惡戲を好み、殊に酒を飲用すること度に過ぎ、又婦人の仲間に戯るゝこと甚しきも、一旦怒りて起てば其勢獅子

の如く、如何なる困難に逢ふも恐るゝことなし、且つ敵と雖も傷者に對しては親切なり、彼等が露國の爲めに生命を惜しむことなきは、英人が英政府に於けるに讓ることなかるべきは予の信じて疑はざる所なり。予が長年月の間觀察したる眞相を記して、以て世の誤解者を警むること斯の如し。

日本に對する米國の態度

「リテラリー、ダイゼスト誌」

紐育セラルド通信員の記する所を見るに、米國の日本に對する同情は獨り人民の間のみにあらず且つ文武の官吏間にあつても非常なる變化を來し、而して其變化は一部は日本人が戰勝によつて陷りたる非常なる剛慢により、一部は日本人が其戰ふの態度の異教人的なると、且つ彼等が近來吾人に劍を拔きたる非利賓に對する有樣より來れることを記したり。今其文を引用せんに

ユーモリステツヒ、プレツテル所載



サー出て來い

近來非利賓より歸來せる陸海軍人の語る所を聞くに現今日本人は東洋に於て、商事に於ても陸海軍事に於ても白晳人種の友にあらざるに至れり、彼等の極東に於ける成功は彼等をして甚だしく高慢無禮ならしめたり、彼等は其陸海軍を以て世界に敵なしと思惟し、不快なる仕方に於て之れを公言するを憚らず、彼等は約束又は協議したる事件について毫も之を履行するの意あるなく、一面には確かに掩ふべからざる野蠻の風の存することを示したり。

マニラ又は非利賓に於ては日本の勝利は常に不快を以て見られつゝあり。日本人が吾人が非利賓を占領したるを憤りつゝあるは爭ふべからざる事實なり、現在の戰爭の端を啓かざりし時、數多の日本船マニラの港内にあり、吾國の士官數名を其艦内に招ぎて歡待す、驚くべきかな、一年少士官起て堂々マニラに於ける吾人の位置を論じ、同地に於ける米國の城郭並びに兵力を說き、米國の本國より軍艦を輸送すべき時日を告げ、以て日本一旦之に向はゞ直ちに其有とならしめ得べきことを揚言し、且つ日本は宣戰の布告をなさゞるも戰爭を開始するに躊

踏せざるべきを壯語せり。

南部の人民に至りては殊に露人に同情を表するものあり、或大佐は明言して曰く、予は小なる異色人種が白色人種を煩つの樣を見るを欲せずといへり、又軍人は一般に日本の軍人を不善なるものとして罵れり、日本と米國との間には隙際の起るべき數多の場所あり、非利賓及びサンドウイッチ諸島は最も危險なり、日本が其臣民の惡遇に對して不平を鳴らし、ホノルヽにまで此巡洋艦を送りしことありしは人の知る所なり海軍に於て此世紀の老いざる中に我等は日本と太平洋に於て戰ふべきことあるべきは一般が信ずる所の事實なりとす。

紐育サンは此事實を以て全く虛妄なる事なりとし、日本が米國に對してあらはしたる好意の事實を記すること詳かに又レパブリカンは日本に眞に同情を表するものは決して減じたることなきを辨明し、日本が實際東洋を指導すべき力あることを認め、且つ吾等は日本か東洋を支配するは露國よりも、獨逸よりも、英國よりも、又米國よりも適當なる位置にあることを認むと記す、されは日本が米國の同情を失へりといふの眞僞は俄かに之を斷言するに難しといはざるべからず。

英國の日本化

「グラフキック誌」

大英國の日本化は近き未來にかては必ず起るべき問題なりと信ず。吾が政治家が國人をして露國を嫌惡せしむる如くに導きたるの正否又は國人が露人に對する措置の當否は暫く措いて論ぜざるも、英國の男女は極東の時局に關して日本の成功を喜びつゝあることは爭ふべからざる事實なり。加之其成功が連續して毫も挫折したることなきの結果、英國の男女は等しく日本人を尊敬すること甚しく、彼等を以て他の國民よりも智力勝れ、忍耐強く、男氣優りたるものにして、夫れ故に英人が彼等に就て學ぶべき所實に多々ありと思惟するが如し。現に近來書肆の主人は、日本の國情風俗に通ずる記者の著作を受くること多く、又敏捷なる商店は其需用の增加すべきを豫測して日本の貨物を購入すること夥しきなり。

而して最も注目すべきは軍隊の事情にして、日本が海陸に於ける連勝は英人をして自國軍隊の改革に就て考へしむるに至りたるが如し、何となれば彼の南亞戰爭に就て見るに英國の軍人は勇氣に就て乏しかりしにあらざるも、第一人々の豫想せし如く智識に富まず、第二獨立の氣象に豐かならざりしを示し、且つ其軍事上の組織善良ならず必ず改革せざるべからざる必要の痛切に感ぜられし時なるを以てなり。陸海軍の兩大臣は已に此事情を認め、已に千一條の小規定を改め、一大改革の案は成立したるも軍隊の實際に至りては、毫も戰爭當時に異ることなく、若し一旦兵を交ふることあらば吾人が五年以前に經驗したる處と同一の結果に至るべし、吾人をして日本の軍隊に就て學ぶ所あらしめよ、是れ吾人が日に十度耳にする所の聲なり。士官たらんとするものは何故に其職に眞面目とならざるか、吾士官は日本が爲したるが如く、何故に外國を摸範とするの雅量に乏しきか、是れ吾人が日常屢々聞きつゝある叫びなり。吾人が今日に於て英國の日本化を唱ふるもの決して早計にあらざるべきを信ず。

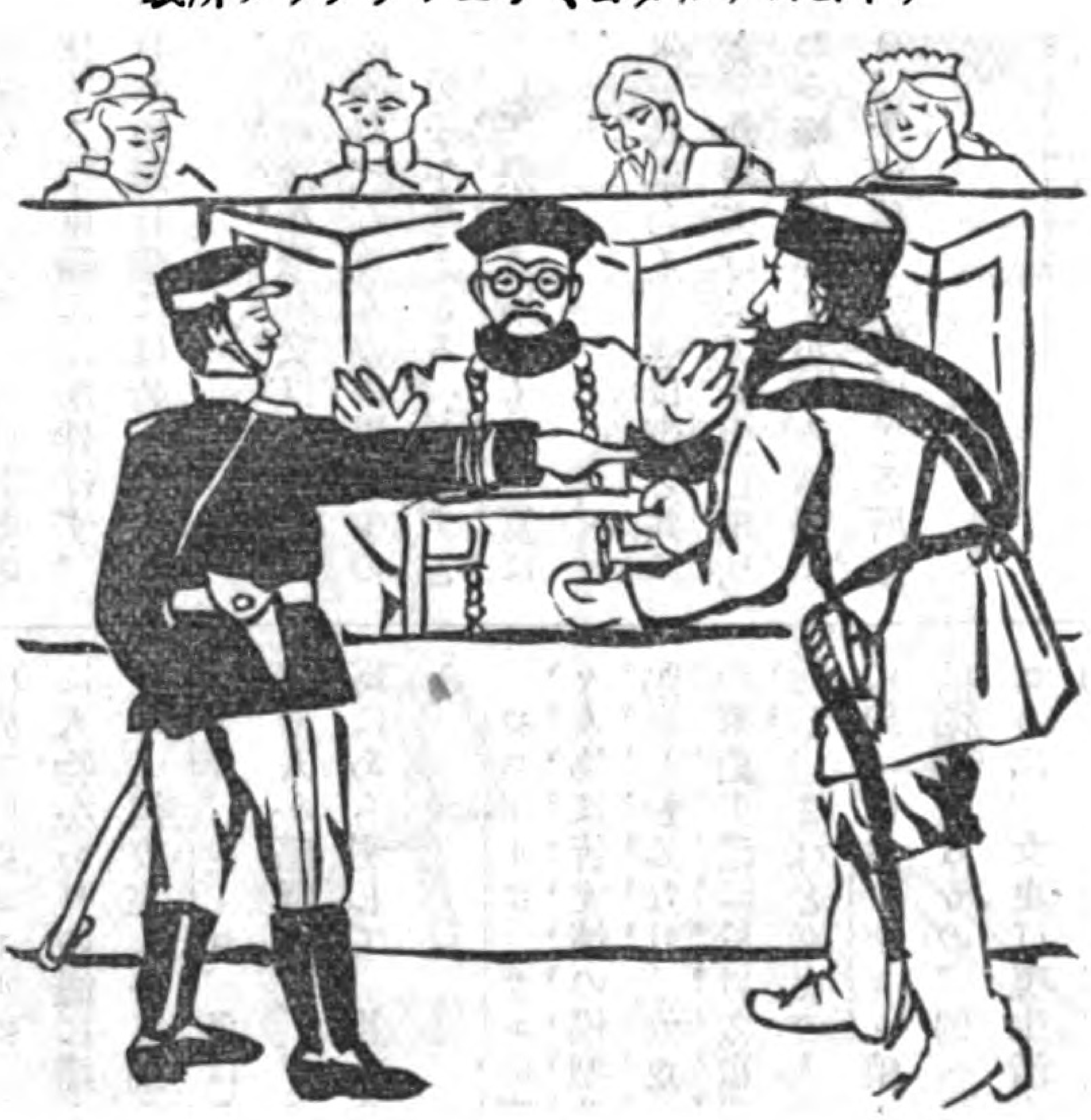
海外雜纂

外國婦人の觀たる日本の夫婦

日本の結婚の状態については世の好奇心を促かすべきこと多々ありと雖も、今其最も重要なるものを擧げんに、日本の花嫁が其夫の家に歸がんとする時、純白なる喪衣を纏ふは、これ頗る意義の籠れる處にして即ち其女は此時以來其生家及其兩親に向つて死者同様にして、新たなる夫の家に生れたりといふを示すなりといふ。然れども日本の花嫁は是よりも一層甚しき覺悟を有せざるべからず、即ちあらゆる自由に別を告げ、種々なる人生の快樂に眼を閉ぢ、且つ彼女が未だ知らざりし夫より其命令を奉じて如何なることをもせざるべからざるなり。

日本の夫はたゞ其祖先の名を擧げんことをのみ念ずるものにして、其妻子に向ては絶大の權を握れる專制君主の如き姿なり、彼若し之を欲せば些細なる理由、即ち多言、嫉妬、又は子なき等のことよりして其妻を離別することを得、而して下等社會に至りては益々亂暴なるものにして、其夫は彼の日常の扶助たるに適せずとして直ちに其妻を離別して新たなる妻を迎ふるを怪しとせざるなり。彼の日本の妻たるものは必ず齒を黑染せざるべからざりし風習は漸々薄らぎつゝあり、然れども予が日本にありし頃は其風習尚ほ盛んにして美しき若き婦人が其黑き齒によつて全く其美を失ひたるを感じたること屢々なりき。此最も野蠻なる風習を抑へたる人は實に現　皇后陛下なりとす。

アームステルダム、ウエークブラツ所載



支那の法廷

支那"卿等の相戰ふや滿洲を放棄せしも
戰後猶我を此地に安住せしめざるか"

又日本婦人の最も温良にして夫に向て一言の反抗をも敢てせぬものと雖も、年老いるに從て漸々邪見なる姑と化し、其子の妻たるものが已れに善良ならざるが如きことあれば、直ちに之を去らんことを命じ、其子も亦愛情によらずして結婚したる其妻を離別するに甚だしき苦痛を感ぜざるが如し、而して日本に於ては其兒は全く父の所有に屬するものなるを以て妻の離別せらるゝ時其子は父の家に留ること論を待たず、

かゝる人の妻たることは稍々躰よき奴隷――何となれば妻は其舅姑と同居し、全く賃錢なき下女の如く使はる――たるが如き國にありても不婚を以て婦人の不名譽となし、獨身者に至りては甚だ稀に見る所なり、日本の夫は愛の爲めに結婚すること極めて少しと雖も猶其妻の撰擇に關しては婦人が其夫を撰擇するよりも自由の意志を有し、自ら之を取捨す

るを得れども、婦人は其權を認めらるゝこと甚な少く多くは其兩親の意向によりて無理にも得心せざるべからざるの有樣なり。

日本の夫は己れ一人にて食事し、妻をして之が給事に當らしめ、又來客のある時は特別の場合の外、其妻をして席に出ることをなさしめざるなり、下等社會の夫婦に至りては同時に食事するを常とすれども座に自ら尊卑あり、恰かも主人と下女との如き觀を呈せり、日本の夫は其妻の若き時は芝居又は角力其他有名なる藝者の住する茶屋等に之を伴はず、却て其母及び小兒等を連れ行く、是れ即ち日本の祭日等には若き婦人を見ずして、老母等の多く目に入る原因なり。

日本の結婚式は一の誓言なく、只だ三々九度の盃を取り交はすことによつて此重大なる關係を定めらる、日本の所謂血統なるものは男子をのみ偏重するが故に其妻たるものは相續として男子を産まざるべからずと思惟せられつゝあり、然れども彼等が鼻祖として祭れる所のものは實に男神ならずして女神なるは怪しむべきなり、

然れども日本が漸々洋風を模倣するの結果、馬車あるときは妻と共に乘り、内に入る時は自ら戸を開くが如きこと、外觀丈けにても生じ來りたるは事實にして、現今新教育を受けつゝある婦人は必ずかゝる狀態に安んぜず、此弊風を改革するの意を用ふべきは予の信じて疑はざる所なり、

ジョールジ、サンとバルザックの寫實主義

「リテラリー、ダイゼスト誌」

ジョールジ、サンは理想派の勝れたる人なれども其著作にはバルザックのそれに比して寫實の點に於て敢て劣れるものあるにあらざるなり。バルザックが女史に向ひて「御身は理想の人を描き、我は實際の人を書く」といひもの些か極端の言なりといはざるべからず。今バルザックの著述に就て一々例證を示さゞるも其コメデー、ユーメヌを繙けば或點に於てはジョールジ、ザンよりも遙かに理想家なるを示すものあり、彼は人物をありの儘に描かず、個人としてよりは顧ろ類型と目すべきもの多く、彼の主人公は抽象的の標準に了ること屢々なり、誰人かクレー、ゴリオ、ユーロ、又はグランデの如き人物を目擊したる人あらんか、彼等の人を惑溺せしむるは彼等が吾人が知れるが如き人に酷似せるが爲にあらずして、其中心の感情を齎きあらすこと明かなるを以ての故のみ。

ジョールジ、サンの理想主義は全く愛情の觀念に其基礎を置き、其個々人物は皆愛情の模型及び權化としてあらはるゝ其筆力によつて人を感動せしむるなり。女史の小說は殆んど、總て其構想に奇なく、たゞ日常の家庭生活に於ける出來事を描くことセンド、ヒユープの說破したるが如し、されど女史の人物は實世間に全く見るべからざるもの多く、此點に於てはバルザック稍々女史よりも寫實的ならん。バルザックは或職業に從事するもの、例へば金錢と權力を追うて實際界に立働く如き人を寫せるに、女史は現生活より自由に獨り、其感情の抱懷に就くるが如き人物を書く、故に其性質はたゞ感情的にして、バルザックの如き長く腦裏に印象を止むること少きなり。

バルザックの特徴は醜惡なるものを描きて寫實家なりといはれんとするにあり、女史は之を評して、かゝる記者は人生の實際より其いやしくして且つ醜しき側面を寫す、人生の他の側面即ち高くして樂しき方を描く

も決して人生の實際に背かずといへり。而して女史が其高くして樂しき側面を寫したるものはバルザックの卑くして悲しき側面を描きたる程誇大に流れず、却て眞の人生に近きか如く思はしむるものあるは女史の爲めに甚だ多とする所あり。

現世界の最年長動物

「サインテフイク、アメリカン誌」

セント、ルイの博覽會にあらはれたるセーチエル島より出てし大龜は少くとも二百五十年を經過したるものにして恐らく現今世界に生存せる最年長動物なるべしと思惟す。此大龜は今より數年前、カール、ハーゲンベック氏の義子が面白き標本を集めつゝありし時、マダガスカルの海岸を距てたるセーチエル島に於て大龜の住へるあり、そは其大なるが爲めに土人に有名なるのみならず又實に其重量九百七十封度ありしか爲めのみならず、且つ地上に百五十年住したる印を有したる上、尙百年乃至百五十年を經たるものなること明かなりしを以てなり。綿密なる研究をなしたる上、彼は土人の言の眞なるに滿足し、其費用を作り（之を運搬するには非常の注意と勞力とを要す）以てセントルイの世界博覽會に出品したるなり。ハーゲーベック氏の談によるに、此龜の米國に着するや其の背の上より小なる棕櫚の生じ來りたるを目擊したり、龜は泥中を愛するものなるを以て、泥と種とが其甲の切目に入り、以て其芽を出すに至りたるべしと思はる。龜は最も長生の動物にして其壽命にも優り往々百年を超過する命を保つものなり、今より百五十年以前セーチエルの土人が此百年以上を經たる龜に向て印をつけ置きたるものなれば少くとも此龜の二百五十年以上なることを知るに足るべし、龜の齡を算するには其甲の狀態によつてするものにして、此龜は其れによつても略ぼ其年を知ることを得たる上、其大いさは非常にして、又背を打ち上ぐる力は實に想像も及ばざる所なり、博覽會に於て大いなる入物を破らんとしたり、此背の上に二三人の小兒の乘ることは平氣なるものなり。

ユーモリステツシユ、プレツテル所載



旅順に於ける兩將

陸將"君なにもそんなに悄氣るには及ばんよ吾輩は陸戰て大勝利を取て見せるさ"

混浴の流行

「デーリー、エッキスプレッス紙」

男女混浴は英國の海岸に於て盛んに人氣に投じて、其數甚だ增加し、

漸々延いて歐洲大陸諸國の海濱に於ても一大流行を促かさんとするの傾あるが如し。

ダヴァーコーストは最近に於て男女相混じて海岸の快樂に耽けることを禁じたる場所なり。ユストボルンに於ては數年間グランド、パレーの反對の側に於て混浴を許され、他の場所に於ては自由なる混浴を許可せり、セーステング地方に於ては高貴なる人も旅館より來りて直ちに混浴をなし、ホアイト、ロックスに於ては腰布を纏うて混浴することを許さるゝなり。而して混浴の海水浴場ある附近の停車場は人群を以て充され、之を許可せざる前に比して二倍の人出なりとはいはる。又ブライトンに於ては婦人の衣服美麗なるも空想的なるを許さず。又ヤーマウスの如き一時混浴を制止したるも世の風潮は奈何ともするを得ず二年前終に之を許可することゝなりぬ、スキリオン港の如き婦人の遊泳者往々男子の位置を侵すものありといへば此等も又近々混浴場と化するに至るべし、兎に角混浴の流行は歐洲一般の風潮なりといふべきなり。

柏軒と華山（其二）

美中天

華山の動中靜觀は近來よく賣れたる本の一也、彼が文、其辭句の配列調合の上に於て少くとも人を魅するの力あり、又奇麗にして素人好のする文也、往々其議論に誤謬矛盾あるも文章の美しき爲め人をして之に氣付かしめざる也、柏軒が文章家にあらざる如く華山はまた論文家たる能はず、人は彼が專門の學術に關して云々するは甚だ笑ふべき事なりといふ、これ或は半面の眞理ならん、然れども散文の筆をとつては現代彼に及ぶもの少し、吾人は寧ろ彼が散文詩人として立つの優れるを思ふ者也



雜錄

金工傳

上田敏

海外古今の名著にして、今日未だ吾邦の文藝界に紹介譯述せられざるもの頗る多しと雖も文藝復興期の名匠にして、世に珍らしき熱烈奔放の生涯を營み、所謂人生の盃、餘瀝を殘さすして傾け盡したるベンヹヌウト、チエルリイニの「自叙傳」を說く人無きは予の窃に怪訝する所なり。著者は十六世紀伊太利亞の高名なる彫塑家兼ねて金銀の鏤鐫に妙を得たる工匠にして、初めヒザに業を開き、後フイレンセに歸り、また羅馬に徙り、佛軍の羅馬を攻圍したるとき、勇戰して聖アンヂェロ城を防守し、自ら敵の二將軍を傷けたりと稱す。千五百三十八年十月、パオロ三世の庶子ピエル、ルイジ、ファルネエゼの讒に依て聖アンヂェロ城に幽せられ、翌年臘月獄を脫し

たる顚末は「自叙傳」中の最も興味ある一記事なり。後四年の歲月を佛王フランソア一世の宮廷に送り、離宮プチイ、ネエルの一隅に制作の室を造營して、專ら彫塑を事とし、フォンテンブロオ園苑に据ゑたる諸仙女の像を作りぬ。晩年南歐の故園に歸臥してメヂイチ家に仕へ、千五百七十一年をもて逝去したり。チェルリイニ一代の傑作はペルシウスの銅像にして鑄造の苦心を「自叙傳」中に細說したるもの人口に膾炙す。古來自叙の傳記を以て後世に喧傳したる者少からず。聖アウグスティヌスの「懺悔錄」ルッソチの「自白」ゲエテの「歌と眞との物語」等は其最も秀たるものなれど、赤裸々たる人格の機微を忌憚なく披攊して、文藝復興期一代の精神を闡明したる此奇書の如きは罕なり。ホレイス、チルポウルは小說よりも奇なりと賞し、遂人ゲエテも暫らく創作の筆を擱きて、これが飜譯を大成し、コムトも亦其人道敎徒必讀書目中に之を編入したるに徵してもこの書の價値を推知す可きなり。今小閑を得て、此一節を譯し、以て江湖好學の士に供ふ。

（一）

苟も世に大業を成し、或はよく之に類する行ありし人は、身の程の如何に關せず、もし其心誠ありて正直ならむには、自ら筆を執りて一生の經歷を記錄すべきなり。たゞし年四十を越えて後、はじめて此美擧に出づ可きのみ。われ今五十八歲の齡を重ね、故里の市フィレンゼに永住の居を定むるに至りて、乃ち此事を思ひ浮べぬ。茲に熟ら越方を顧みて人間の世に遁がれ難き、禍の幾多を惟みれば、けふの今ばかり災難の少なきはあらず、之を往年に比して、心安らかに身健なること斯の如きはなしと覺ゆ。あるは一代の樂しかりし事どもゝ浮べつべく、あるは今想ふだに驚かれぬる災難に遭遇しながら、五十八歲のこの年まで生き永らへし事の不思議も怪まるれど、げにや神明の應護によりて、今なほ榮ゆくぞ忝けなき。

（二）

假初にも一業に身を委ねて拔群の成功ありし者は、おのづから既に世に知られたりと謂つ可く、即ちわが伎倆を證し名聲を馳せたるなれば、偏に只之を以て自ら足れりとすべきなれど、人のすなるやう己もすなる此世の習に從ひ、かゝる類の書には、おのづから種々の大言自負を雜ふること盡し止むなきに出づ。さればまづ第一に人は其祖先の筋目正しき舊家なりや否やを辨ぜむとするなり。

抑も予はベンヱヌウト、チェルリイニと呼びて、父をマエストロ、ジオヷンニ祖父をアンドレア曾祖父をクリストファノ、チェルリイニといふ。わが母はステファアノ、グラナッチの女マドンナ、エリザベッタなり。兩親ともにフィレンゼに生る。信を措くに足る此市の故老、例

へばジオヷンニ、ギルラニの編纂したる史籍に照らせば、フィレンゼは羅馬に摸して建設せられたるものゝ如く、古の大劇場、浴泉殿の名殘は今なほサンタ、クロチェの傍に留り、そのかみの政廳は、今日、舊市場メルカアト、ヹッキオと稱する處に立ちしなり。又昔、マルス軍神の殿堂たりし圓廊は古の儘を存して、今サン、ジオヷンニの御堂と呼ばる。これらの事皆歷然として言ひ消つ可からず、唯上記の建築は之を羅馬に比して規摸頗る小なるのみ。傳に據れば、昔ユリウス、カイサルが羅馬の貴族と戮力して之を建立し、フィエゾオレ陷落の後、此處に新都を奠めたる時、衆皆競うて是等の大厦を造營したりとぞ。

其時カイサル幕下の高官中、勇猛の聞高かりし將軍フィオリイノといふありて、フィヤスコオネ山より二哩許なるチェルリイノ村の人なりしが、此人軍旅の使を計り、アルノ河に臨まむとして、フィエゾオレの下、今のフィレンゼの地に屯せしかば、此陣に使せむとする兵士等が『いざ、フィオレンゼへ行かむ』と云ひ習はしぬ。そは將軍の名をフィオリイノと呼びしが故なれど、また一には此陣營のほとり一面に百花咲き亂れたればなりけり。かくて此市も草創の際なればカイサルに於ても此優しき名稱をいかにも相應はしと思ひけむ、はたまた花の都といふ言かけを生ひさき籠る瑞祥とや覺えけむ、終にそのまゝ呼び習はせつ、隨て此將軍にこよなき面目を加へたるは、極めて微賤の身より拔擢したる者なればかゝる武勇の士に生ほしたてしをカイサルは殆ど自らの功なる如く思ひ做して恩遇殊に深かりし爲ならむ。さるを語源の考證穿鑿を事とする博識の人々が、此市を貫きてアルノの「流るゝ」が故にフルエンチャの名ありと唱ふるこそ採るに足らぬ僻言なれ。さらばティベルは羅馬をポオはフェルララを、ソオヌは里昂を、セエヌは巴里を貫流すれども、市名互に相異りて其因りて來る所皆他に在るはいかに。

予の知る所斯の如し。かくて予は名家の末なるを確信す。また傳へ聞くに伊太利亞の舊市にして名門の族に富みたるラヱンナにも予等の同族ありといひ、ピザ其他基督教國の諸處に於ても亦然り。此地にもまた二三の同苗ありて、其多くは軍職に從ふ。さまでふるき事にもあらざるか、ルカ、チェルリイニといふ白面の少年嘗て、フランチェスコ、ダ、ギコラアティといふ武藝の仕合に數度の修練を積める手だれの剛の者と鬪ひ、單身勇を奮て遂に敵手を斃したる意外の勝負に傍觀の人

をして其剛勇に舌を捲かしめたりとぞ。されば予は勇猛の祖先に血統を享けたるを誇稱す。

予はかくて誰もよく知る今の世の生業を營み、おのが技藝の故をもて、聊かながら家の風を興したれど、別にとり立てゝ云ふべきほどの事にもあらず、後段其處を得、機會だにあらば、自ら一伍一什を詳かにすべきが、抑も名門の末にありながら、われら才能の劣りたるため、家名を汚がし損はむよりも、微賤の身より起りて子孫の爲に令名の基を据うるこそよなき面目にあらずや。されば神われを此世に生れいでしめたる事の始を述べて、此物語の發端となさむ。

三

予が祖先はヴル、ダムブラの釆邑に居を定めて權勢をさく〳〵小國の君に劣らざりしが、當時朋黨の爭劇しかりしがため、つとめて世に遠ざかり隱れ住みしも、皆武を勵みて勇名ありき。其頃クリストフアノといふ末子の一人、近隣の某と爭を釀しいでたるに、終には双方の近親相率ゐて之に加はり、やがて兩家の絶滅にも至らむばかり爭ひ募りければ、老功の長者よく慮はかりて、此騷動の源なるクリストファノと敵手とを分離せしめむと商議に及び、まづかの家の者をシエナに移しければ、われらが家の人々もクリストファノをフィレンゼに送ることとなりて、サンタ、オルソラの尼院に近きギヤ、キヤラの地に一小邸を購ひ、リフレディ橋畔にもふさはしき土地を求め與へぬ。かくてクリストファノはフィレンゼに娶りて男女數人の子を設けたり。女子は各粧奩の資を付して、それぞれ嫁がしめ、死に當りて、産を餘の男子間に分ちし時、ギヤ、キヤラなる邸宅とほかに少しばかりの家財とは、アンドレアといふ一子に傳はりぬ。此人また娶りて男子四人を儲けたる其長子をジロラモ次をバルトロメオといふ。其次は即ち予が父ジオヴンニにして、フランチェスコは第四子なり。かのアンドレア、チェルリイニは當時の建築術に造詣いと深く、之を以て其生業となせしが、わが父ジオヴンニは他の兄弟にすぐれて此術に意を注ぎぬ。建築術を能くせむと欲する者は、稍音樂と圖畫とに通ぜざる可からずといふ古人井トルヰウスの説を守りてジオヴンニは圖畫の術を究めたる後、更に意を音樂に向けて、律呂の理を辨ふるに至りしのみか、巧に提琴を彈じ横笛を吹奏せり。もとより篤學の人にして、家門を出づること稀なりき。

此家の隣にステファアノ、グラナッチといふ人住みて、

女あまた持ちけるが、皆うち揃ひて眉目美るはしかりしを、いかなる緣ありけむ、ジォヷンニはやがて其中の一人エリザベッタを見染めて終には妻にと乞ふまでも思ひわたりぬ。隣家の好にてかねてより親交ありしものから、兩家の親たちは、別に異議あるべくもあらず、各合點して、獨り呑みこみ居たり。まづ二人の老人は此結婚を承諾して、やをら粧奩の話に移れるとき、冗談半分の口論となりぬ。アンドレアまづステファアノに向ひて『わが子ジォヷンニはフィレンゼはおろか、この伊太利亞全國にも類稀れなる若者なれば今迄に妻を求めむとしたりしならば、同じ自分のうちにて、フィレンゼ一の持參金もて嫁を得可かりしに』と云へば、ステファアノの答ふやう『御身の方にも一應の理はあれど、われとても五人の女を抱へ、男子も同じ數ある身なれば、いかやうに積りても、この上持參金は遣はし難し』と。容子いかに物陰に窺ひ居たるジォヷンニ此時突然現はれいでゝ『噫、父上、予はかのひとをこそ可愛しと思へ、金錢などに眼をくれしにあらず。持參の料をあてにして己が懷を溫めむとするは、なんぼう卑しき所存ならずや。御身は今予を才ある若者と誇り給ひぬ。しかるに父上が御望の持參金無くては家を構へ妻を養はむ働なしと危み給ふか。持參金がほしくば、御自分に御受取あれ、いかにしてもわが妻たる事は動かす可からず』と云ひ放ちぬ。アンドレア、チェルリイニは少しく偏癖の人なりければ、稍快からず思ひしなる可し。されど日ならずしてジォヷンニは妻を迎へ、更に多くの嫁資を求めざりき。

かくて二人は伉儷の契淺からず、春去り秋來ること十八年、只明暮子といふものゝ無きをあかず思ひゐたりしに、ふと妻は只ならぬ身となりしが醫師の未熟なりしため、二人の男兒を半產にして失くしぬ。程なくまた身重になりて生み落しゝは、女兒なりければ、わが父方の祖母の名を襲きて、コオザと呼べり。二年の後また懷姙せしが、凡そ婦人は身體の容子にて、早くもそれと感ずるにや、しきりに之を信ずるものから、こたびもまた前と同じ心地すとて、必らず女兒の生るゝならむと思ひ込み、わが母方の祖母の名に因みて、レパラアタと名づけむと定めおきたり。千五百年萬聖節の祭すみたる其夜四時半といふに、その氣つきぬ。產婆は、かねてより一家の人々が女兒の出產を思ひ設けたるを知りたれば、嬰兒に產湯つかはせて、潔き襁褓に包むや否や、足音靜かに、父の傍に來りて『御身

が夢にも知らぬよき贈物を進ぜむ」と云へり。父は一種の悟を開きたるやうの人とて、此時室の上下を往來しつゝ「神の授け給ふものは常に忝けなし」と答へたれど、さてかの被け物をかいやりて、まのあたり意外の悦なる男兒の姿を見たれば、老の諸手を合せつゝ、天を拜して「主よ。まこゝろの底より感謝し奉るなり。忝けなき御贈物かな。よくも來りし」といふ。人々も悦に暮れて、さて幼兒の名を如何にせむと問ひけるに父は只「よくも來りし」とばかり答ふるのみ。かくて人々も之に決して、予は聖盤の前にかく命名せられ、今なほかく呼ばれて、忝けなくも世に生ふるなり。

四

予が三歳の時、アンドレア、チェルリイニはまだ存生して百歳を越えたりけむ、一日家人の水管を据ゑ更へ居たりしに、一疋の蠍、そのなか這ひいて、人々の氣付かぬうち地に墜ちて大椅子の下に入りしを、予は馳け寄て之を摑みぬ。その大いさは、わが小いさき手の一方より其尾はみいて、他の一端より二の箝突きいてたるほどなりき。予は大に喜びて『御祖父樣、この奇麗なる蟹を御覽ぜよ』と走り行きければ、祖父は之を見て色を失し、驚愕のあまり打倒れむとせしが、如何にもして予に之を棄てさせむと樣々に工夫し給へど予は愈々堅く握りしめて、はては決して手離さじと泣き哭びたるを、其時會々家に在りし父も聞きつけて馳せ來り、始は氣も顚倒せむばかり仰天して、予が此毒虫に刺されぬやういかにすべきと思ひ惑ひ給ひけり。されど恰もよし、一挺の鋏を見出ければ、いろいろ予を和だめ賺かしたる上、其尾と頭とを剪み斷ち給ひき。此大難に遇ひて予の恙なかりしを、後にはめでたき吉兆と喜び給ひぬ。

予が五歳の頃、父は家人の拭き淸めつゝありし二階下の一室に在りて、薪の燄に燃えあがる爐の前に立ち、例の提琴を彈きて、ひとり火邊に歌ひ給ひぬ。いと寒き日なりき。ふと火の心を何心なく覗き給ひしに、あかく燃えたる火焰の只中、蜥蜴の如き一小虫のさも快よげに動き戲むるゝを見、直にそれと知る否や、姉と予とを呼び寄せて、之を指し、突然わが頰のあたりを打擲し給ふ。小供心に驚きて予は泣きいてぬ。其時父は、「わごよ、汝に過失ありて今打叩きしにあらず、今しも火中に見たる蜥蜴の如き蟲は世に珍らしき火蛇 Salamandra といふものにて、今まで之を見し人あるを聞かず。そを記憶させむが爲なり」と、いと嫻やか

にわが頰に接吻けして、金すこし與へ給ひぬ。（つゞく）

支那文學の向上工夫

森槐南

晩近世界の耳目が悉く東洋に向て集中されて來ると云ふ氣運であつて見れば、吾輩の考ふる所では、支那の文學と云ふものは、將來慥かに世界の學問中、有力の地位を占むるものとなるのであらうと信じて疑はぬ。已に泰西に於ける學者の著述て支那の研究に關する書籍が年を逐ふて增加して來るのは爭はれぬ事實であつて、殊に近三兩年來列强諸國て刊行したる著書の目錄を見ると云ふと、其の文學に關係を有つて居るものが一ト雨每に殖えて來ると云ふ趨向である。政治宗敎風俗文字を異にするに拘はらず、泰西の學者が萬艱を排して此の一路に向て進捗して來る精力氣魄の雄大なるは、如何に貶して之を言はんとしても貶し樣がないのであつて、實以て感服の外は無いのである。

翻りて我國の學者と云ふものゝ現狀はどうかと云ふことを注意してもらいたい。先づ漢學者の側から云へば、彼等は充分東洋の學問に素養があつて、一ト通りの典籍を涉獵し、該博精通と稱すべきものも絕無とは云はれないに拘はらず、世界の人文の氣運だの、泰西の學者の趨向だのと云ふことには、一切無我夢中であつて、却て、我々は時宜に合はぬ、當世には容れられぬと云ふ樣に、引込思案の極が自暴自棄となり、學術は荒れる、文章は下手になる、其許て世間には疎外される、實に其の無氣力の程度が分らない位のものである。中には大變開けた風を裝ふて無闇に通がつて居る連中もあるけれど、此も大抵は遊歷視察などに出て來る豚尾先生抔を追い回はして、貴邦と我とは同文の國だとか輔車脣齒の關係があるとか普通一遍の御世辭を筆談で交換して、ホク〳〵喜んで御座る位が關の山であるとは情無い。或は又故さらに慷慨悲憤的の文字を弄して、それ俄國がどうだの、やれ英法德以がかうしたのと、支那の新聞屋が紹興酒に醉つて管を卷くのか何ぞの樣に、一種の狂熱に浮かされて居る「チャンカラ」もある。灰殼も左るものだが、「チャンカラ」と來ては鼻持がならない。

洋學者の側はあまり惡口を言ふと、そんじよそこらの忌諱に觸れる恐れがあるから、高い聲では言はれぬが、凡そ雑と見渡した處ではコイツ又東洋の學問と云

ふもの丶筋道が頭腦にないのだから、西洋人の發見を待て始めて大に狼狽し、ソレから急に圖書館へ這入つて二三の漢籍をヒネ繰り廻はし、ソコで一夜作りの東洋學問が出來上ると云ふ寸法が、先づ最極上等の部類の内であつて、それより以下の輩は支那の事にかけては頓と話にもならぬと云て宜しい樣だ。斯く申せばとて堂々たる正眞正銘の博士方の御卓説などを彼此批判するのではない、社會一般の傾向がかうであると僕は思ふと云ふに止まるのだ。斯ふ云ふ風で推移して行くと云ふと、所謂芋の煑えたも御存知ない中に、支那文學の蘊奥は盡く皆泰西の學者に先鞭を着けられて仕舞つて、千五百年に近く支那文字を輸入し人情風俗も亦泰西の彼れの如く天淵月鼈の差なくして自然に東洋の學を究むるに尤も便利を與へられたる國に生れた學者でありながら、呆然として負ふた兒に道を敎へられると云ふ始末に成るのは必定である。此の位間の拔けた話があるものか。

が、安心し給へ、まだ／＼現時の西洋人の東洋の學問を見て居る眼は幼稚である、淺薄である、皮相である、支那文學の精華と趣味とは、縱令ひ其の字句を飜譯し、其の意義を説明し得たるもの多々なりとするも、未だ容易に泰西人一般の頭腦には會得されて居ぬのである。支那文學中の尤も卑近なる小説であるとか詞曲であるとか云ふものすら、其の宣敎師などの手から歐洲に譯行されたは殆ど一百年前に在るに拘はらず、今以て途方も無い勘違をして折々奇異なる想像の論評を聞くことがある、元曲の趙氏孤兒（The Orphan of Chao）や看錢奴（The Misor）其の外琵琶記などの譯文も最多く行はれて居るけれども、孰れも只其の劇の筋ばかりを述べ或は其の體裁が希臘の古劇に似て居るといふことを喋々するのみで詞曲の趣味と云ふものは全く了解されて居らぬ。甚しきは彼の趙氏孤兒は戰國時代程嬰杵臼の故事を作つたものであるのを、宋の國姓が趙であるところから、此れは元朝が宋を亡ぼしたことを假指したものだなど丶、取つても付かぬ附會説を成して居るものがある。詞曲ですらこうであるから、况や漢唐の詩賦文章などは如何に意味文が譯出されてあつても、文字の妙は頓と傳はらぬ。それだから學の漢洋を問はず齡の老幼に關せず、苟も我が國の學者と呼ばる丶者で、今より飜然として舊轍を改め向上の工夫を此の點に求めて解ることがなかつたならば、勿論支那の文學は早晩どのみち世界の學問中僅に一席を占むる

ものであるに相違ないが、之を貢献するの榮譽は惜かに我が日本人の雙肩に荷ひ得らるゝことであらうと思ふ。

獨逸演劇談

文學士　藤代禎輔

◎私はミユンヘンには二ヶ月位しか居りませんでしたが、もう日本に歸る間際でしたから、勉めて芝居を見やうと思ひまして可なり足繁く劇場に參りました。

◎ミユンヘンには王室劇場が三つありまして、其内セークスピア舞臺のある「ホーフ、テアーテル」とワグネルのバイロイト劇場に模して作た「プリンツレゲンテン、テアーテル」との二つが大劇場で今一つの「レジデンツ、テアーテル」は一種の特色を備へては居るが小さなもので御座います

◎セークスピア舞臺はどういふものかといふに他の劇場では舞臺面を變化せしむる時には燈火を消して眞暗にして其間に道具建や書割などを換へるのですから非常に觀客の美意識を妨げ、幻想の中絶を來たす恐がある。元來セークスピアの劇は場面の變化が殊に多いものであるから、廻舞臺でも使はなければ前云ふ樣な不都合は到底、免かれないのですが此セークスピア舞臺では幕を以て舞臺を二ツにも三ツにも仕切り其幕を取り除ければ次の場面が直に現はれると云ふ仕組で他の舞臺で感ずる樣な廻舞臺の不足を殆んど覺えぬ位でした、ミユンヘンにも一つ廻舞臺があつて前に一種の特色があると云ふた「レジデンツ、テアーテル」がモツアルトのネペラを演ずる時之を使ふ相ですが私の滯在中は生憎其好機會に逢ふ事が出來ませんでした。

◎彼の有名なバイロイトの事は大抵の人が御存知であらうと思ひますが、其盛况といふたら實にすばらしいものです、毎年七月廿日頃から八月の終頃まで四十日許興行するのですが、其切符は三月一日から賣出すのです、然し三月になつてから買ふとしても遲くて買へない事がある、大抵一月頃から申込まなくてはならぬのです。

◎バイロイトの劇場は二千人位入れる樣に覺えますが、場所が偏鄙で旅館なども少いのですから、其興行期には普通の家で皆客を宿して置くのです、其宿や切符の事は事務所に賴めば一切やつて呉れます。偏鄙だといふても鐵道の便はある所ですから、近傍の町に宿

りて滊車で見物に來る人もあります。

◎又毎期の興行には五六番の樂劇を一組として大抵一週間で一組を演じ切る樣に爲て居りますから六週間の興行期に六回位繰り返してやることになるのです、劇場は扇の形に開いて末の方は廣くなつて居ます、場代は何處でも一名十圓で棧敷とては別に御座いません、棧敷らしいものはあるが其處はワグネル夫人や又其招待に預つた人などが居るのです。外の劇場は大抵圓形であつて場代は土間で二圓乃至四圓位です。

◎バイロイトの他の劇場と異つた所は今申上げた通り其形の違つて居ること丶又奏樂所（オールケストラ）の見えない事、又極めて靜肅であつて演藝上の妨害になることは一つもなく最も理想的に出來て居る事で御座います。

◎日本ではよく「成田屋」とか「音羽屋」とかいふて役者を賞讃するので御座いますが、西洋では多く拍手をするので、よい役者が出て、上手に藝をすると其役者が退場した時、又は其幕の終つた時に拍手をするのです、すると其役者は舞臺に出て御禮をする、時によつては三度も四度も呼び出されて賞讃を受くることもあるのです、大抵の國では其幕の終つた時に拍手するのですが、佛蘭西では其役者の退場をした時幕の切れ目であらうがあるまいが直に拍手するのは餘りよい風習ではありません、然し日本のやうに其役者の演藝中に騷々しい聲をかけたり、拍手をしたりする所はありません、バイロイトでは一日の興行が全く終りを告げてから拍手をなし、且つ役者も御禮に出ることなどしないのは俗氣がなくて大いに見上げたもので御座います。

◎日本では黑人連の人は大入場や一幕見の方に多いといふ事ですが、西洋でもオリムプ（彼のオリムピアの山に擬したもので高い所といふ意味です）といふ所があつて其處には黑人連が多いといふ事です。オリムプからは舞臺は全く見えないのですが、つまり音樂や節廻しなどを研究的に聽きに來るといふ事です。

◎獨逸で最も注目すべきは日曜日の晝芝居といふものです、勞働者は平常芝居を見る樣な時間がないのに又高い錢を出すことが出來ないですから、特に日曜の日に芝居を開いて安い錢で勞働者に芝居を見せるのです。これは午後二時頃から四時半乃至五時頃までやるのです、前に云ひましたミュンヘンのプリンツレゲンテン座は夏季の間はバイロイト同樣ワグネル物ばかりの興行があつて場代も十圓取りますが其が終ると日曜

の書芝居を安く興行して大家名流の傑作を演じて國民の趣味養成を謀つて居り升。

◎西洋では役者の地位が賤しくないといふことを申しますが、現にミユンヘンの王室劇場の總督をして居るポッサルト氏などは貴族に列せられて居るのです。

◎又獨逸にはシルレル賞金といふものがあつて一番毎五年間にエライ作物を出した人に賞金を與ふるのです最近代に爲つて審査員の方からは何時でもハウプトマンとズーデルマンを推薦するのですが皇帝の氣に入らぬので御許しにはならない相です。最後に此シルレル賞金を受けた人はウィルデンブルフといふ人で此人については面白い話が御座います。

◎ウィルデンブルフ氏は今年五十九歳の人で重もに歴史劇を書いた人です、此人の兄弟が軍事教育の任に當つて日本に來て居た事があるので、其人から日本の話を聞て、大變日本贔負の人です、私は先生と親しく會談をしたことがあるのです。

◎私の逢ひましたのは丁度星亭が伊庭想太郎に殺されて間のない頃でありましたが先生は大變に伊庭を褒めまして禮儀を正し、其罪をいひ渡して殺した所などは實に古のゼルマン武士の精神である、悲しい哉我獨逸ではかゝる氣風がなくなつてしまつたと嘆ぜられました。

◎又「忠臣藏」の話が出ましたが先生は大變に此戲曲を賞讃して、大星由良之助などは實によく出來てある、其心裡の描寫などはセークスピアにあらざれば出來ぬ程の處があるといはれました。先生は英譯によつて「忠臣藏」を見たのですが英譯も獨譯も何れも其飜譯がまづいのですから私も及ばずながら譯してお目に懸けやうが、少くとも三年を待て呉れといふて別れて參りました。齋藤修一郎君や井上十吉君の英譯があるといふ事ですが私はまだ拜見しません。

◎彼の「心」といふ脚本を書いた北里闌君が「佐倉宗五郎」のことを獨逸の脚本に作りましたが私は之をウイルデンブルフ氏に送りました、先生はアッサリして芝居流のゴテ〳〵した所がなく然も人の心を感動せしむる作であるといふて大變に褒めてよこしました、又衣裳やなんかを少しく變ずると獨逸の舞臺にのせてもよいと思ふてツイマールの劇場監督に送つてやつた、君の友人の作が詩聖ゲーテやシルレルの作と同じ舞臺に演ぜられるのは甚だ面白いじやないかといふてよこしましたが、之はとう〳〵物にならずに終つたのは殘

念てした。

◎此「佐倉宗五郎」の戯曲は「花雲佐倉曙」やなにかの翻譯ではありません、北里君は事實によって別に想を構へたのです、昔の子別れの所を夫婦別れに書きかへてありますが實によく出來て居ます、北里君は其前に「ナムアミダバ」（南無阿彌陀）と「文雄」といふ二脚本を獨文で書きましたが矢張り佐倉宗五郎が一番よく出來て居る樣です、北里君はハウプトマンと知り合ひだ相です。

◎ハウプトマンとズーデルマンと何れかエライかといふことは屢々論じられて、又人によっていろ〳〵に違って居る樣ですがズーデルマンの方は人氣に投ずることが上手な人で舞臺に演ずる上の成効は遙かにハウプトマンの上にあらうと思ひますが、深遠なる詩想に富んで居る上ではズーデルマンはハウプトマンに一籌を輸せざるを得ないかと存じます。

◎彼の有名な沈鐘はハウプトマンが大いに辛苦して自然主義を歷史劇に應用して作った「フロリアン、ガイエル」と云ふ劇が全く不成功に終ったのを彼の鐘が山上から水中に投ぜられたのに譬へて書いたといふ話ですか、それを思うて沈鐘を讀んで見ると一段の味がある樣に思はれます。

◎以上申し上げたのはよく〳〵の座談で御座いますから其積りてお聞き取りを願ひます。

日本内地旅行記

チヤーチル女史

○他人の家を覗く

予は晩餐を喫したる後、大通りを散步し、帝國ホテルに至りぬ。ホテルの構造は偉大なれども寧ろ陰鬱に見え、其窓には種々なる翅蟲飛び廻れり。大通りには人の集ること甚だ多く、途の兩側なる舖石に添うて物品を商ふ小賣人も亦少からず見受けられたり。歸路數多の人家の前を通過したるに、掛け下ろしたる簾を透して内なる人の後姿を明かに見ることを得ぬ。突然或家の前にて三味線の音の聞えたるに、思はずも立止りて差覗きしが、二間許り隔りて薄暗き燈火の下、一人の婦人敷物の上に坐し、低調子にて三味線を弾き、靜かに小唄を歌ひつゝあり、予は案内者たる松田氏に、此婦人が予の屋外より見つゝあることを知るべきやを

問ひたるに、松田氏は稍々不快なる面持をなし、日本人は決して他人の家を覗かず、他人の家を覗くは良風にあらずと答へぬ。予は心中甚しく慚愧の念に堪へざりしが、日本人と雖も倫敦に至り人家の開きたるを見ば、恐らく其中を覗くべしとのことを思ひ、自ら少しく慰むるを得たり。

○商店に遊ぶ

翌日予はトレンチ氏の下男の妻にして英語を話し得る日本婦人を伴ひ、商店を見廻らんとて出て行きぬ、予は呉服店に行きて、美しけれども予には無用なる帯を買ひ、夫れより骨董店に行きたるも別に店らしき形を具へず、たゞ小さき家の床の上に莞爾たる小兒の坐せるあり、我等に叮重なる叩頭をなし、坐布團、茶及び菓子等を運び二三の箱を携へ來りて徐ろに綠色の紐を解き、縮緬の手巾を開き、中より美しき漆器、陶器並びに青銅器等を示したり。予が此等の物品を嘆美すればする程小兒はます／＼笑ひ、恰かも其物品を愛好するが如き叮重なる取扱をなして以て予の前に種々なるものを持ち來りぬ。

予は此骨董店と横濱に於けるそれとを比較したるに横濱にてはたゞ外人の趣味を喜ばしめんとし、日本的の最良なる美術品を示さずして却て一見人目を惹くが如き俗受けよきもの、即ち金色燦爛たる花瓶等の如きものを出すに過ぎざりき。此日は予が目の最も大いなる快樂に耽けりたる日にして、夫れよりブリンクリー氏と食事をなし、且つ氏の所有にかゝる陶器及び青銅器の立派なる藏物を見るの榮を得たり。此等の物を見るには實に非常の長時間を要しぬ、何となれば物品は階下なる庫中より一つ宛持ち運ばるゝを以てなり、日本人は概ね貴重なる物品を庫中に藏し、或一定の期間に用ふる小數の物品をのみ臺所に置き、之を用ふること二三週間なれば、又直ちに元の所に納め、他のものを持ち來るが如き風習なり、かゝる風俗なるを以て貴重品は最も適當なる賞玩を得、又目に現はるゝ毎に趣味を示すが如くに思はるゝなり。日本人は歐洲人の住居を以て無趣味にして恰かも商店の如しなどいふも強ち理なきことにはあらず。尚夫れよりブリンクリー氏及びトレンチ氏と共に東京の岩崎氏の邸宅及び園庭を見て、面白き此日を了りたり、吾等は海藍色の着物を纏ひ、古びたる帽子を戴きたる御者によりて長き道を驅け岩崎家に着したり。

○岩崎氏の邸宅

邸内には二構の家あり、一は洋風にして高貴なる物品に滿ち、他は瀟洒なる和風にして、僅かに石を投ぐれば屆く程の距離にあり、主人は常に和風の方に住居せり、吾等は靴を脫ぎて宅内に入りぬ。予は此家のいふべからざる趣味をあらはさんことを願ふや切なり。されど室内には器具なく、裝飾なく、一二の掛物の外繪畫なく、又窻掛なきを以て其魅するが如き趣味の何處に橫はれるかを明言する能はざるを悲しむ、たゞ其敷物の奇麗、木細工の巧妙、障子襖の造作、何處にも塵を止めぬ淸潔、坐敷の配置よき間取りの如き相合していふべからざる趣味を現じ、いたくも予の心を喜ばしめたり。壁には野鳥の翱翔する樣を彫り、窻は開きて庭園に向ひ、古色を帶びたる石燈籠の眺め甚だ佳なり。別室なる茶の間は十呎四方位の小庭に面し、凹凸多き巖、刺彩しき藪、急湍に架せる橋等の景、さながら自然に見るが如き野趣却て茶の間の儀式と絕好の對照をなしたり。喫煙室の前には人工によりてなれる池あり、巧みに植えられたる樹木、其岸に沿へる矮木、又は奇にして種々の色彩を呈せる巖石等弘大なる庭園を作れり、思ふに此岩石一つにても甚だ高價なるものなるべく、恐らく遠隔の地より運搬せられたるものなるべし。西陽沒せんとする時池中高く躍る魚の形を見たり、我等は殆んど薄暗くなるまで園中を散步し、小道の曲折する所には全く新らしき光景を呈し、實に其變化の甚しきを嘆賞せり、園庭と邸宅にて凡そ二十四エーカーなるが其屋敷は其四倍あるが如くに見ゆ。夫れより歐風の邸宅に入るに數多の召使人あり、又卓上には菓子、サンドウッチ等種々の馳走竝びて我等を待てり、岩崎氏は此に住せざるも予は其苦心を費せる準備について感嘆せり、ブリンクスリー氏は予に告ぐるに日本人は已れの邸宅に他人を入れ、又は富者と考へらるゝことを好まず、客の接待叮重を極むるも其邸宅を示すを喜ばずといふことを以てせり。

○日光の莊嚴

其後我等は日光見物に出掛けたり、最初に予の目を惹きしは神橋にして甚だ美はしきものなりき、赤き漆を塗りたる大門は急流大谷川の白水に映じ、一方は薄暗き洞道と相對して一種の偉大なる光景を作る。普通の人民は之を通過するを許されず、獨り皇帝のみ年一

回之を通過す、一端にある電燈の光りも却て目障りなりき。日光は東京に比して溫度の低きこと凡そ八度乃至十度たり、されば吾等は輕き夏服にては非常の寒さを感じ、炭火の助けをかりて漸く身震ひを止むることを得たり、殿堂の內部を見るべき許可の至るを待つ中、吾等は霧降瀧を見んとて出で行きぬ、山を上りて眼を擧ぐれば其景頗る美なり、予は日本語は用ひて「オイお待ちよ」といふ言葉を屢〻繰り返したり。食後我等は含滿が淵にある石像を見んとて行きぬ。河を橫ぎれば我等は其場處—實に奇怪なる佛像の長き列—に達したり、これ凡そ七世紀頃の聖人此山の開祖勝道上人が日光の神々に捧げたるものなりといひ傳へらる、我等は此石像の數を數へたるも各人皆其の數を異にしたり、口碑によれば此石像を數へて未だ二人と同數を得たることなしといふ。中流の近くべからざる石上にサンスクリットを以て記せるハムマンといふ語を彫りたるありこれ聖僧弘法大師が其筆を石に投じて記したるものなりと想像せられたり。

我等は雨と洪水との爲めに此仙境に長く住ることを得ず、早くも東京に歸らざるべからざるに至りぬ。自然の怪力に勝たんとするは人間の能はざる所なり、我等は一日に三回も衣服と靴とを改め歸りを急ぎぬ。彼のピエル、ロテ氏が描ける洞穴に沿へる道を走ること廿三哩兼て計畫したる中禪寺行も全く畫餠に歸したり。されど我等は此歸路に就くの前、あらゆる殿堂中最も美麗なる家康及び家光のそれを見物することを許され、且つトレンチ氏より得たる特別の待遇券を以て普通に許されざる內殿をも拜觀することを得たり。

大いなる豫望は多くの場合に失望を招くものなれども家康の堂の實際と其壯麗とを見るに及んで予が豫望よりも遙かに優り、其感嘆を記すべき適當なる言葉なきを見出しぬ、殿堂の周圍は景も美麗にして森嚴に、年を經て苔むせる石段、空を凌いで建てる大いなる鳥居、鬱蒼たる樹木に半ば蔽はれたる五重塔、一つとして珍奇ならざるはなし、此殿堂は予の記するを無用とする程幾度も〱記載せられぬ、されど予は同一の人が一週の間每日此れを見物するも到底其美を知悉する能はざるべきを感じぬ。奇妙なる彫刻、天井の細工、金箔塗の美麗、靑銅の器物の壯觀等たゞ驚嘆するの外なし。我等は特別なる待遇を受け、其首長なる僧侶自ら六人の從僧を伴ひて我等を招待せり、眞に偉觀を極めたる陽明門を通過して其數百の龍及び花の彫刻を見

唐門を經て堂に至りたるに二人の僧侶は其入口に跪けり、一人は帽子を着けて綠衣を纏ひ、他の一人は白衣を着たり、此聖殿の最も聖なる內殿に至りたるとき首長なる僧侶も亦跪きぬ。燈火の光幽かにして僧侶の全身は辨ずる能はざりき、思ふに周圍の偉大なると僧侶の高貴なると、而して幽かなる燈火及び香の薰り高き空氣とは何となう人心を鎭めて、一種の宗敎心の起るを禁じ得ざりき。是に於て案內者たる松田氏は身を平伏して叩頭し、予は頭痛を起さゞるべきやを氣遣ひたる程幾多も其頭を床に打ちぬ。內殿は小なれども美麗なる裝飾に滿ち、漆塗の天井を張り、神將家康の劍及び甲冑を入れたる二三の硝子の櫃を床上に安置せり、美しき金塗の扉を排けば即ち最後の神殿にして之を見得るものはたゞ皇帝と首僧との二人のみにして其中には家康の像を置けりといふ、松田氏を介して我等は首僧に謝辭を述べたり。首僧は愉快げなる笑を洩らす老人にして白衣の上に海靑色の衣を纏ひ、黑き烏帽子を戴き其下を頤の下に結べり。

家光の內殿は一層洪大にして室內の四方には黃金の柱を建てたり、中央に於ける低き卓上には聖經、香爐、及び金蓮花を立てたる瓶を置き、美しき天蓋此上を掩へり。此家光の殿は佛殿なるを以て神殿なる家康の殿堂よりは數多き裝飾を附したり、聖殿に近く神馬と稱する小なる白馬を畜きぬ、

歸路我等は雨を侵し來る三人の家族に出逢ひしが其袖ある衣服の不便なるが如く見えしは實に氣の毒なりき、主人は灰色の着物に高き下駄を穿き、四角なる帽子を戴き、眼鏡をかけ、日本の傘を持ち、夫人は日本風の髮を結ひ、珊瑚珠の根掛と櫛とを飾りとせり、あゝされども黑く染めたる其齒よ、これ彼女に尊敬を齎らすものとせらる、如何なれば道德はかくも醜くからざるべからざるか、予は母の背に於て人形の如く熟睡せる小兒のことを記せざるなり。

○日本の舊都と美術

予は最後に日本の舊都にして美術の中心なりといはるゝ京都の見物によつて日本內地旅行を終りたり。此地は一種特殊なる趣味と其地方的色彩とを以て吾等を喜ばしめたり、吾等は午後七時此地に着き、停車塲より彌阿彌旅館に至りぬ、人力車は各〻二人の車夫に引かれ、無數の狹路を疾走せり。吾等の宿りし坐敷の眺望頗る佳にして、谷の下に燦めく數千の燈火に暫らく

恍惚として我を忘れぬ、其後ろなる山々は夕べの空に一線を劃して得もいはれぬ景色を呈し、そゞろに詩人の章句を忍ばしめぬ。翌朝、予は絹工場なる高島屋を見物せんとて行き二時餘りの間美しき絹布及び縫物を眺めて實に愉快を極めたり、近世の絹布はげに美はしくなれるかな。予は未だ材料に於ても工作に於ても此美麗なる縫物に比すべき支那陶器又は古代の織物等を知らざるなり、夕食後近隣の神社佛閣を散歩し、人民の集りて禮拜する有様を面白しと眺めぬ。彼等は社前に進み、神の注意を惹かんとて太皷を打ち、又は高く懸れる鈴の綱を引きて之を鳴らすなり、かくしたる後其祈願をいひ、以て其が必ず神に達したるべきを信ず、行き〳〵て我等は芝居通りに至りぬ、こゝには人力車にて行くことを許されず、人の集り居ること實に夥しく燈火の數甚だ多くして明煌々たり、各劇場の外には場内に演じつゝある狂言を畫にしたる美しき看板を掲げたり。吾等は女芝居に行き我等には解すべからざる日本芝居の二幕を見たり、驚くべき服裝—軍裝せる大名の姿—、夫人の失望して涕泣悲嘆する有樣—又彼の「腹切り」等は演ぜられぬ。我等は十日にして充分京都を見物し、種々の商店及び製作場にも行けり、こゝには横濱の如き光輝燦爛たる工藝品はなかりしも一種古風の趣味あるが如く思はれぬ。人或は美術は日本及び支那を去りて亞米利加に移りたりといふものあるも、又東洋にも一種の獨特なる所存すべしと思はる。日本の美術は我等には何の美ありと感ぜられぬ所、否な往々缺點なりと思はるゝ所に甚しく賞玩せらるゝものあり、一見素朴不完にして是れ猶ほ美術品かと疑はるゝ如きものを捉へて一種いふべからざる趣味ありとなす、是れ一種の好奇心に相似たるものにして、かゝる物品に向て非常なる高價を拂ふを敢てする彼等の精神をば、如何なる研究心強きものも究むるを難しとすべし。

○琵琶湖

我等は日光を見たる後、神社佛閣を見ることには寧ろ厭き果てたるを以て強て此れに行かんともせず、たゞ僅かに一千三百三十三尊の金塗の佛像と日本婦人の頭を以て作りたる綱のかゝれる招魂社とを見たるのみ。又我等は一日琵琶湖に遊覽せり、道は長くして汚く、人力車にも甚しく嫌厭したり、途上の景は佳ならず、路傍牛馬に等しき勞作をなす農夫の狀態いと哀れ

なり、險惡なる道を重き車を引き、女は胸に綱をかけて、夫の前を曳けり、予は小坂の上に血を流し居る一婦人を見たり、湖水の眺望は絶佳にして之をかき盡す筆なきを悲む、其湖畔には日本に於ける最大の松樹生じ、其無數の蜿蜒たる根、及び屈曲したる根は是れも木なるかを疑はしむるが如し、又桂河を見たるに其兩岸の小丘方さに秋色に滿ち、風吹かば落ちなんとする楓葉の眺頗る美なり。歸路の單調は美はしき夕陽と、出て初めし月光によつて破られ、甚しき倦怠を覺えずして京都に歸りぬ。

○日本服を作る

予が京都を去らんとするの前、處の裁縫師は予の爲めに一かさねの日本服を作り、予は之を着るに必要なる數多の敎を受けたり、其日本服は「襦袢」、「着物」、「襟」、「帶」、「帶揚」、「帶〆」、等より成れり。冬期に至れば男女とも數枚の着物を重ね、婦人は頭巾を被ると雖も寒さを感ずること甚しきを以て、我等の温かなる服を羨むこと非常なり。

予は支那に渡らんとして神戸より我國の汽船「アンコナ」號に乘れり。此平和にして美麗なる日本國、其男は體厚く、其女は靜かなる日本國を去るに當つて予は悲しといふよりも一層激しき感情を以て充されたり、予が耳は尙日本固有の二つの音―煙草の吸ひ盡されたる時カッ〳〵と打つ煙管の音と田舍の街道を行く盲人の笛―を聞くが如き思ひ失せざるなり。　（完）

柏軒と華山（其三）

美中天

華山と柏軒と、其文章に於ては則ち反對の位置にあり、然らば其他に於ては如何

柏軒はまた事務の才あり、彼は編輯長として最も適當なる人也、彼れ編輯局にあるや寸時も筆を釋かず、精力のつゞく限り、時間の許す限り、頻々來る處の報知を取つて悉く自ら筆を下す、其一の面たり二の面たり三の面たるに關せず、已むを得ざる場合の外、之を他に命ずることとなし、彼れ若し千手觀音ならば萬朝報は彼れ一身にて拵へ得べし、流石の黒岩も舌を卷くといふ、故なきにあらず、彼れ幼少より新聞社に在り其新聞記者的たる言を俟たず

華山よ願はくば直言を許せ、華山は全く文士的にして事務の才に至つては全く欠乏すといはざるべからず、長き年月の間鍛へ上げし腕ば流石にファースト、ライターとして耻づるなしと雖も、彼れは新聞を作ること能はず、只其巧みなる筆を以つて書くのみ也、彼れ宿直に當るや、職工等の不平絶えずといふ、然れども彼れが人物の甚だ好良にして無邪氣なると、時々菓子を馳走する爲め、職工等また彼と親めりと、また愛すべからずや



思潮

都市の衛生

「六合雜誌、都市問題の研究の一節」

都市の經營も一家屋の經營も其原則に於ては別に異なる所はない。先づ第一に考ふべきことは衛生といふことで、其次が便利といふこと、亦其次が修飾といふこと、これは必ず常識を備へたる人の採るべき常道であると思ふ。若し經濟が許すならば此三者を同時に備ふることも出來るが、都市の經營は一家屋の經營よりも幾萬倍乃至幾十萬倍以上の經費を要する者であるから、到底一時にこれを具備するといふ譯にはゆかぬ。故に吾人は都市問題の中心は衛生問題に在るといふのである。先きに揭げたる項目に就きて觀察するも衛生問題が首位を占めて居ることは明てはないか。道路の掃除や撒水は主として衛生の爲になすのである。上水及び下水も、汚物掃除食物の取締も、其目的の衛生に在ることは言ふまでもない。傳染病に對する設備は直接に、公園の經營は間接に衛生を目的とするものである。其他家屋建築上の取締の如きも明に衛生に關係を有するものであつて、市の立法并に行政機關、及び警察の如きも其職務の重要部分が衛生に在ることは言ふまでもない

衛生問題の第一として吾人の研究すべきは上水及び下水の設備である。不潔なる飲料水を用いる所の都會に傳染病の多く流行することは爭ふべからざる事實である。備前の岡山市は飲料として重に河水を用いて居るのであるから、一昨年虎列剌病の侵入を受けし時には忽ち五百名許の死者を出した。玆に於て市民は奮發して水道を敷設することを決し、今は殆んど鐵管の敷設を終つたとの事である。東京、大坂、横濱、長崎の如き都會には僅に上水の設備は出來たが、完全なる下水を有するものは我國中恐らく一の都會もあるまい。且つ唯今の如き有樣にては、よし上水を有するとしても傳染病の侵入を全く防禦するといふ譯にはゆかぬ。何となれば大部分の人々は尙ほ舊來の井水を用いつゝあるから、何時傳染病に襲はるゝかも知れないからである。且つ下水の設備なきため汚水は自由に地中に侵潤して井水を汚すの恐があるから、全く傳染病を根治せしむることは不可能であると言はねばならぬ。東京市民の多數は未だ水道の何物たるを知つて居ない。水道の水を用ゆるは一の贅澤に過ぎないなどゝ考へて居る人も少くないらしい。況んや下水の爲に數千萬圓を投ずるが如きは到底東京人士の斷行し得ざる所である。然れども吾人は記臆せねばならぬ。完全なる上水と下水を有する都會は赤痢、虎列剌、窒扶斯、實布底里の如き傳染病を全く拒絕することが出來るのである。吾人が設備を爲さざるため、常に此等の疫病に襲はるゝとは誠に情なきことではないか

下水工事は啻に前段陳たる點に於て必要なる許ではなく、實に大切なる問題を含蓄して居る。即ち糞尿の處分法である。我國人は久しく糞尿を以て肥料となし來りたるが爲に、彼の歐米の諸都市に於けるが如くこれを河海に放出することを以て不經濟と考へて居る。然れども一たび衛生の點より考ふれば、今日の糞尿取扱法程不潔にして、不衛生なるもの

はない。一戸に付き平均二個の厠ありとすれば東京市中に於ける肥壺の數は實に驚くべきものではないか。人家稠密なる下町においては厠に接近して井戸の堀られたるもの決して少なくない。假りに一町四方の面積に在る家屋を除き去り、唯肥壺のみを殘し置かば其光景果して如何あるべき。想像するだに不快の感を起さざるを得ないのである。且つ晝間肥桶を滿載したる車を陸續街上を練り行くが如き何等醜態であるぞ。然も完全なる下水さへ出來上れば此等の問題は直に解釋されるのである。若し下水を通ふして糞尿を河海に放出することを以て不經濟と思ふ人あらば、彼のグラスゴーやベルリンに於て實行せるが如く、下水を市外遠隔の地に集注せしめたる上其肥料を蒐集することも六ヶ敷ことでない。兎に角人々が衞生てふことに重きを置くに至れば都會の井水は決して完全なる飲料でないことを知るに相違ない。然らば完全なる上水下水の爲に數百萬乃至數千萬の金を投ずるも決して贅澤でないことを悟るであらふ

吾人が都市問題研究の必要を叫ぶ所以のものは自己の生命の貴重なることを思ふからである。若し都市衞生の經營宜しきを得て年々死者の數を減ずるに至らば是れ即ち吾人の生命に其だけの安固を來したるものてはないか。市會議員の多數は死者の數一割減じたることを以て大なることと考へず、唯市税の一割にても增加することを以て却つて一大事であるかの如き思ふのが常てある。實に無知無學も甚しいてはないか。文明連國の都市に於ては最早傳染病を恐るゝといふよりも、其侵入を以て一の耻辱の如く考ふるに至つた、是は實に當然の事てある。若し傳染病は吾人設備にて全然これを拒絶し得べきものすとば、其襲擊を受くるは天災にあらすして吾人の過失てはないか。換言すれば赤痢、窒扶斯、虎列剌、などに惱まさるゝ我市民は其文明の程度に於て尙ほ甚だ幼稚なることを自白するものてはないか

教育者の覺悟

「教育時論」

貧窮なる學校教師は、復た再び戰爭に勝ちたり。屢々生活の困苦に煩惱を嘗め盡せる、儉朴なる學校教師は、深く最強の帝王を屈服せしめたり。墺國に於て、嘗て國步艱難なる時に當り、學校教師が、儼然其の貧窶なる衣服を脫し、歷史的偉人の容を以て、兵馬倥偬の間に現はるゝを見たり。又嘗てボヘミヤの戰場に於て、普漏斯の學校教師、勝利を博したりしといふ。而して歷史は鮮血に染れる桂冠を以て、日本の學校教師に捧げつゝあり日本の教師は、兒童の精神に、偉大の幻象を與へ、其の性情の尙ほ新鮮にして、柔軟なるに方て、之を形作し、且つ其の心力を強固にして、以て他日壯年に達するに及び、至難の業に堪へ得るものと爲せり」とは、墺國新聞「ノイエ、フライ、プレッセ」が、日露戰爭に於ける、我が軍の連戰連捷を觀て、其の之を致せる所以は、小學校教育に在りとなし、以て我が小學校教員に與へたる贊辭なり。其の全文は、本誌前號に之を揭げぬ。我が小學校教員は、這回の戰爭に於いて、獨り知己を內國に得たるのみならず、又之を世界に得たり、亦自重せざるべけんや。

然りと雖も我が小學校教員は尙ほ之を以て滿足すべからず。彼の普墺戰爭に於いて、及び普佛戰爭に於いて、勝利の月桂冠を博したる、獨逸小學校教員は、更に又他の方面に於いて、大勳功を奏したるなり。何ぞや。所謂平和の戰爭に於ける。良兵士の教育これなり。獨逸が千八百七十年、及び七十一年に於いて、佛國を征服したる當時に於いては、世界は、同國を觀るに、只武弁一偏の國なることを以てしたりしが、爾來僅ゝに十餘年にして、世界の商工業界に於いて、又雄視するを得るに至り

たり。從來英國は、世界の商工業國を以て自ら任じたりしが、其の世界に於ける市場が、獨逸の製造品、及び商業者によりて、漸く壓倒せられんとすることを觀て、此に一大恐慌を生じ、獨逸の斯く速かに、商工業界に勢力を得るに至れる所以は如何といふ研究、英國識者間に始まり、其の結果、又是れ獨逸の教育、之をして然らしむることを悟り、速かに委員を派遣して、獨逸の教育を調査せしめ、爾來商工業上、教育の最も直接影響あることを認識して、或は特殊教育調査委員を設け、又商工業教育の方法を講じ、營々役々、日もこれ足らざるの觀あるは、即ち彼の國現時の狀況なり。即ち獨逸の學校教員は、又商工業なる平和の戰爭に於いて、英國を凌駕するの名譽を負へるなり。而して今や「日耳曼侵入」German invasion といふ語か、世界を震懾せしむること、彼の「黄禍」といふ、空想無根の捏造語の如きものにあらざるなり。我が小學校教員は、武力の戰爭に於ける、强兵士を教育したるのみを以て、滿足すべからず。須らく彼の獨逸小學校教員の類に倣ひ、又た平和の戰爭に於ける良士卒を教育せんことを企圖せざるべからず。單に武力の戰爭に於ける勝利を以て、最終の勝利者となすべからず。「最終勝利者たらんには、必ず又平和の戰爭に於いても、勝利を博せざるべからざること、文明世界の大勢たるなり。陸海兵士としての吾か國民は、斯くしも其人格に於いて優勝なりと雖も、其の農たり、商たり、將又工人としては如何ん。陸海兵士としては、今や世界に雄視するに足るべき價値を現はせりと雖も、農商工實業家としては、其の技倆、或は清人にも劣るにあらずや。之を「日耳曼侵入」の語の下に、世界を震懾せしむる、獨逸人に視るに果して如何ぞや。所謂最終の勝利たらんと欲せば、我が國民は、平和の戰爭に於いても、亦勝を制すべき良士卒たらざるべからず。而して我が學校教員は、這回の戰爭に於いて、內外人が發する賛辭を以て、滿足することなく、進んで獨逸の學校教員の如く、又此の平和の戰爭に於ける良士卒を養成せんことを期さるべからず。

經濟上より觀たる日本の戰鬪力

『時代思潮』

近時戰局に關し、觀察を下すもの丶動もすれば曰はく、日本は砲火の戰鬪に於て、恒に全勝を博するも、經濟上の戰爭に於て、露國に一籌を輸せむと。而して斯る說が、我が國情を知らざる歐米の門外漢に依りて唱へらるゝのみならず、民間有識者の、密に憂ふるに至っては、吾人の怪訝に堪へざる所也。事實の現證を見よ、日清戰役の當時、前後八千萬圓の公債を募集するや、民間の資本家が募集に應じ拂込し金額は約四千萬圓にして、殘りの半額は日本銀行及其他の銀行の斡旋に由り漸やく定額に達したる位なりき。十年前に於ける我國の經濟事情は實に此くの如きものなりし也。然るに如今二億圓の公債を募りたるに、現時までに既に拂込し額八千萬圓に達し、而かも其の八千萬圓は、銀行其他の機關に由らずして、民間の純粹なる資金を支出したる上に、各銀行の引受ける大藏省證券二千萬圓を加ふれば、即一億圓の金は民間より支出されたるにも拘らず、經濟社會は依然として、尙金融の緩漫を唱へ、商工業者は預金多くして、放資の方法に困却しつゝあるは、畢竟十年間に於ける我國經濟力の著るしく發展したるに因らずんばあらず。

若し戰爭にして長く繼續すれば、貿易上に及ぼす影響として、輸入品を增加し、輸出品を減退せしめんと憂ふるものあるも、刻下の經濟事情は決して斯る心配なし、例へば米の如き非常の豐作にして、農商務省最近の報告に依れば、全國を通じて五千百萬石の收穫あるもの丶如く豫想

せらる、果して然らば是れ平年の米作に比して七八萬石增加したりといふべく、又一昨年の收穫高三千六百萬石に比すれば、僅に千六百萬石を增加したりといふべし、一昨年より昨年に掛けて、約八千萬圓の外國米を輸入したるを以て、今後も亦輸入を見るべしと想像するは誤謬も亦甚しと云はざるべからず。斯く一方に於て國內生產物の增殖と同時に、他方に於て戰爭といふ大なる廣告に依り、世界の新聞紙が爭つて、日本の事情を掲載する爲めに、勢ひ雜貨類の海外市場に於ける賣捌多く、或る雜貨商の如きは、註文を受くるを謝絕し、又ハンカチーフ團扇の如き商品は、殆んど外商の要求に應じて製作し兼ぬる程の繁忙を極めつゝあり。されば日本が苟くも太平洋の制海權を有する限り、戰爭は幾年繼續するも、輸出品は增加すべく我國の生產物は、恒に海外に於ける市場を有するものと斷案せざるべからず。

戰爭は單に資金の戰爭にあらずして、米、鑵詰、器械、運輸力等の戰爭なり、故に一億圓の應募力あるや否やの問題は、一億圓に相當する米鑵詰、牛肉其他の必需品の有るや否やの問題なり。されば十年間生產力に於ける大發展をなし、外國貿易の如き、一億二千萬圓臺より、五億萬圓臺に超越したる今日、尙公債應募力の民間に存在するは火を見るより明らか也。十億二十億の公債募集は、固より困難ならんも、二億三億の應募力あるは、過去六ヶ月間の經驗によりて、證言することを得べし。嗚呼誰れかいふ、日本は經濟上の戰爭に於て、露國に一着を輸せんと。過去十年間經濟界の發展、生產力の充溢、是れ日本が東洋に雄飛する所以、財政上より我國が疲勞し、而して戰局に影響するが如きは、萬々あるべからざる事なり、而かも當局者が財政を料理する腕に到りては、國民の宜しく監督を要する處、吾人も亦此際當局者の遺算なからむことを希望するもの也。

人間の壽命

理學博士　横山又次郎氏

『教育學術界』

近來統計學が開けまして、人の平均壽命を計算することが始まりましたが、此の數は三十五年乃至四十年と云ふことであります、然し是は生れて直に死するものも勘定しての數でありますので、若し二十年以上即ち丁年となりたるもののみに就て計算して見ますれば、夫より四十一年の後、半數は死てしまうと申します、即ち例へば年齡二十年の者百名ありとしますれば、六十一年に達するものは僅に五十名ばかりしかないと云ふ譯であります、夫ですから大人は先平均六十年の齡を保つものと見て大差なからうかと思はれます。

俗に長命の者は貧者に多いと云ひますが、是は實際談の樣でありますす貧者は食物の點に於ては富者ほど充分の物を取る譯には行きませぬが、其の代りに屢家居の外に出て、清き空氣を吸ふたり、身體の運動をしたりすることが多いと云ふ利益があります、富者は之に反して佚樂に耽り室內に閉ぢ籠り、不良空氣を吸ひ、運動不足に陷る不利益があります。

世の中に、人間の壽命は之を延ばすことが出來るかと云ふ問題もあります、是は醫家の說によれば、全く不可能事であると申します、人は天授の壽命を短縮せざるよふ力むることは出來るが、之を長くすることは出來ぬと云ふのであります壽命を縮めないよふにするのは如何なる事をすればよいかと申すと、先飲食を愼み、次ぎに適宜の運動をなし、及ぶべきだけ屋外野外に出て、清淨なる空氣を呼吸することであるのです、尙又長命の條件は、生れつき壯健な體格で、外界の狀態に最も適する者でなければならぬ、最初から身體虛弱の者は、如何に攝生に注意するも長命覺束ないと申します。

評論



義務と名譽と

天溪生

早稻田大學講師浮田和民氏が、東京市敎育會（九月十八日）の席上にて、軍人たるものは、義務のために戰ふべし、名譽のために戰ふべからず、名譽の爲に自殺するが如きは、これ勇なき者と謂はざるべからずとの意味の演說を爲せるや、諸所に反對非難の聲起つて論壇の寂莫を破りぬ。

『日本』新聞の如きは、極めて無禮なる筆法を以つて氏の意見を紹介せり。『萬朝報』記者は、浮田氏の說は全く誤謬なりと明言して、「義務を義務と感じて」戰ふは、決して賞すべきものに非ず、義務と人格とを融和するに於いて、始て軍人の資格備はりとの意を述べたり。

玆に極力、浮田氏の說を非難せる者あり。日淸戰役に於いて武名を謳かしたる佐藤少將即ち其の人にして、『日本』紙上に掲げられたる談論の要領左の如し。

戰爭に缺くべからざる者は、人員、材料、學術等の物質的又は技術的條件なりと雖も、是れ等のみは、以つて勝利の原因となすに足らず。勝利は個々軍人の精神的要素、即ち士氣に因つて生ず。士氣だに旺盛ならば敗衂を招くとなし。その士氣の旺盛なるは名譽の觀念を以つて戰ふが故なり。我が軍人は名譽の觀念を以つて戰ひ、露人は義務の觀念を以つて戰ふが故に、勝負の差、斯くの如くに大なり。

佐藤少將更に語を續けて曰はく、

『浮田氏は曰く、名譽の爲に戰ふな義務の爲に戰へと、我輩は言はむとす名譽の爲に戰へ義務の爲に戰ふなと、成る程軍人戰場に屍を晒らすは、國家に對する義務に相違ない、然も軍人の戰場に敵と相馳驅するに及んで念頭常に斯くの如き義務の觀念を存在せしむるを得るか（中略）苟しくも大和男子の熱血を有するものならば、此の時に當つて意氣天を衝き、あはれ此大敵を破つて祖國の譽れを全うし。一死以つて祖先の名に殉はむ哉の慨ある外、念頭又何物をも容れぬのである、義務であるか、權利であるか、陣頭の軍人は腦裡腐儒の閑問題を容るゝの餘地がない』

激烈なる語調は、轉じて、歐洲軍隊に大勇猛心の缺乏



詞藻

茸狩

繞石選

空瓢茸を獲て酒思ふなり　初聲
朝山の露匂ふなり茸狩　同
茸狩や柿の山畑見てすぐる　同
茸狩りて戻るや月の加茂堤　同
茸狩の歸るさ栗も拾ひけり　同
赤土や松茸山の上り口　蘆村
村暮れて茸狩る衆の歸る聲　同
茸狩るや松の雫の朝寒く　五遷
茸狩やつんぼ爺の上手なる　同
くらべ合ふ我が籠輕き茸かな　白里
見て出づる天氣豫報や茸狩　同
茸狩るや折々海の見ゆる山　句仁王
溫泉の宿の裏や茸狩る人の聲　同
茸狩やわざをぎが子の女づれ　五湖
秋晴や師の坊訪ふて茸狩　同
狩り獲たる菌を分けぬ松葉籤　鳴子
茸狩や目籠はみ出し茸の莖　同
茸狩の鳥など威し通りけり　青龍
茸狩松に小鳥の日和かな　同
茸狩の連に離れて仕舞ひけり　同
茸狩の茸色々や籠の中　同
茸狩の腹をへらして戻りけり　同

選者吟

茸狩や揃ひの草履紐あかき
茸狩林間に酒暖めぬ
茸狩狐の穴の恐ろしき

拾二月分課題　蒲團　十一月十八日限
一月分課題　新年雜詠　十二月十八日限

應募俳句は東京市本郷區駒込曙町十一番地大谷正信宛に發送せられたし

歌

○　尾上柴舟選

若山牧水

水の富士草の富士さて畑の富士あづまは秋のうつくしき國

花うりよ柳めぐらば歌うたへしら萩召さう人おはすべし

富士遠く武藏のあさの秋晴れぬ蕎麥蒔く日なりいで孫も來よ

待てしばし野の鐘撞くな秋しろう霧にまかれて夢ゆめぬ里

この村のよき子おきみがもらはれて市にゆく日を野は霧のふる

秋たかう鳴るやあさ潮あさあらししらしら〳〵しらむ島のゆめかな

巖うたばこぼれいづべし神の國日向の秋の山の詩きかむ

やさしくばすねけり人のつれなくば恨める秋のこの子いかにせむ

葉がくれにさびしき秋の色みせてちさき驕りの草紅葉かな

ながき夜や小草のくにの草姫の蟲をつとべて戀の譜つくる

興そゞろ入江とまりの舟出て藪のつき夜を笛の竹伐る

○　坂田夕星

秋姫が霧の御衣の地にふれてうすむらさきに咲きにし野菊

さびしみの靈さそひ來て野のやみを陰府（よみ）さながらの風てよぎよる

名なし花そと摘みとりてさゝやきてなほ野の秋にうれひある君

○　廣末嘉市

小さき國に相おもひてぞ抱きて八千年かけて戀に泣かむ身

水ながら椰子の木おほき南國に羅馬の人とあひわかれぬる

○　高林柳子

業成らでかへる故山の秋の日やまどの葡萄はいまなほ甘き

芋の葉に眞珠たゝふる畑の富いざ酒くみてつきにほこらむ

平和(たひらぎ)の神のみむねのみすまるの眞玉いさゝか君に似たりし

それよ名殘うす日さむけき坂の上に我かへりみて笑みましゝ君

○　　飯田高子

わが學びさかえかあらず名かあらず君に事へむ女たるため

御肩もむ秋のゆふべのあめの音にふとせし吐息われとおどろく

相逢うて言なきしばしなにをつるしづく音ありくれ秋のまど

今年ことに秋のうさしる人妻とよばれていまだ三月ならぬを

○　　久保田桂湖

君が御ゆめ招ぜむよひの北斗星あさ雲めぐり殿づくりする

大地のむねのあつきおもひの溫泉(いでゆ)もてなさけに冷ゆる人いやしませ

○　　佐久間霧江

生れいでて涙に經べく人の子に運命(さだめ)つけたる魔を神といふ

詩の靈を筆にのせむの夜は更けて默思のまどに秋の雨ふる

○　　東　薫

今朝のまだき産聲たかき男の子得つと艦(ふね)なる君に文まゐらする

うとまれていつをたのまむ別れぞと見かへりがちの暮秋の野や

○　　前田夕暮

ともすればもだえ心地ぞたへがたきなど夕暮とわが名つみゝむ

失ひぬ悔いぬもだえぬ病みぬ瘠せぬはては咀の子とわ

れなりぬ

昔しのぶ秋草堂のよるのあめとすれば人のうらまるゝかな

默想のみ胸に湧くよあきの興李白の才を師のきみに見る

そもこれを罪とは云ふか二人よりて笑みしばかりを罪とは云ふか

小羊の露ふみてよる詩(うた)の戸や曉(あけ)の殘んの月ほのじろう

星姫の聖歌にふくる夜の宮あきの皇子のいまおとづるゝ

○　塚田柳江

摘みにしはたゝ野に咲ける小さき花されど名もなき小草といはし

○　工藤一二

唐黍のやれ葉さやぐや痩馬のいなゝきさむき霧のやま畑

花草によべのゆめおふ鈴虫が霧ふる朝をなくねちひさき

○歌募集

別に課題を置かず　寄稿者の意に隨ふ　十一月十八日限

姉と弟

十三絃

星は光りを失ひて、　空うす黒き秋の夜を、
斜めに射りし街頭の、　燈火に影を流しつつ、
二人はそぞろいでゆきぬ。

秋をはらふ金風の、　肌に涼しく覺ゆとも、
かたみに通ふ胸の血の、　戀とはならで美しき、
神が定めし同胞と。

語らう言のきれぐは、　風にまぎれて消ゆるとも、
神よ、彼等にみなぎらう、　そのあたゝかき情をば、
永久に互に保たしめよ。

人都塵を吹き上げて、　人の血潮は濁りたり。
空氣とまじれる毒焔の、　うちを二人は横ぎりて、
尙ほ清透の息を吐き。

聖旨は滿つる神園の、　靈氣に生くる神の子の
それにも似たる同胞の、　あゝ美はしき影なれば、
燈火更に輝くか。

町の角屋の曲り道、　影は分れて又よりぬ。
直なる道に、新しき。　影は一つにかへりつつ、
更にゆかしく進みゆく。

調もよく想も中々よけれども、字句の洗錬を欠き、從つて何等の妙味なき、且つ意味の連絡なきところあるは惜むべし、

せる所以は、義務の觀念を以つて戰へと敎ふるが故にして、帝國軍人は、名譽の觀念を以つて奮鬪せよと敎育せらるが故なりと斷言し、更に浮田氏は露探の一人に非ずやと疑はるとまで公言せり。

論旨の正邪當否は兎も角も、人を指して露探呼はりすとは、暴も亦甚しからずや。たとひ戰場に相敵視すとも、正當の理由なくして敵を罵詈するは、雜兵共のなす所、苟しくも一方に將たる者の、斷じて爲すべからざる所なり。吾人窃に佐藤少將の爲に惜む。

吾人は直接に浮田氏の演說を聞きたる者にあらずと雖も、世間に紹介せられたる所を基として考ふれば、佐藤少將は、浮田氏の所說を全然誤解したるものなり。思ふに、佐藤少將も亦新聞紙上にて浮田氏の意見を讀みたるものみならむ。その紹介こそ實に簡單にして、而も某紙の如きは、殊更に曖昧不明に記載したれば、遂に佐藤少將をして此の反對說を述べしめたるものならむ。

問題は複雜なり。浮田氏が(一)軍人の本來の覺悟は如何なるべき乎の點を論じたるに對して佐藤少將は(二)現在戰場に臨める軍人の心裡狀態を思考中に置きて、如上の反對說を唱へたるなり。

戰場に於ける軍人の心狀態は如何。こは學理一偏にては說明し盡し難かるべし。されど一言以つて盡せば狂熱的なり。佐藤少將自身が言ひける如く、眼中、義務なく、權利なかるべく、而して亦名譽もなかるべく唯勝たむと思ふ一念は、他の雜念諸想を壓迫すべし、戰場に臨める軍隊にして、義務、名利等を思考するあらば、其の軍隊は必ずや擊破せらるべし。去れど斯くの如き場合に於ける軍人の覺悟は、浮田氏の捕へたる問題にはあらざるなり。氏が目的は、軍人本來の覺悟は、如何なるべき乎を究むるに在り。佐藤少將をはじめ、浮田氏の所說に反對する諸氏は、先づ此の點を、明白に識別するを要す。

軍人本來の覺悟は如何なるべきか。浮田氏曰はく、名譽にあらずして、義務を念頭に置くべしと。佐藤少將曰はく、名譽の觀念を以つて戰ふべく、義務の觀念を以つて戰ふ勿れと。孰れか是なるか。

茲に『義務』及び『名譽』の二語使用せられたり。而して此れ等の語義を明瞭になすにあらずんば、此の問題は、容易に解釋せられざるべし。先づ『義務』なる語より始めむに、是れには二樣の解釋あり。

(一)道德上は倫理學上の所謂義務。

（二）世俗の所謂義務。

茲には前者を名付けて道德的義務と言ひ、後者を世俗的或は法律的義務と稱すべし。更に後者を指して、條件的義務と言はゞ、前者は無條件的なり、超誓約的なり。尙ほ別言すれば、權利と相對的なる義務は、後者に屬して、それ以上に超越したる義務の念は前者に入る。

吾人には、高下を問はず、何等かの理想ありて存す。その理想に對して責任を有すると共に、「しかるべき筈」といふ感念は、必ずや吾が胸底にあり。理想は何にても宜し。神にても可なり、帝王にても可なり、博愛にても可なり、人道にても可なり。兎にも角にも一の理想あれば、其の爲に盡すべき筈といふ觀念は、恒に吾人の胸臆に存在す。これ予の所謂第一義の義務の觀念なり。此の義務の念を有する者の活動行爲は、能動的なり。即ち自發的にして、毫も他よりの刺激に由れるものにあらざるなり。例へば仇討の助太刀をなす場合ありとせむに、自身とは何等の關係もなき人を助けて、其の本望を遂げしむるは、正義孝道の發揮を、一の責任なり、義務なりと感ずるが故に外ならず（勿論仇討を以つて、道德上善行なりと假定す）又主君の馬前にて討死するも、これ忠なる理想を發現すべしとの義務の觀念に基けるものなり。古今東西の忠臣義士愛國者の行爲は、所動的にあらずして能動的なり。乃ち義務本體のために、生じたるものなり。

これと異りて、或る條件の下に成立する義務あり。例へば一物を購ひて、其の代價を支拂ふが如き、借金を返すが如き、引き越し蕎麥を配るが如き、これなり乃ち習慣的なり、法律的なり、有條件的なり。行爲は所動的なり。

條件的義務の觀念を持して戰場に望むは、吾人の採らざる所なり。されば軍人としては、第一義に於ける義務の觀念を懷きて奮鬪するこそ、究竟の目的にあらずや。吾れ等日本人には、一天萬乘の君といふ理想あり、國家といふ理想あり。從つて其の理想を發揮すべしとの義務の觀念は、個々人の胸中に存在して、子孫後裔に遺傳されむとす。佐藤少將が、「祖國の譽を全うし云々」と言はれたるは、即ち此の義務の觀念を說明したるものに非ずや。浮田氏は、抽象的に義務と云ひ、佐藤氏は、其の義務の內容を說明したるの差あるの外には、兩氏の間に何等の衝突をも、認むると能はざるなり。

佐藤少將は『名譽』なる語をも、全く誤解せられたるが如し。浮田氏の所謂名譽とは、一個人の名利のことなり、主觀的に言へば功名心のことなり。功名心のために劒を握るほど卑しきはなく、名利のために銃を執るほど劣等なるは莫し。自身一人の名利名聞を欲して戰場に赴く者あらむか、彼れは個人主義の實行者にして、 聖上陛下と國家との爲に戰ふ者にあらず。願ふ所は、たゞ個人の名利に外ならず。斯くの如き人物は唯自己の功名心だに滿足するを得ば、他は如何なる狀態に轉ずるも、敢て顧ざるものなり。佐藤少將とても斯くの如きは、絕對的に擯排せらるゝ所ならむ

佐藤少將の所謂『名譽』とは、國家の名譽のことなり、こは氏が說の前後を熟讀する迄もなく、明瞭なり。さて氏は、名譽のために戰へと主張せり。その『ため』といふ觀念の下に、直に義務の感生ずるに非ずや。祖國の名譽を守護し、これを宇內に發揚するが、國民の義務なりと信ずればこそ、始て『名譽のため』なる語を得るなれ。

『名譽のため』といふ程、誤解を生じ易きはなし。何となれば、名譽なる語は、個人の功名手柄と解し易きが故なり。名譽とは、或る行爲の結果に伴ふ者にして行爲の目的にはあらざるなり。これ見易き道理にして今更喋々を要せざるべし。然れども世人動もすれば、名譽を目的として、行爲を手段となすの傾あり。戰場にありて、死すべき理由もなきに自殺するが如き、或は拔けがけの功名を現さむとするが如き、皆な此の誤想より生じたる行爲に外ならず。佐藤少將とても、かかる利己主義は、斷々乎として排斥せらるべし。而して浮田氏が『名譽のために戰ふ勿れ』と論じたるは、此の誤謬に陷らざらむことを誡められたるものに外ならず。

それ武士道なるものは、武士といふ理想に對する義務の觀念なり。この義務を全うしてこそ名譽あり。而して其の武士道を遵奉するもの多きに從つて、輙ち武士道の譽生ず。是に於いか、武士道の名譽なるもの成立す。

然るに其の弊として、個人の名利を主として、義務を後にする傾向生じて、餘毒今日に及ぶものあり。思へば、浮田氏の說は、時弊に當れるものならずや。佐藤少將とても、此の點に關しては、何等の異見もなかるべしと信ず

外人優待法

和軒生

外人を優待するの法は、必ずしも外國の貴賓を濱の離宮に招待するのみにあらず、而して優待すべきは、獨り外人の貴族のみにはあらず。吾人は帝國政府が、しば／＼帝國の名譽領事、若くは官邊に關係ある人士に位階勳章年金を與へて、之れを優待せるを見る。而も隱れたる學者の、大なる勳功を蔑視せるを惜む。彼のアストン、サトウグリッフスの諸氏は、チエムバーレン、フローレンツの諸氏と名を等うするの士なり。チエムバーレン、フローレンツにして文學博士たらば、吾人はアストン、サトウ、グリッフスの諸氏も亦博士の價値あるべきを信ず。見よやL. L. D. の學位は外交的に藤公の如きにすら與へらるゝにあらずや。我が博士號はL. Z. L. とは異れども、なほ國交の親密を計らんが爲めに、アストン、サトウ、グリッフス等の諸氏に文學博士の學位を與ふるも亦可ならずや。況んや其の人の學殖決して博士の價値を辱かしめざるをや。吾人は文學博士と云ふ天狗連中にも、確かに二三の具眼者あるを思ふなり、更に思ふ生前ハーン氏を逆待せる我が政府は、死後此れを優遇するも亦外人優待の一法なるを西紙は傳へていふ、頃日スチブンソン紀念の銅像は、英の美術大家ガンチウスの圖案になり、之れをエヂンバラなる處女堂に建て、近頃除幕式を擧行せりと。知名の士皆來會す、ローズベリー侯之れを評すらく、「天才の士によりて、天才の士を紀念する者」と。吾人は英國のハーンたるスチブンソンの、かくも優待せらゝを聞いて、我が國のスチブンソンたるハーン氏をも、亦此の如く不朽に紀念せんことを希ふものなり。此れ豈に外人優待の本義にして、帝國の一視同仁、人種的僻見なきを實證する便法にあらずや。吾人は世の論客の、此の點に留意せんことを希ふ者也。

文藝時觀

寫實と表象

高山血來

○昨夜姉崎嘲風の『復活の曙光』を讀み、その「藝術と神秘」といへる章にいたり、獨り點頭して自ら微笑

むを禁じ得ざりしものあり、特に其寫眞と表象とを論ぜるあたり、先づ吾人の言はんと欲するところを盡し更に尙ほ吾人の知見を高めしもの、甚だ少からざりしを覺ゆ

○其寫實主義と表象主義とは、重に繪畫に就いて論ぜられしも、吾人はこれに依つて現代小說の二大潮流に想到せり、彼は徹頭徹尾寫實を痛罵して、到底そが藝術としての價値なきをいへり、而も亦「寫眞の具象的描寫が、よく看者をして書中の人物と呼吸相應ぜしめ、神相通ぜしむる」を疑はざりき

○然り吾人は此點に於て明治寫實派の棟梁故紅葉山人を想起す、彼が四邊の情況を描寫するの巧妙なるや、其人物は活きて動けり、顏貌、衣服、擧止、言語の寫實は、多く心的狀態を描かずして、よく其人物と呼吸相應ぜしむるものあり、彼の小說は悉く現世の寫眞なり、天然の模倣なり、一點不自然のものを交へざる也彼の眼に映ずる社會は、鏡に映ぜる社會なり、其裏面に含まるゝ精神に至つては彼の筆を染むるところにあらず、而も吾人が彼の小說を讀んでよく其精神と相往來し得るものは、彼が寫眞の巧妙なるが爲めなり、嘲風曰く、眞の寫實は即ち眞の表象なりと、吾人は初めて之を紅葉に於て見るを得べし

○然れども眞の寫實なるもの、現代只紅葉の小說あるのみ、寫實主義の缺點は他の寫實家によつて限りなく暴露さるゝことを見る、高山樗牛曾て衣服容貌の細を描くことの却つて人に印象を與ふる能はざるを論じたる事あり、（其の頃の太陽を探し當て得ざる爲め、今其詳細を知り得ざるを憾みとす）其論の餘りに極端なりし爲め、反對の聲は四邊に起りしかど、而も樗牛の意、蓋し現代の所謂寫實派なるものが、餘りに寫眞の末枝に走せ、只管人物の動作、衣服容貌等を寫すを以つて能事終れりとなし、事件の進行に焦せる讀者をして、道具目錄の煩に堪へざらしむる不調和を痛罵するにありしならん

○樗牛が論調の極端なる、全然かくの如き無用の小道具を要せずと叫びたるは、其多く反對を出すに至りたりと雖も、此の弊はたしかに寫實主義の辭むを得ざる處なりとす、紅葉の小說に於ても吾人をして此感を起さしむるものまたなきにあらず、特に或る感情を傳ふる爲めの表象としてにあらずして、單に寫眞の爲めの寫實なるものに至つては、吾人は嘲風と齊しく之を小說といふ能はず、而して是れ亦紅葉の或部分に於て

認め得らるゝ處なり、他の作家は論ずるまでもなし

○紅葉を以つて寫實派とせば、露伴は表象作家の泰斗なるべし、吾人は彼が『新浦島』を讀みて、我が精神の所謂「時處を超越せる實在の世界と交通」するを覺えたりき、更らに『五重塔』を繙いては、のつそり十兵衞と神相通ずるものあるを覺えたりき、露伴の『新浦島』は決して現世的にはあらざりき、吾人の見得べき世界にはあらざりき、露伴は十兵衞の言語を鸚鵡返し的には寫さゞりき、其愚なるが如き容貌、しだらなき風采を描寫するに一頁の紙を費さゞりき、而も吾人が與へられたる深くして明瞭なる印象は、いまだ忘るゝ能はざるなり

○但し新浦島が現世的にあらざるが故によしといふに非ず、科學哲學の說明し能はざる或る神秘の精神が其完全なる表象に依つて吾人に傳へらるゝを以つてなり、五重塔の十兵衞は此の世の人也、而も寫眞機を携へて十兵衞の一擧一動を撮りたるにはあらず、吾人は戀人の寫眞を眺むる如くならず、直ちに十兵衞といへる偉人と相語り得る也

○寫實と表象、作者は其何れよりするも、歸する處は即ち一也、眞の寫實が眞の表象なると共に、眞の表象即ち又眞の寫實なりとは嘲風も之をいへり、然れども寫實的小說よりも表象的小說の比較的批難少きは、思ふに寫實といへば彼の所謂道具の羅列に凝り、寫眞の爲めに寫實するてふ弊に傾き易く、而も尙ほ小說の體を失はざるに反し、表象主義にあつては全く表象のみを示すこと不可能にして、よしんば可能なりとするも、そは全く小說を成さゞるを以つて、其弊少なきによるか、即ち表象主義が具象的描寫を須ひずして、單獨の行動に出で易からざるが爲め乎、抑もまた修養なき作家には表象主義の小說に筆を染むる事が困難なる爲め、從つて駄作の少きによるか。或は後者が眞理なるやも知るべからず　（十月十五日朝稿）

最近の文壇

孤村子

例の通り去月の文壇は何等の傑作顯はれずに過ぎて了つた、一體作家は此頃奈何して居るのであらう。遼東の野に戰つて居る我軍の連勝と比較して寧ろ眠つて居ると云ふのが至當だらう。先づ雜誌面に顯れた諸家

の作品から批評して行かう。

○兎に角一番目に附いたものは鏡花の深沙大王てある。讀み去つて頭腦に何が殘つたらう。事實を白狀すると何も殘らない、其の主人公と見るのは何も云はずに病氣て寢て居て、自分の戀女から緋の長襦袢を着せて貰ふ果報者だ。女と云ふのは以前は藝者で今は圍者だ。其の以前は村娘だ。只男と戀して其れが添遂げられずに藝者になつて、然して貢いで居たと云ふ歷史を持て居る豪い女なんだ。只之丈けだ。其れが繼母に苛められて戀男の仇敵の男の圍者になつて苦しんで居ると云ふ筋だ。繰回して云ふ只之丈けだ。深沙大王の境内にお化の行列があつて此の豪い女を圍者にして居る男の非道を責めやうと決議する場所がある。之はお伽話てある。作者は藤澤淺二郎に興行さす心算で書いたと云ふ事だ。今の壯士役者に演じさすのは適應ものでいゝとして、私は此作を讀んだ後鏡花の想像力の奥が見え透いた樣な氣がした。紅足の蟹が顯はれて不思議を見せる事も一度や二度ならばいゝが、恁う度々見せ附けられては厭が來る。然して鏡花の作中の人物にはもう了然と模型が出來て了つた。然し其の會話のきびきびして話て光景を變化さして行く手腕は文壇隨一だ。之が鏡花の生命だ。恁う云ふと私は此の作を譽めたかくさしたのか解らないが、深沙大王は鏡花作品中の下作だ。畫で云つて見れば老練した畫工が新な研究や創作力を費さずして只繪の具をなすり附けた樣な作品だ。

○天外の相像人は次に評す可き作品であらう。萬朝報の評者が之が果して寫實と云ふものであらうかと繰回し云つて其の野卑な會話を書連ねたが私も同感てある。自然と然う云ふ會話になつて來るのなら兎も角も天外のには敢て書くと云ふ態が見える。又其の者の性格を顯はす爲めにそんな會話を使ふなら爲方がないが、今迄天外の作品中に顯はれた恁うした會話は一二の場合を除く外概して低い讀者の好奇心を促す樣に見える。猥りに讀者の肉感を挑發する樣な言葉を使ふて讀者を集め樣とする事は、何處の國の文藝史にも罪として記されてある事が解せらたならば少し氣を注けて貰ひたい。此の作品中で性格の明瞭に顯はれて居るのは水車屋の主婦のお此のみで、肝要の主人公の性格は彼れの爲した行爲は解つて居ると云ふのみて今一つ突込て書いてないので明瞭を欠いて居る。近來自然派に屬する歐洲の作家が世態はしかく結果が明瞭に附くも

のでないと、書出しやら半ばやら解らないものを書く事が流行するが人氣取りの天外は早速之を試みて居る。美事盲目評家を動かして當るであらうか、其れよりも作家と云ふ者は其れ程人氣が大切であらうか、世俗の人氣から云へば天外よりも弦齋居士、浪六先生と云ふ人が控えて居る。

◎同雜誌にツルゲネーフの狩獵日記の一つのくさ場が譯されて居る。譯文は譯者自身が云ふ如く餘り上手とは云へない。然し原文に忠實であると云ふ事は能く見えて居る。此のくさ場は今度で二度ばかり譯されて居るのであるが、其れは英譯からであつたらしい。今此の昇と云ふ人の譯を見ると、英譯と原露文との相違が能く解る。此の譯品を讀んで思出さるゝのは一葉女史の『たけくらべ』で、兩方とも小兒を描いて其の性格が竹を割つた樣にきつぱり見えて居る。奈何して斯うも甘いものであらうと思はれて。日本の今の作者を嘲笑せずには居られない。露西亞の廣濶な自然の景色。そして小兒の無邪氣な物語りの中に土地に行はれて居る迷信や風習が能く解る。勿論ツルゲネーフの傑作であるから、直ちに以つて幼稚な日本の文壇にあてはめて比較するのは無理かも知れないが、其處等に居る多くの作者は學ぶがいゝ。

◎文藝界は草村北星が止してから神谷鶴伴が遣つて居るさうだが、不相變一向に振はない。卷頭から卷末まで、寄席藝人の前座が能く云ふ、はい日の本は岩戶神樂の初めより女ならでは夜の明けぬ國と申しましてと云ふ傾向を遺憾なく顯はして居る。何とか改良の工夫は無いだらうか。文學士佐々醒雪君の古典的の立場は別として文壇に新小説の把持して居る特色、文藝倶樂部の持して居る立場の外、もう他に立場は無いであらうか。俗に媚びねば賣れないとしても之は又餘りに極端だ。鶴伴老大先生の三顧を願ふと云つて置かう。

◎新體詩界も一向に振はない、藤村、有明、泣菫、鐵幹君は奈何したのであらう。此の頃些と驚かしたのは明星に顯はれた晶子女史の新體詩だ。

『堺の街に舊家を懷ふ』とやつて其れから自分の弟が旅順の戰役に從事し居るのに死ぬなと云つてある。家には若い妻があるぢやないか母かあるぢやないかと唱つてある。其れのみか若し國權黨でも見たら國に對して不忠、不敬な奴、斬捨て了へと云ふ言葉が臆面もなく併べてある。私は嫌な氣がした。只斯う云つて置かう。詩と云ふものは斯う云ふものだらうか、戰爭は不

害なものとしても、 現在滿洲に起つて居る戰爭は演劇で無いのだ。

○誰も注意を拂はぬらしいが白百合雜誌に連續して掲載されて居る前田林外の夏花少女と題する詩には格調にも想にも面白い處が見らるゝ。全體を通じて顯はれて居るのは歐化された印度思想とも云ふ可きもので、文字の上にも苦心の痕が見えて居る。拾貳號に顯はれて居るのは魔障と妖女とで、兩方とも幻影を唱ふたものである。私は此の新體詩家に前途があるのを認める。

○同雜誌で脚本を募集したが一體に失敗に終つたらしい、此の號には吾人が其の名を聞くとあまりいゝ心地のせない懸賞作家海賀變哲と云ふ人のが掲載せられて居る、主題はいゝとしても別に何等の特殊の點も無く清新な處もない。此の人が懸賞小說當撰のこつを覺えて居る書振りは此處にも顯はれて居る。一種の眼目はあるが、只人物を並列した丈けに過ぎない。定めし桐一葉や牧の方を能く讀んだものであらう。懸賞金は折角お書きになつたものだから差上げるとして舞臺に懸けるのは願下げにして貰いたいものだ。

○劇と云へば本鄕座で新俳優の演つた題目は莫伽に恐ろしいフランチエスカの悲劇だ。醜婦が白粉と衣裝で人を驚かさうと謀んだと云つた樣な形ちがある。後の書割と仰々しい名前さ。初めからこんな事だとは思つて居たが、之は又餘りに酷い。劇の頂上とも云ひつ可き鞠下家の主人公が刀を拔いて女主人公に凄く見せ。

『之は獨逸で拾六人の血潮を塗つた……。』

と云ふ原本の名高い名文句の邊りはいくら飜案とは云ひながら何たる事だ。いくら登場俳優が熱情を籠め樣としても此文句では駄目だらうのに、俳優が熱情を顯はす技術に乏しいから、から爲方がない。隨分褒める人もある樣だがそんな人に云ひたいのは息せきと走つて來た時にものを云ふのは決して熱した感情を表はす仕草ぢやない。其れから此の場でフランチエスカに扮して居る河合の態度だ。日本の舞臺で仕方が無いとは云ひながら片一方が椅子に靠り懸つて居るのに、此方は敷物の上にぺたりと座つて泣き伏すなどいゝ形ぢや無い。其の次は鞠下讓二がフランチエスカをおひやらかして、

『ヘツ。ヘツ、、。』云ふ處はまるで長家裏の喧嘩見た樣だ、少しも劇主人公丈けの威厳が保てゝ居なかつた。

柏軒と華山（其四）

美中天

終りに臨み、兩者が文章の書き振りをいはん

柏軒が文章を作るに苦心せざる、殆に朝飯前の茶漬を食ふが如き也、人と談笑しつゝ原稿紙に向ふも、彼が眼は筆と原稿とに注がずして他人の顏に注ぎ、且つ話し且つ書く、恰も盲者の書くが如し、而も其文字は悉く原稿紙の劃に飫まりて違はず、人見て以つて印刷機械の如しといふ、驚くべからずや

之に反し華山の文章を練ること、詩を作るが如くす、インスピレーションの起らざるときは、彼は決して筆を取らざる也、而も一度び筆をとれば一瀉千里の勢あり、此は彼の文章を讀みても感ずべき事なり、此點よりするも彼は純粹なる文士たるに適す、彼れまた頗る青年を愛す、而して性甚だ磊落なり

予は最早餘白なきを以つて、こゝに筆を措くべし、敢て柏軒と華山とを月旦し盡したりといはず、たゞ餘白を埋めたるに過ぎず、粗笨の文、不當の評、深く兩氏に謝せざる可らず（終）

黄菊白菊

六號子

▲此頃死んだ露國のチエホフは Tolstoy's litraly son と云はれた人で杜翁以外一流の文士であつた。彼は薄命の詩人、醇乎たる藝術家、温順な冥想的な眞摯な而もデリケートな文士で高大な理想家と思はれてゐた彼とヴエレスチヤギンの死とは露國の大損耗。

▲ハーン氏の狷介な性癖が早稻田に來てから直つて坪内氏をも訪問して中日清談したとがあつたきり其が永別と爲つたハーン氏は頗る早稻田に同情し坪内氏をも信頼してゐて氏より日本の芝居の事を聞くを喜んでゐたさうだ。

▲早稻田からハーン氏の評傳を出すが執筆者は内崎氏との事英文でも書いてもらひたい。

▲明星 で一種皮肉な筆で以て白鳥孤島などの謬評を訂正した山の人は珍妙博士小山内薫其人だと「活動の日本」が素破抜てる蛇の道はへびか。

▲活動の日本 に桂翁と云ふ人が苦情をして一葉女史の原稿料が一枚大抵二十錢か二十五錢依田のが可成高いと言はれたが一枚四十錢の割であつた是を今の小説の大家に較べて見れば殆んど十分の一と云つてゐる

▲新小説 雜報以下興味津々最近號に綱島梁川の病間錄がある靜思の餘錄大に見るべきものがあるが中に孔子が知己を一種の靈知ある天に求めたるを支那三代の因襲的信仰以外道德的自信を以て解し大なる自信は神に之くと云へる、其の修養の深きを示すもの孔子の知己

▲東京座 の「不如歸」舊優としては可なりの出來其れも芝翫以外はゼロ舊俳はやつぱり桐一葉の如き者を演ずるがよい、無理に寫實がるには及ばない、芝翫にシルレル、失敗せればよいが

▲藤澤古雪 のシルレル全集第一卷には「テル」群盜とを載せ口繪も出來のを用ゐるとの事

▲市野虎溪 「死の硏究」を出さんとて近來盛に研究しつゝあり

▲梅澤和軒 亡友三宅旭水の遺稿を編纂しつゝあり大學側にては小山内桑田守屋の諸氏青山側の川合氏を始め枕流花外天溪春風無骨其他の寄書ありと



凡人生活

劍菱生

封建時代には名を竹帛に垂るべしとか、人は一代名は末代とかいひて、名譽を以て人間生存の目的としたり其の遺風今日に至つて尚日本の重なる部分の理想となり、教育も常に少年の名譽心を刺激する傾向あり、名譽を以て人を煽動し、天下又其の煽動に應ずる者を稱贊すること多し。名譽とはかくもあらゆる者を犧牲に供するの價値ありや。

此頃浮田和民先生「名譽と義務」とについて演説し、國民は宜しく義務の爲に戰ふべし、名譽をのみ顧慮して、貴重なる一命を徒らに棄つる勿れといひしとて、諸所に異論湧出し、佐藤少將を始め例の日本新聞などは口を極めて惡言を放ち、其の他の新聞雜誌も多くは少將の味方をして、浮田先生に加擔する者は尠きやう也。これによても西洋にては殆んど神聖視さるゝ義務の念も、今日の日本にては名譽よりも遙かに劣ることを知るに足る。

其程に尊とき名譽とは如何なる者ぞ、といふに、人に褒めらるゝこと也、新聞か雜誌に活字にて印刷さるゝこと也、更に進んでは木か銅にて自己の肖像を彫刻されて曝物になること也。只これのみ、而して吾人はこの爲に再來の期なきこの貴重の一命を犧牲とすべきか。常に標準を誤まる他人の毀譽褒貶によりて自己の行動を左右すべき者なるか。吾人は如何にしてもこれを是定する所以を解する能はざる也。よし褒貶其の當を得たればとて、これによりて自己を動かすは愚なる次第なるに、多くは不公平なるを免かれざれば尚更也現に佐藤氏が浮田先生に對する非難の如き、極めて當を失し、先生を平々凡々の學者也とか、愚者也とか、甚しきに至つては國賊呼ばりをしかねまじき論鋒に接して、これを先生の學識人格に當嵌めて正否を判ずるに、あまりに過れること甚しきには、寧ろ笑殺して可なるを覺ゆ。この一實例によりても、吾人は名譽の價値の淺薄なるを知るに餘ある也。吾人は佐藤少將又は日本新聞一流の論者のお褒に預りたさに、一命を拋棄

するの愚を演ずる能はざる也。

元より名譽心も人心に備はる一分子なれば、其の慾望を滿足せしむるも愉快なるは明にて、何人も他人に惡口云るゝよりも、稱賛されたしと思ふべし。されど名譽は慾望の最大なる者にても、最純なる者にてもなければ、これを偏重すべき道理なし。吾人は日本の青年がこの虛榮の犧牲となりて、一生を不幸に終る者多きを憾む也。

聞く亞米利加の學生は、其の理想とする所、早く一家を成して、夫婦睦じく平和に暮すにありと。日本の學生は名譽過重の結果、青雲の志を抱き、大事業を空想し、大著述を企て、或は大臣とか博士とかを理想とし派手に生涯を送らんとする者多し。而して此等の事衆人の悉く遂げ得べきにあらねば、中途徒らに苦悶失望し少時の方針の過まりしを悔ゆれども、時既に遲く如何ともし難き境に陷る也。よし又少年時代の理想に到達し、名聲天下に響き、其の事業の百代の後に傳はればとて、人生の眞意義に叶ふや否や疑はし。總理大臣が幸福なるか、屬官が幸福なるか、大學總裁が幸福なるか、小學敎師が幸福なるか、或は眞に生を樂むもの常に名譽の大小と逆比例するにはあらざるか、家庭の平和、心中の靜穩身體の健全は多く下等社會にありて上流に存せざるにあらずや。吾人は殊更に苦悶して、青春の期を仇に過ごし、青雲を志すの不得策なるを知る。よしや其處に達すればとて、幸福とも思はれず、況んや十中八九は失敗に終るをや。或は男子玉碎恥瓦全といひて、平々凡々の生涯を卑むものあれど、こは名譽心に眩惑せされたる誇大妄想狂の考へにて、人間の本性をも價値をも顧みず、空影を追ふの徒也。

かの歷史上の人物は多く嫌ふべき者にて、吾人の羨むべき者ならず。かゝる破格の人も少しは存在する方が面白けれど、多數の人間は寧ろ其の分に安んじて、平坦の途を辿るに若かず、人としての幸福を味ふは常に所謂平凡なる人々の上に存して、かの名譽慾の爲に精神に異狀を呈したる狂者、即ち世の所謂英雄豪傑の與かる所にあらず。平凡生活なる哉。平凡生活なる哉。學校にありては愉快に勉強し、苦學などゝ馬鹿らしきこともせず、卒業の後は平凡なる婦人と結婚し、分相應の暮らしを立て、借金の苦みもせず、極めて安樂に世間の目には在るか無きかの樣にて世を渡ること、人の人たる一生なれ。ゆめ〳〵虛榮心の奴隸となりて、かゝる幸福を見捨てまじき也

如是我聞

窮岫子

◎東北人多くは辯口苦澁往々にして解し難きとあり、試に『玉散る劍拔きつれて』の軍歌を歌はしめよ、玉ツル、チルギ、ヌキチユレテと發音せざるもの稀也、所謂ズーくなるもの、チンキユなるもの獨り故工藤行幹翁のみならざる也、外交官は寧ろ唇舌快暢なるを尙ぶ、而して東北のズーくにして外交官多きは甚だ奇と謂ふ可し。曰く珍田捨己、林權介、赤羽四郎、佐藤愛麿、高平小五郎の若き則ち之れなり。

◎西鄕菊次郎氏遂に京都市長に當選の榮を荷へり、其の得意想ふ可しと謂へは或は失敬に當るやも知らざれ共、京都市長の年俸四千圓なりといふを聞けば菊次郎君得意ならざらんと欲するも夫れ得んや、其の譯如何と謂ふに菊次郎君は人も知る如く、西鄕南洲先生の遺子なるが、幼時鹿島の英語學校に在て勉强中、自から百俵取りの士人たるを得ば足れりとの抱負なりしに今は大枚四千圓を領するに至ればなり、百俵は四十石にして假りに一石の價二十圓とするも未だ千圓にも足らざる也、故に當時英語學校の同窓は君を百俵々々と呼び居りしとか。

◎第二軍架橋縱列長天野工兵大尉(三郞)が部下に說ける敎訓なるもの禪味を帶びて頗る面白し、以て同大尉の爲人を察すべし曰く、一代の守本尊は飯と汁なり、忠孝節義を重んじ一杯飮で寢たる時は極樂なり、ソコデ左の條項堅く相守る可し

(一)外見を飾らず、內、心を淸くせよ
(二)大食して暮せよ
(三)地獄に行きて鬼に負けるな
(四)念佛は申さずとも、惡事を爲すな、世の中は皆詐りと知れ

◎東京日々は愈々加藤高明氏の手に歸せり、世話の燒速は之が爲に種々の噂さを傳へり、曰く時事新聞は三井の機關となりたれば、岩崎は之と對抗すべく、夫が爲に大金を投じて『日々』を買入れたりと、否、岩崎の家系は新聞紙と關係を結ぶを好まず、加藤高明が岩崎の婿なりと云を以て直ちに金主は岩崎なりと聯想するは白徒の推測に過ぎずと、又或者は曰く、加藤と伊東は近來其の交情甚だ溫か也、新聞紙の授受は其間に大に魂丹ある也と、其の原因の孰れに存するに拘はらず、

政府の機關新聞が一朝忽然として政府反對者の手に移りしは政治界に於る尋常の現象と輕視するは恐なりと眼を政治に注ぐもの斯る瑣事に依て其潮流の赴く處を推知するを要すと云ふものあり。

◎世間には本妻を追出し權妻代りて本妻の位地に立つの例往々にしてあり、新聞紙にも此の醜ありと苦笑するものあり、何の謂ひたるを解せず。

◎江見水蔭は小說家中の豪傑にして文士相撲の大關なり、水蔭性甚だ燒豆腐を嗜む、一年三百六十五日、朝々暮々、膳に上るもの燒豆腐てさへあれば舌を鼓して喜ぶ、而して蜘蛛を嫌ふと最も甚しく、夜中對話中蜘蛛の還來るとあれば水蔭顏色を更へて脫奔す、奇妙なる性癖の人なる哉。

◎獨逸皇族カールアントン殿下、來朝して日光に遊べり、偶々風邪の爲め、咽喉を病み、醫に命じて含嗽藥を劑らしむ、旅中器具備はらず、葡萄酒の空瓶に含嗽藥を入れ置きたり、或る日殿下外に出でゝ在らず、接待員の某々等殿下の不在中に乘じ、彼の葡萄酒の瓶を指し、相謂て曰く、好個の飲料なり、宜しく飲む可しと、一人は曰く、此の葡萄酒は酸味強くして甘からずと、一人大にハイカラを氣取り、且つ曰く、之れ乃ち葡萄酒の上等なる所以なりと悉く飲了せり、殿下外より歸來して含嗽せんとして藥劑の盡きたるを見て不審に禁へず、通譯を解して事情を問へば則ち以上の如し、流石の殿下も其の痴に驚き、捧腹絕倒せりと、含嗽藥を舌を鼓して飲み盡せし某々等の名は終に逸せり。

◎近時巴理に流行する嶄新奇拔の廣告法あり、乃ち五色のペンキを以て彩りたる禿頭者の一行をして種々の旌旗を持たしめ市中を練り行くに在り、之が爲め禿頭の値ひ俄かに騰貴し、往々にして剃髮せる禿頭の僞物を見るに至れりと、世界流行の魁を爲すだけに巴理は巴理だけの事あり。

◎南露西亞の田舍にては日露戰爭の原因は哥薩克騎兵が日本皇帝の子を奪て還さゞる爲め日本は大に憤り遂に干戈を執て露國に戰を挑みしなりとの說專ら行はれ居れりと、露兵は斯る愚蒙の國民の中より徵發されたる者多し、彼等が何が爲に將た誰の爲に戰ひ居るやを知らずと云ふも必ずしも無理ならざる也。

鬼面魔語

醉美生

▲年若き男女をして互に相慕はしめんとせば、餘りに之を近かしむるなかれ、餘りに之を遠ざからしむるなかれ。

▲多くの人に愛せらるゝに慣れたるものは却て己れが愛するに足る程の人を求むる念を生ず、是れ美人が往々美少年などと浮名を流す所以なり。又多くの人を愛するに疲れたるものは却て己れを愛する誠あるものを求むる願を起す、是れ慾情家が屢々醜き妻君などのおのろけをする所以なり。

▲青柳有美氏其昔て卒職せし大館中學卒業生の會合に於て東京義太夫界の泰斗竹本素行を招じ、其得意なる判官切腹の段を語らしむ、所謂道學先生の苦笑する所ならんも、我は有美氏の見解一段俗に高きものあるに服す。

▲碁知らぬものが碁打てる人の許に行ける程困りたることなし、何時迄經つも話もならず、用も辨ぜず。

▲トルストイの小説往々理屈に流るゝ缺點ありと雖、其記事敍述は全く活ける人生其物の表章にして毫も捏造假構の跡なし、人生の相を究めて人生の味を知らんとするもの必ずや其著によりて多大なる益を得べし。

▲交りを絶て後惡聲を放たれず、棺に入て後惡名を受けず、是れ誠の人間なり。

▲大石内藏之助が人の長となりて大事を行ふを得る仁なりしことは忠臣藏十一段目燒香の場を見て最も明かに知ることを得たり、

▲喜怒色にあらはさず、是れ僞善者の心なり、喜怒色にあらはれず、或は常人より大いなる所あらん、されど惡しくいへば、是れ一種の無神經者なり。

▲伊藤銀月氏の文近來甚だ振はず、是れ先生なる稱號を受けて小生時代の兄イ的口調を用ふること難きに至りしが爲めならん忌むべきは先生といふ文字なるかな。

▲プルタス曰く、予はシーザーを愛すること少きにあらず羅馬を愛すること一層切なりと。バイロン曰く、予は人間を愛すること少きにあらず、天然を愛すること一層甚しきなりと。予亦此口調を藉りていはん、露國の兵强からざるにあらず、されど日本兵の强きこと一層之に優れるなりと。

▲戰後の藝術に於て最も振興するものは恐らく演劇ならん、俳優及び劇詩家たるもの今日より覺悟する處あるべきなり。

▲世俗的の男は肉によつて女を自由にせんとし、詩人氣取なる男は情によつて女を擒にせんとす。されど其孰れが罪深きかに至つては神たゞ之を知るのみ。

▲戀の眞味は相手が心ありとも、心なしともわからざる時にあれども、戀する御當人は此時を以て最も苦しき時と思ふものぞ。

▲善をなしたる時は益々進んで善をなさんとし、惡をなしたる時は最も惡のなすべからざることを感ず、人間は終に倫理的動物なるよ。

▲人間が避け得べき害惡をも自然に放任するは極めて惡し、されど人間の避け得べからざる行爲を害惡なりと責むるものは徒らに人間の不幸を增さんとする大不了見者なり。

▲高山博士逝てより評論壇上常に寂寞單調を極む、博士を以て單なる問題提供者なりと嘲りし人々よ、爾等は世を動かすべき問題をすら出し能はざるにあらずや。

▲白色なる西洋人は髮の赤きを尊び、黄色なる東洋人は髮の黑きを美なりとす、是れ恐らく色の配合より來るものならんか。

▲大智あるものゝ一見愚なるが如く見ゆるは七色の配合せられて白色と見ゆるが如し。

▲社會にいろ〱の理屈を捏れつけること殆んど全く男子の手中にありといふも可なり、かるが故に議論の對照には常に婦人の引き出さるゝも亦た怪しむに足らず、見よ彼のお釋迦樣の如き婦人を惡魔と名つけ給へる程婦人に頭を惱まされし人なることを。

▲初代竹本綾之助、去月二十六七の兩日、日本橋常盤木倶樂部に於て恤兵演藝會を催し、自ら御殿と太十との二段を語る。手拭二筋づゝ持ち行ける聽客場に溢れて階下にまで及ぶ。一代の人氣を鍾めたりし彼女が高座に別れを告げてより已に八星霜、當時の堂摺連にし此會に列したるもの、及び當日に於ける綾之助の感慨そも如何なりしぞ。

▲綾之助の聲、清くして美はしも其藝は未だ若くして到底老成素行、小清に比すること能はず。素行の藝風靜肅にして氣品あり、其義にからみ、情にひかるゝ悲哀沈痛の段を語るや滿座涙を垂れて顏を擡ぐる能はず。小清の藝風豪放にして濶大なり、其情壯にして凄烈なる驚心駭魄の段を語るや座客頭を抑へられて手に汗握る。我は此二人を以て斯界の名人となす。

▲高田實、河合武雄來りしより予始めて新劇を見んとするの氣を生じたり、たゞ其手腕を充分に發輝すべき好脚本なきを惜む。

▲世にも腹立たしきは舊俳優が新狂言殊に小説の燒直しなどを演ぜんとする惡野心なり、此弊にして改まらずんば彼等の運命は全滅か又は忘却あるのみ。



木賃宿

樋口二葉

娑婆の不幸を脊負て立つ薄命者、または我から幸福をすてゝ、風雅でもなく洒落でもなく、是非なくされた遊惰者、身から出た錆刀に罪惡を可惜五尺の軀に刻みこんで、自暴ばちうつても月夜をいやがる前科者などが、雨露凌ぐに唯一の身の置きどころと、重寶がるは木賃宿である。

その木賃宿二十世紀の風に吹かれて幾分か清潔にもなつた、警察の取締を煩がるお蔭で杜漏な弊がいくらか少なくなつた、けれどもお客樣がお客樣、營業者が

新柳樽

久良岐選

〇神國史八百万句の中　横濱　安藤幻怪坊

其始め鶺鴒師範仕り
珍彦はから艫押さへて磯に寄せ
櫂を肩にかう入らせられませい
高いので長髄彦は的にされ
山賊の張本國見岳八十梟帥
道普請して道臣命なり
土蜘蛛は腹がへる程糸を吐き
八咫鴉先へ飛んでは木に止り
賊の頭コツリ〳〵と鵄啄つき
此奴が勸めましてと長髓の首を出し

〇分娩十句の中　日本橋　宮崎水日亭

居る丈の小僧産婆へ走らせる
せく使座敷の側は盗み足
御免なさい抔と産婆はゆツくりし
借物の盥釜樣は枕もと
迷子ついた旦那は猫に蹶つまづき
產んですぐ紅を付けるが女なり
女の子でもとは惨い祝ひやう
躰操の手付て赤子眠つてゐ

〇寄宿寮　在岡山　頬台師

新入生鼠のやうに竦んでゐ
袴着け顔を洗つて飯を食ひ
寄宿寮寫眞秘くすにチト困り
外出の留守に葛折は撿査され
日曜の朝は九時まで眼が覚めず
飲んだ酒ゼムで殺して歸て來
制帽は袖に匿れて登樓し
食へぬやつ鐵拳時に食はせられ
出しや張つたやつは袋で處分され
貴族の子馴れぬ手つきで針を取り
若樣が褌時々御洗濯
大食家飯時ごとにからかわれ
隠し藝雷に打たれてさらけ出し
十八番出して見せろと雷は下知
舎監をば自治の仇きとぶんなぐり

〇田舎　奇巽知

田舎巡査口髯斗立派なり

〇小兒　横濱　鳥井一刀齋

くたびれて來ると矢鱈に道をきゝ

嬢の名は杯と旦那は字書を繰り
可愛さが餘ッて夫婦喧嘩なり

小石川　關口啞竿棒

○雜

メリヤスの猿股ひろげサアいくら
戰利品でござると高梁奉り
飛切はかう撃つものだと銃獵家
產見舞娘はすぐに抱きたがり
一串の中でも不味い目ざしあり

○　本郷　山下交酌

これは〳〵と帽子ぬいで髪を撫で
アレ危なくッてよと侯爵を腕で卷き
吉原を反り身になつて素通し
衝突は姑舊派に嫁新派

○時事　久良岐

（學生情死）日比谷では會堂入を禁ぜられ
（同）道行をすれば芝居になつたもの
（詩人劇）踊れない奴が兎角にケチをつけ
（同）詩人劇見物御難の幕だらけ
（同）ヘボな詩よりましだがねチト考物
（旅順口）半巾を振つてコウシャン！〳〵！
（同）尻に帆を掛けて露兵は徵發し
（同）モーそろ〳〵降參なすッてはと提議也
（獵）鐵砲狙いてノーヱで犬を伴れ
（銕嶺）銕ヶ嶽鳩右衞門實は露將黑鳩禽
（毛布）家のでは汚ない杯と見えをいひ
（芝翫の浪子夫人）役者より着物に惚れる東京座
（明治座の喜劇）明治座は高座を背負て立廻り
（戒舊派）川柳いつも土俵は下にゐず

關口文象子の二子を擧げられしを祝し

二子山男山とは子持山



▲川柳募集

題秋季混題▲〆切十一月十八日限▲東京市麴町區富士見町六の十久良岐社宛

正直三昧に入らうとしても、突張つた慾の皮が承知せず、彼方でも往來止め此方でも往來止めに鼻を衝くと直ぐ横道へそれ易く、罪惡の倶樂部のやうになつた習慣は迚も洗滌し去られるものでない、營業者そのものは何れ劣らぬ紺屋職人、藍壺に手を染めぬは殆んど稀れ、大方は故買の才取で棒先を切つて舌ペロリ、否らざれば質屋の通帳に性質のしれぬ典物つけさせて、一割五分から二割の足代を餘徳と言つて居る。嚴重な取締がある現今ですら斯くの始末、況や昔日の木賃宿に於てをやである。

木賃宿の大體が既に斯くの如くであるから、其汚穢しいじめ〳〵した空氣の籠つてゐる室内には、種々の罪惡が塵芥と共に迷ふてゐる、只だに罪惡ばかりでない、悲慘な歴史を今も繰返して血涙に噎びゐるもある。まづそれ等の状況を語る前に、木賃宿の構造間取等よりそく〳〵始めやう。

處で木賃宿の有名の場所と云へば、四ッ谷の鮫ヶ橋、本所の花町、淺草の淺草町で、其外にも場末には澤山ある、否、場末でなくとも貧民窟に接したところには隨分ある、七八年前までは中々繁華なところにもあつたが、近頃は多く取拂はれて邊鄙へのみ追ひくられて了つた。此處で紹介するは淺草町の木賃宿で、たゞ鼻を摘んで店頭を通りぬけ行燈を見たばかりで想像を畫くのでない、實際に研究した正直正銘な有りの儘を文字に寫すのである。其家は上總屋といつて表には例の通り、燒芋屋の看板のやうな大きな行燈を掲げて「御安泊」と書てある、その下に小さな文字で「別間あり」と記してあつた。間口は二間半で奥行は何程あつたか檜持の雪隱的の家で、さうして奥の方は廣がつて居る。土間が一坪半ほどもあつて、這入て左りの長三疊が店で帳場格子の眞黑になつた二三本格子の折れたのが建廻してある、其傍に眞鍮の獅子噛火鉢が古色を帶びて寂しさうに置かれ、帳場格子の中には兎に角机がある、後の壁は赤新聞がはつてあつたけれど、處々破れて壁土の落ちて肋骨まで露してゐる片隅に、竪長の厚い帳面と通帳のやうなものが二三册ぶら下がつて居た。其次に六疊の間がある、これが此家の納戸なり座敷なりで、疊障子は破れ天井も柱も黑木造りに時代の附た割合に、簞笥一棹目立つて新らしいのが据ゑてあるは、何う見ても調和がとれない。で、此簞笥に就て疑問が起り、それを解決することが出來なかつた。其六疊と廊下を隔てゝ臺所がある、一寸見渡した處では大膳太

夫どの丶手廻品等も甚だ簡略らしかつた。この六疊と臺所とを挾んだ廊下は恰も長堤十里と云ふ趣きがあつて、奥の方へ一直線に延び、三分心の洋燈が廊下の中程にぼんやり點いてゐる、其左右が即ち營業に使用する座敷である。廊下の右側は普通客の泊る入ごみ座敷で、八疊、十二疊、十疊の三間、それから右側は三疊の座敷が五間並んである。この三疊の座敷なるものが即ち別間で、規定の賃錢を支拂へば一夜の占領が出來る、此等で別間の客と云へば何となく肩身が廣いさうだ。廊下のどん詰を曲ると男女の便所があるが不潔なことは論外だ、全體この社會で不潔だの、衞生だの、道德だの、廉耻だのといふは野暮の骨頂、安泊に生活するものに其樣穿鑿は天を仰て唾ばきすると同じことてある。

さて帳場格子の内に陣取つて居た女、布袋にあらずんば、飴細工の牝狸ともいふ腹ぼてに、一ッ二ッ談話を試みた。彼は鋭い眼を七分三分に光らせ幾度か、じろ〳〵顔をながめ、

「はい、此節は不景氣てすよ。全體この邊は藝人のお貰ひが多かつたンだが、巡査が馬鹿に嚴重いので田舍稼ぎに出るものばかりさ、それに戰爭て世間が不印と來てゐませう、何うして貰ひなンかがさうさうあるもンですか、カラ駄目のかは。——宿賃ですかへ、今ぢやア上等が十錢で、並が六錢五厘でさア、おい等の家は高いてえ評判だがね、憚りながら餘所のやうに綿のない蒲團をかけさせたり、疊の上にごろ寢はさせねえから……、それでも一昔前のことを思ふと五割方も六割方も高くなつてらアな。おい等の家でも舊は家根代が二錢五厘さ、それを風呂附で三錢五厘に直あげして、別間は六錢から七錢とつてたがね、今の割をすると別間は些と高かつたよ。それても其時分は一室が一夜に三度も使へたから宜かつたンさ。」

一室が一夜に三度も使へるとは不審な譯と疑問を挾めば

「そんな野暮は聽かないものよ、稼ぎ人が客を啣へては引張つて來るから、その度に屋根代があがるンて、何も不思議なことは些ともないてさア。それが此節のやうては稼ぎ人も可哀さうだ、一夜に一人の客さへ六ケ敷、おい等のところの別間もさつぱりあがッたりだ。」

と言つて歎息した。それては普通客が減じて座敷があ

いて居るかと云ふに、決して左樣でない。何うか斯うか毎夜相應に客はある、が、別間客は割合に少ない、最もこゝには夫婦もの、小商人で別間を一間借切つて自炊生活をして居るものもある、又泊客も多く馴染てふりは極めて稀れであるから、比較的他店とは打撃が薄いと云ふことだ。同じ木賃宿でも土方や工場通ひの連中を定得意にして居る家は、餘り變りなく繁昌して往くけれど、小商人、大道遊藝人、お貰ひの側を得意客とする家は骨灰である。

お客樣の種類に就ては、殊に復雜な下流の游泳者であるから、いろ／＼の職業の寄せ場とも云ふべく、而してお客樣の多くは職業以外に副職業を旨とする儕輩で一定の住所なく三界無宿のドラ犬同然なものである。明治の人間としてオギャアの産聲をあげ、浮世の空氣を吸ふこと幾日、命名式に赤の飯に鰹節そへて親戚知己に配らさせるだけの、果報は持つて生れぬまでが、戸籍にはチャンと其名は登錄されて、假令や私生見たりとも國民たるの資格は得られる今日、無宿者と云つたら金輪ない筈だが、現在戸籍も身分も振り落した無宿者が木賃宿には最も多く、さうして其樣お客樣でないと優勢を占めることと實際に於て困難である。と云へば、無宿者が何故に木賃宿で勢力を占め得られるかとの疑問が起る、その無宿者が歡迎さるゝは彼等が副職業に於て收獲するの惡錢光明だ。某雜誌に掲載された木賃宿の內幕中に「夜中に賭博絕ゆることなく、勞働者は終日稼ぎ得たる收獲をこゝに沒却される、而して其貸元とも稱すべきものは、宿主または近傍の遊人である。」と書いてあつた。一寸考へると事實ありさうに思へるが、實際は大に異なる者で、木賃宿の客は宵の口より泊り込みて安閑と時を消すものでない、宵の口よりの泊客は小商人などにあるけれど、それとても九時十時を塒の定め時とするやうだ、土方職などは比較的早泊りであるが、他は大抵十時すぎを千客萬來の時期とするのだ。で、其客は何れも疲勞て睡るを目的に來るので、來るや否や皆ごろ／＼海豚のやうに寢轉ぶと直ぐグウ／＼高鼾である。こんな有樣であるから、實際に於て公然賭場か木賃宿の並座敷に開始されることは受取れぬ、けれども密々二人三人が博奕を打つ、また例の別間を借りて弄花を遣ることは往々ある然れども宿主が貸元になるの、遊人が出張して胴を取るのと云ふことは殆んどない。博徒が宿主である木賃宿にはそんなのがあるかも知れぬが、先づ除外例に當

かねばならぬのである。

無宿者の副職業とは何か、竊盜、掏賊、掻攫ひ等が重なるものである。それ等の贓品の捌き方に就て、宿主が大に與つて力あるは一班の例で、彼等はいかなれば自分で贓品を故買者に直渡しをせざるか、そこにはまた蓋もありて、本人より故買者へ直接に贓品を賣込むには、故買者の才取の手を經て賣るより非常に安い、で、才取なる周旋者に相當な手數料を支拂つても、ビク／＼もので自分で自分の贓品を賣込むことはしないのである。此賣込の才取は誰れがする、宿屋そのものが斡旋の勞を採つて利益を得るのである。何故自分で贓品を故買者に賣るは安くつて宿屋が中間に這ると高くなるかと云ふに、是れには頗ぶる奇習があるのだ。それは木賃宿の營業に何等の關係もないが、只だ奇習とのみては了解される讀者は恐らく無からうと思ふから、一寸簡單に説明して置かう。

故買者が普通贓品を買ふには、贓品を一々取調べ、甲品は何程、乙品は幾干と價を定めて買取るのではない、一包にして三圓とか五圓とか、或は七圓位を最高度として取引するが例である。けれども木賃宿に泊る客の贓品には先づそんな高價に取引するものはなく、最初故買者の手に渡るときは、一圓以下である。最初買つた故買者が、これを第二の故買者に賣渡すときは、假に一圓の贓品なら一圓五十錢となる、五十錢の原價なら七十錢で取引する。其第二の故買者はその贓品を第三の故買者に賣る、それが一圓五十錢で買つた物品は一圓七八十錢込に手を拍つ。第三に買つた故買者に至つて始めて贓品の仕分をする、假令ばこの小袖は幾干この羽織はいくら、この帶はいくらと云ふやうに品質に對する價を鑑定し、こゝで正當の商人の手に渡るとか、或はまた古着類なら古着市へ持出す、道具類なら道具の市に持出すと云ふ順序になるのである で、本人そのものより直接故買者の手に持込むと、一圓より買つてくれぬものも、宿屋を中間に入れて持込むと一圓五十錢になる、そこで此足賃則ち手數料が二割と云ふは殆んど相場ださうだ。手數料二割を支拂つても猶二十錢餘分に得られることゝなる、畢竟宿屋が第一故買者の資格を有するやうな譯合となるのであらう。

中には隨分正直なお客もあらう、また正直眞法に稼業する營業者もあらう、が、お客も營業者も弟たり難く兄なり難きが尋常一斑の彼等社會である。だから携帶品は紛失する、忘れものゝあつた例はなく、一室に

八人なり十人なり目刺鰯の並んだ如く、双方より頭と頭を突合して寢てゐても、朝おきるとき少し油斷でもしたら堪らない、携帶品の紛失すること請合て、手拭一筋であらうと褌一本であらうと、手當り次第に他人のものは我もの、我物はわがものの主義を應用して平氣である。而して其チヨツカイを遣損じ、所有者に認められ「コン畜生と！」大喝されても平氣の平左で「何言てあるが、返してやりやア元々ぢやアねえか、ヘン、面白くもねえ、ギヤア／＼騷ぎあがッて……」と澄すは宛然チヤン／＼の勞働者と同一轍である。それが被害者が口より出るなら「面白くもねえ」と云ふ理由もあるが、加害者がポン／＼と威張るに至つては驚かざるを得ない、石が流れて木の葉が沈むとは實にこの社會のことで、常識を以て判斷を下すことは出來ないのである。客と客との間は然り、客と營業者との間は何うあらう。初見參のお客ならば帳場格子のうちより、石板石筆を出してその客に宿所姓名をかゝせ、當夜の家根代を前勘に拂はせてしまへば、寢所へ導いた限り冷々淡々更にお構ひなしだ。馴染客になると定めの家根代を帳場に投り出した儘スタ／＼塒を探して轉りとする無雜作さ、たゞ／＼憫れて氣の小さな者は腹の虫が轉宿する位である。

以上の如く、木賃宿の薄暗い室は罪惡の酸素と炭素が充滿して居て、眞人間では到底この空氣中に一時間も安を偸むことは得られぬ。さすれば客の一切が人間の屑物ばかりであるかと云ふに、中には浮世の繼兒、薄命の總代者となつて居る正直律義の者もあるが、それ等の者は木賃宿へ泊つても隅ッこへ押込れ小さくなつて、漸く一夜を明すと云ふ始末である。百聞一見に如ずと唐土の唐人横丁の伯父さんも五託を吐いて居るが、實に木賃宿などを研究して見ると、今更ながら陳腐な語も新に活動して來るやうに思へる。

これは直接に營業者より聽いたことで無いが、街鐵の土方をしてゐる某が斯樣はなしをしたことがある。

「そりや旦那、酷いものでげすよ。わつち等の内で些と錢でも持てると睨まれたら、何うでも消費せるやうに仕向けられて結構まき揚げられるンさ。――まさか胸倉をおさへて强奪るてえ譯ぢやアげえせんがね、女を斡旋して財布の底をはたかせあがる。――此間のことだつたが、わつちが五十錢ばかし持つてるのを、帳場でチラリと見たから堪らねえや、婆ア奴いやアにチヤホヤお世辭をつかひあがつて、そく

〳〵持ちかけるぢやげえせんか。其言草が訝しい、若いものが獨りで寢るてえことアねえ、美いのを一人幹旋しやうと言ひ出したから、箆棒め淫賣を買ふぐらゑなら南千へ投込みて往くてえば、そんなら内に泊つてる女なら素人だから可からう、何れでも幹旋しやう、あの法界屋のきい公なら女姿も好し、顏も萬更捨たものぢやねえ、南千へ往つたッてあれ位のは少いッて、いやアに氣を持たせあがるンだ。わつちも驚いたね、法界屋のきい公てえのは一寸と澁皮の剝た女だが、まだ十四てえぢやアありませんか。──何うて木賃宿へのめづり込てゐる女だから、歴落者に違ひねえンだけれど、婆アから小當りにあたつてウンと言ば約束が出來るが、女が承知しねえで男が是非ともと思やア、婆ア奴手荒な手傳ひしても骨折賃をせしめる爲め亂暴な眞似をしあがる。」猶一層甚しい情况を語つたけれど、これ以上の請賣りは如何に虛心平氣でも口にも筆にもすることは出來ぬ、假令こゝに曝露させずとも讀者の想像を呼起すであらう。

裏面に潜伏するところのものは、啻に千手觀音の孫、曾孫、玄孫の繁昌や、南京虫の大襲擊のみでなく、社會にありと有らゆる罪惡の潜むのが木賃宿であるは、掩ふべからざることとて、警察の取締も充分に干涉して居るものゝ、如何にせん光澤消硝子の內は外面より手の屆くものでない。併し表面だけの取締でも嚴重になつた効驗幾分功を奏した傾きのあるは喜ばしいことである。それに木賃宿の宿泊料が物價の騰貴に隨伴して高まり、一家の家屋代二錢や二錢五厘であつたものも、四錢、五錢、或は六錢となつたので、お貰ひ的生活をするものゝ堪へ得られぬ處から、比較的罪惡に近接しないものは、五人七人共同して場末の犬小屋同樣の長屋を借家し、日懸家賃の五錢なり六錢なりを拂つて、芋を洗ふやうにゴタ〳〵と雨露を凌ぐ方針をとるので、眞面目くさいものは漸く木賃宿に影を遠ざかる光景を呈して來た。

（完）

學生の經濟

小室白也

（一）

支出大なれば供給も亦大なりなどゝ、いろはのいの字は右へはねて縱横が十文字と云つたやうな事を、今更

らしくかつぎ出して、しかつめらしく講義をしようとするのではない、お氣の毒だが今少し世話に砕けた事をうなり出すぞ

學生の經濟とは何だ、實に己にも能くは解らないのだが、今日は一切理窟を云つこなしと堅く約束をきめて置いて唯女と男との學生が、各月々の經濟は那邊かと云ふことを一と通り觀察するに止まるのだ、

前々號に血來君が、學生の妻帶といふものを書いてえらく我々獨身者を羨ましがらせたので、今度は一番この學生等が、毎月どんな羨むべき生活をして居るかを金錢上から割り出して考へて見るのだ、

尤も一ヶ月間の費要と一と口に云つて了へば、ピンからキリまでつきくるめた云ひやうで、金平糖も煉羊羹もボツタラ燒もカステラも二一添作でぶんならしの計算だが、考へても御覽、八や熊と大臣樣と同じ升で量られてたまるものか、一寸早い話がお葬式をするとした處て一方は三四人の連名で中味は二貫か三貫のお手輕な線香代、一方は御一名づゝ、奉書で恭しく、五千匹は缺かされぬと云つた理だ、

さればにやと出ると社祚で侍らなければ後が續げなくなるが、いゝか聞け、李左衞門が忰李作でも、或は馬

齊の介息鹿麿でも、書生と云つて了へば同じ畑のもののやうだが、胡瓜もあれば茄子もあるのだ、胡瓜と白瓜との區別が解らないやうな奴は默つてゐろ、

（二）

動物學でも植物學でも分類と云ふことが肝要だ、分類などゝをかしな言葉を使うと、どえらく難敷さうだけれど、何のことはないすいた餅はすいた餅、おこげはおこげと撰り分けて、入れ物を別々にするのだよ、斯うして置かないと後が困る、殘飯と今朝のと一處に入れて置けるものか、虛と思つたらお神さんにお聞き、そこでこの學生の內にも新らしいのもあればすいたのもある、しんのあるのもあればことげもあるから、今之れを撰り分ける、うむ分類するんだ、

先づこれを二つに分けるぞ、即ち女と男だ、學生と云ふ字を附ると女學生と男學生だ、

女學生、一名海老茶式部とも云ふ、何故こんな名を取つたかと云ふと說が二派に分れて居る、甲派は海老茶の袴を穿くからだと至極簡單な說明だが、乙派のは中々難敷いの、曰く古來鼻下長の人々其後姿を見て實に艶美ぢや〳〵と云ふたのが轉訛したのだと、但しあわてるな、鼻下長の人と云ふても薩長の人と云ふのと同

じて何處かのお國の人だらうなど丶思つちやならんぞ然しこの二派のどちらが當つてゐるか己は知らん、又どちらが違つて居ても己はかまわん、

この女學生は又二つに分類するぞ、一はハイカラ式部一は芋喰式部

細く云ふと、ハイカラ式部も又二つに分れる、即ち形式上のハイカラと實質上のハイカラだ、後者を純粹ハイカラ屬、前者を假裝ハイカラ屬と稱す、

段々やかましくなつて來たぞ、たまげるな、こん度は男學生を分類する、

先づこれを昔時は軟派と硬派とに分つたことがあつた軟派とは解り易く云つて了へば女色黨で硬派とは即ち男色黨だ、然しこの分類は過渡期(?)であつて、今ではこんな分類は當らない、

依つて己は斯く分類する

男學生を大別して二となす、曰くだ、其一は後來有望の者であつて學事之れ專らなをものだ、これを眞面目類となす、他は後來大に望みなき者であつて親泣せを之れ專らとなすものだ、これを不眞面目類となす、

眞面目類は其數甚だ少ないから最早分類しなくともよいのだが、委しく論するには未だ分類する必要がある即ち親から相當の學費を送つて貰つて眞面目に勉强する者と、何人からも費要の助を受けず自ら勞働苦學するものとの二屬となる、前者を通常眞面目屬、後者を特別眞面目屬と云ふ、

不眞面目類は其數實に大變だえ、これを分類するのも中々骨が折れるぞ、

一と口に不眞面目と云つた處で其種類誠に僅少でない勿論庄屋樣がお葬式で正坐に直つた時を眞面目に控ると云つたからとて、太郎作どんが振舞酒でレケになつて謡句のう、うなり出す時ばかりを不眞面目と云ふのではないぞよ、

放蕩に走り無賴に流る丶のは勿論不眞面目の極だが唯何んとなくぶらついて居て學校もろく／＼出ないと云ふのも矢張不眞面目である、依て今不眞面目類を大別すること左の如しだ、

第一、氣取ることばかりを考てゐるもの、即ちにきび顔をなぜ乍ら衣裳に香水をあびせる連中、これをハイカラ屬と云ふ

第二、飲食にのみ意を注ぐもの、これを飢饉屬と云ふ恰も飢饉の乞食に似たればなり

第三、氣のきいた道樂もしない僻に、學校の方は圖心

になまけると云ふもの、これをエンダラ屬と云ふ、己はエンダラの語源も意義も知らないが、何んとなしにずぼららしい音てはないか、

第四、寄席にばかり通ふ者、これを鹿屬といふ、蓋しはなしかによりてくだらぬ知恵を授けらるゝ爲めの名なりと云ひ或は馬鹿の鹿屬なりとも云ふ、鹿屬は又純粋鹿科と義太科とに分れるが、これは後て説明する、

第五、しやぐまとしかけにばかり心を入れて戸棚の籠はがんがらがん、本箱へは鼻紙と古新聞をねぢ込んで机の引出しはやつと寫眞と豆の皮ばかりと云ふ大變なもの、これを烏頂天屬となす、思ふに烏頂天になつて通ふからだらうよ、

まだ委しく分れば色々あるが、面倒だから大略にする、見ろ、今この分類を表にして見せる、

- 學生
  - 女
    - 芋喰式部
    - ハイカラ式部
      - 純粋ハイカラ屬
      - 假裝ハイカラ屬
  - 男
    - 眞面目類
      - 通常眞面目屬
      - 特別眞面目屬
    - 不眞面目類
      - ハイカラ屬
      - 飢饉屬
      - エンダラ屬
      - 鹿屬
        - 純粋鹿科
        - 義太科
      - 烏頂天屬

まだこの外に、ゴロツキ屬、花引屬、などもあるべきだがこんなものは勘當者と見做して、經濟を論ずる必要がないから略す、

（三）

これからそろ〳〵本論の經濟の取調べの報告の雜錄にとりかゝるぞ、先づ表に從つて女學生の芋喰式部から始める事にする、

この芋喰式部は男學生の眞面目類と比較すべきもので相似の點も小くない、然しこれには勞働苦學するなどと云ふのは極めて少數て、殆んど皆無と云つてよい位てあるから、敢て男學生の眞面目類の如く、通常と特別とに區別する必要がない、

女學生出してゐる親御達は知つてゐる筈だ、先づ衣裳は一切國から送るとして、其外每月の費用は、

一、下寄料、これは近來大に物價が騰貴したので恐ろしく高い、大抵八九圓から十二三圓の內だ、國の親御達の內には娘息子の費用を見て、己の若い時分には五圓あれば贅澤に暮せたものだなどゝ小言を云ふ人もあるがそれは無理だ、今これから眞面目で書くから萬事參考に遊ばせ、

今云つた下宿料、これは先ず中位を取つて十圓として

置く、然し十圓の下宿料なら月末の拂の時は屹度十一二圓に上る、と云ふと妙なことを云ふと思か知らんが妙でない、夫れは、お茶が一度で二錢若しくは四錢取られる、お客でもあれば三度に一度はお菓子も取るこれは十錢と帳面に附けられても其實八錢分しか出さない、即ち下宿屋は玆で又二錢頭をはねる、若し又お晝飯なりお夕飯なりをお客に出すと、お客膳と稱して十五錢乃至廿錢取られる、そうすると、そら一二圓はぢきに上る、

夫れから學校の月謝、これは學校によつて色々だが大抵二圓内外、

以上は必須の要途だから差支は勿論ない、

既に芋喰式部と云はれる位だから、あんまりめかしたがらない、唯買喰をするばかりだ、然し買喰はしても已は芋喰式部を悦ふ、何とならば、めかしたがらないつまり男とふざけたがらない結果として、どうしても學業は成功する方に近い、人間身を亡す色にありだからな

けれども女であるからには、髮の物などに一と通りの費用はかゝる、即ち

白粉――大抵水白粉を用ゆ、毎月一瓶づゝこの價凡そ二十錢、紅――一錢五厘か二錢で二三ヶ月は大丈夫だ

コスミッチグ――近頃油を餘り用ひないかはりに、前髮と髱とにコスミチックをつける、これは一本で三ヶ月は在る、この價並にて三十錢位

石鹼――昔は花王石鹼が歡迎されたが今は中々そんな事では承知しない、これも二ヶ月に一個でこの價並にて大抵廿五錢

精神丹――これは口中の惡臭を去る女の嗜だ、一袋五錢で月に二袋づゝ

カザリピン――一名へーヤピン――これは束髮の眞中へさすやつだ、一本あれば生涯よささうだか、そうはいかない、あれて中々折れ易い、三ヶ月に一本と見て置くべし、この價並等で三四十錢

とめ針――これは束髮の、そら、蛇のとぐろのやうにしたのを止めるのだ、七八本押込むよ、一本が一錢、

たぼどめ――これは價並て十錢位

サイドコム――そり橋のやうに曲つた櫛だ、世の中は贅澤になつた、この櫛を一つの頭へ三つさすぜ、たまには四つさす人もある、前髮の處へさすのが八十錢位て兩側のが三十錢づゝ位

リボン――赤いザンザで間に合せればよいにこんなものをひら／＼させる、一度分が半ヤールとしてこの價廿五錢位、ぢきによごれますから、月に少くとも一つ二は買つて頂戴なと云ふぞ、

打ひも――これは前髮と髮の根とをしばるのだ、兩方で二尺要る、この價一尺二錢

郵便代――切手と端書とで凡三十錢

湯代――一と晩おきに入るとして、一度が二錢五厘或は三錢づゝ

夫れから買喰だ、然し贅なものは喰はない大抵豆とお芋だ、豆は豌豆が第一でお芋は燒てもふかしてもよい人によつて色々だが大抵一日平均五錢づゝは喰ふ、中にはとても買喰はしたくないと云ふので故鄕へ何か甘いものを送つて呉れと注文するのもある、

其處でこれ等を計算すると平均一ヶ月の費用は凡金四圓二三十錢

其外下駄だの傘だの蝙蝠傘だの、冬が來たからショールだの夏に成つたから氷水だのと云ふのがあるが、これはその時々のものであるから、この計算には入れてないぞ

（四）

今度はハイカラ式部だぞ、純粹ハイカラ屬は心までがハイカラ式であつて、假裝ハイカラ屬はハイカラを裝ふのである、つまりこの方が一段下に位する、が經濟には大差はない、

大にめかして大に飛び回るのだ、曰く戀は神聖だ曰く運動を盛にしろ曰くヴーナスの神が曰くミューズの神だ…とよく云ふ奴だ

大にめかすから大にめかし費がかゝるぞ、先づ芋喰式部が用ゆるものゝ外に

香水――ヴァイヲレットに限るのホワイトローズがいゝのと云ふ、この價一圓五十錢位、

白粉――水白粉と練白粉とを並用する、この價合せて三十五錢

白粉下――ローヤル水だの小町水だのと並べ立てる、この價合せて三十錢位

香油――これは頭になびり附ける、價凡四五十錢位

サイドコムもカザリピンも上等の者を用ゆるから、この價制限はないが、凡合せて三圓內外、

たぼどめ――襟止め兼用なのがニュースタイルだわなどと稱して、モール附などを用ゆるからこの價四五十錢

前つと――これは前髮をおつ立てるために入れるも

のだこの價十五錢位
花簪——リボンとチャンポンに用ゆる、少し上等だとこの價一圓內外、
バラの花——簪の代りに花木屋(うゑきや)から買つてくる、一花三錢乃至五錢
ゼム——これは精神丹などは野暮だと御意あつてこの價十錢で一週間に一袋づゝ
石鹼——競馬が香りがよいと云ふのでこの價三十八錢
その外、室の裝飾に花瓶、鏡、寫眞立、いやもう色々と費用(かゝり)がかゝるぞ
このハイカラ式部は盛に戀を說くぞ、然しこれには費(か)用はない、勿謂費用はないと、大にある、近來月黑く人稀なる處には、若い男女の手を携て逍遙するものあるを屢々見る、お揃て芝居見物としやれるもの亦少くない、斯う云ふ人の費用に至りては豈敢て巳にわかるものか

（まだある）

社會側面觀

●奇警なる觀察の投書を歡迎す●二百字以內葉書に限る●每月十八日締切

▲米を食ふ機械　　青山　紫舟

人間と云ふものが腦を用ゆることの多き程高尙なものであつて、機械的に働くもの程平凡なものであるとするならば、凡そ世の中に電車の旗ふり位平凡な者はあるまい終日口をきくの必要もなく線路の傍に立ちて青赤の旗をふる樣は奈何しても一個の機械で、とても人間とは思はれない、機械も機械、米と云ふものを喰ふだけ不成功な機械だ

▲利口らしい馬鹿　　番町　鳩翁

利口さうに見て馬鹿なものは代書家だ、何々の書類をどうぞ、よろしい、とすぐに書く處は誠にたのもしい樣だが、實は印刷された一定の文句を寫すに過ぎないのだ

▲戰爭と朝寢　　駿河臺　鈴木生

日露戰爭此方ニコライ塔上例の破鍋的の鐘の音絕えて市民は樂しき日曜の朝の夢を破らるゝ虞なきを以つて寢坊となりしは事實なり、意外な處へ面白い影響があつたものなり

▲側面觀の側面觀　　藪睨生

中央公論が側面觀を募集するとは側面から觀ると甚だ以つて面白い譯され

▲上の又上

巣鴨　白黒子

嘗て血來君が學生と要帶と云ふのを書いたら今度は岡山の翠砂君が赤ん坊の要帶と云ふのを書いた、成程と感心して居たらお隣のお神さん、來月が臨月だと云ふのが、この子が女だつたら親類の子供と夫婦にすると云つてゐた、その子供と云ふのは今月が臨月なのだそうだ、實に驚くが市川團十郎は未だ自分の娘に養子もきまらない内から、娘に出來た子に團十郎の名を聽かせると云つて居たそうだ、これは又一目上だ、

▲格資なし

根岸　田舍漢

拾錢の買物に紙幣を出して見後を張り、九錢九厘の處拾錢て釣錢を取らずに氣前を見せ、或は宵越の金は遣はれしと威張つてる江戸子は迚も茶代廢止同盟會員たるの資格がない

▲クリスチヤン曰く

堂　守

男曰く、外國人と親しくて洋行てもさして貰ふ積りさ、錢無して外國語を學べるからだ、若い女子と親しくなるに好都合だからさ……女曰く、教會へ參りますと自然唱歌を覺えるのに都合がよいものですからね、宅に居るとどうも窮屈ていけませんからね、理想の男子を見出してスヰートホームを作るによいから私信者になつたのですよと、嗚呼これが所謂神聖なるクリスチヤン諸君……

▲愛國と逸樂

本郷　妻戀學人

人物供給の欠乏せる方面に自分の目的を立つるのは是國を愛する最大なるものであると職業の撰擇處世の方針に心を勞してる靑年か多くなつた。だが彼も餘つてるこれも澤山だと毎日〳〵芋虫の樣にごろ〳〵と眠轉んで一刻千金の時期を空費してるとは實に面黒い愛國者ではないか

▲氣前を見せるは吝き也

神田　天　月

光る柔かな物を着て食時になれば天ぷらや牛鳥なべや蒲燒やなどて飲食し表面上さつぱりと勘定し女さんこれや少れえが鼻紙ても買つてくんれえと拾錢銀貨の三つも紙に捻つてほんとなげ與へ天晴江戸兒になりました所ては氣前の可い方よと思はせる、而も家に在る時は不具者が哀を乞ふも一厘も與へず洗晒を着て香の者て茶漬がぶ〳〵とは實に恐入りた次第である。

▲自殺的廣告

芝大門　泡　沫

有樂町の一名物平民新聞社の社前に揭出してある平民文庫「消費組合の話」の廣告が面黒い、曰く、消費組合は勞働者をして知らず〳〵の間に資本家たらしむるなりと、嗚呼何等の予盾ぞや何等の自家撞着ぞや、君等の蛇蝎視せるは資本家ならずや、然るに消費組合は理想の子勞働者をして悪魔の資本家たらしむると、知らず消費組合とはさるものなるにや





讀者之文壇

紅鹿子に答ふ

寒人子

世はさるものにて候ぞ、如何に救へよと叫べばとて聾なりし世のいかで容易う聞きつけ候べき、いかに助けよと招けばとて盲なりし世のなどて容易う見つけ候べきや、倫理の道德のと申候とも、そは唯に社會の極めて力なき極めて小さき團體の言の葉に止まりて、弱者の肉は遂に强者の食にて候よ、さるにてもこの小さき力なき團體は、勇々しくもものゝ具とりて、大なる强き魔の軍と戰ひ居候けなげさよ、されど‥‥吁されどそは終に敦盛が熊谷に刄向ふにも似て、麗しき花の顏はきたなき土に押しつけられて、徒らにけがらはしうはなり候まじく哉

世は聾と知りつゝも叫び候へにき、小さき咽のいとくるしくて、破れつさけつ、血潮の流れ出るまでに、ひたふろ叫び候へにき、さはれわが細きあはれなる聲は世の年經たる聾の耳に入るべくあまりに力なく候へにき、さながら廣き〳〵野の中に立ちて、草笛に世を唄ふに似て、返りて余が耳に入る答の音と思しきものは木玉の響すらなくて、余が口を出てし聲は徒らに遠く遠く走りて、細うなりて、薄うなりて、遂に空しうあなたに消えて候。

余は今死なんと致し居り候ぞ

余は又再び叫ぶまじと心に誓ひ候

一度びは彼の小さき團體のうちに走せ加はりて、魔の軍に一と失報ひて、潔う打死せんかとも存候、さはれ今はそれさへかなはぬまでに衰へて候よ、

余は又再び叫ぶまじと堅く〳〵心に誓ひ候

君も亦要なく物狂はしう叫ぶことを止め候へ、世は年經たる頑なる聾にて候ものを

花散りて名木も薪に賣られ、家貧にして世に捨てらる

ると申し候、如何に大人も君子も産ありてこそ名論も高説も出つべくと存し候、語に所謂衣食足つて禮節を知るとは誠に此處の事かと存し候よ、世の腐儒共が清貧に安んずるなど申し候へともそは唯ほんのまけをしみに止りて心安らかなることは罕なるべく、又貧にして全くよく心安からんには、そは實に神經もなき大白痴か然らざれば得難き大人なるべくと存し候、我々小人に至りては終に貧すりや鈍するの名句に從はざるを得ざるべきかと存し候ぞや、

余は其始め、かばかりの小人ならんとは自ら思はざりしが、今は漸くその自惚なるを悟り候よ

余は今余の小人なるを信ぜんと欲し候

かく信じ候上は余は又再び叫ぶまじと堅く／＼心に誓候ぞ

余は叫ぶまじ余は何事をも申すまじく候也

血來曰く、予は深く君に同情す、併しながら左程弱うては最早死ぬより外はあるまじく候、君若し君が神たり佛たり得る資格ある人間なりと悟りたまはゞ、君は誠に强き人となり給はん、世が難なりとて打捨置給へ、社會に强者ありなど思給ふな、若しあらば自分なりと思ひ給へ、自分獨りて生きん事を思ひ給へ、物に頼着なく自分の天職に竭し給へ、而して尚ほ死なば之より結構なる死は無之候

頓首

韓國教育論

韓國京城にて　伊藤千助

韓國經營論は近頃際物的問題として新聞に雜誌に於て多數の大家或は文士の意見を發表せり、吾人夫れ等の意見を觀察するに政治上若くば經濟上に就ての改革意見なれども韓國上下の民に自改の意志無きが故に殆んど其効力無きが如し、多少實行せらる可き意見もあるも全く末に走りたるの改革方法にして其本を顧みざるの意見なりと云はざる可からず、吾人は消極的の改革方法なりと雖も百年の長計として先づ韓人を教育するの企畫を目下の急務なりと感ずる者なり、教育が國民を作り國家を作りたるの實例は歷史が明白に吾人に示したり、見よ五世紀の頃テームス河の南岸に上陸せしアングロサクソン人種は自らアングロサクソン特性の教育を以て他の人種を感化するに務めたるが遂に今日の英米二大文明國を建設せしに非ずや

穀を蒔ゆるは一年の計なり樹を栽ゆるは十年の計なり英才を植ゆるは萬世の大計なり、シユライエルヤツペルも曰く、教育は社會の一員たるに足る資格を有す

る人を作る者なりと、然り教育は文明的の國家を作る基礎なり國民を作るの母なり故に教育の必要なる何れの國家も同一なりと雖も韓國の如き未開の國に於ては殊に必要なりとす、韓國に於ては現時教育の制度或は機關は存するも頗る不完全にして毫も教育普及せず全く制度も機關も無きに似たり、韓國に於て斯る教育の不完全は全く今日の衰微を來たせし一大原因なる可し、然るに今日韓國經營論を喋々する者教育のことに論及せざるは常に吾人の大に遺憾とする所なり吾人は專門の教育家にあらざれば韓人を教育するの主義或は方法に至りては全く無頓着なれば、唯吾人は日本的の教育を韓人に授く可しと云ふのみ、吾人は韓人が文明的の教育によりて智識を得而して自國未開の理由を知り自ら進んで之が改革の必要を自覺するの日を翹待する者なり

現時韓人教育の機關として我同胞の設置せる日本的教育を教授する學校は、韓國内に於て十二三ヶ所にありて熱心なる教師が育英の事業に孜々貢献しつゝありと雖も經費の都合ありて大に擴張すること能はざるが如し、故に吾人は我政府が速に補助の道を附けることの速かならんことを望む亦有志の個人にも此事業に同情を表し大に左袒す可きことを勸告す、仄に聞く所によれば我文部省も遠からず之等の學校に補助金を下附せんとて其調査中なりと、之れ元より左もある可き筈にして吾人は速に其擧に出でんことを望む者なり、亦彼等教師は尚一層奮勵し其天職を自覺し一切の名利を犧牲として粉骨碎身大に益々盡瘁せられんことを望む所なり、大和民族特性の教育方法を以て韓の人文を啓發する之れ一大快事業ならずや、政府も個人も韓人教育に全力を盡して根本的韓國經營の道を講ず可し韓人教育の冷淡ならんか獨り韓國の不幸のみならず我同胞の一大不幸なり、如何となれば我政府及び個人の經營しつゝある事業に對し韓人の無智なるが爲め常に障碍を受けつゝあるにあらずや、吾人は韓人教育の急務を悟り聊か社會公衆に注意を促さんと欲する者なり

新刊批評

▲プリユーターク英雄傳　第三卷

森晋太郎氏譯
尙友館發行

プリユータークの英雄傳とは吾人の早くより耳にせる處なれど、その如何なるものなるやに至つては之を見たる事なかりき、今即ち邦語によつて其一端を窺ふを得たり、こに第三卷にしてソーロンとポプリコラ二英雄の傳を收む、森氏は重に英譯の書によりて翻譯せられたりといへど

吾人は今之と對照して如何によく譯されたるかを見るの便を有せず、然れとも吾人が其最初の一頁を讀み初めてより之を釋くに忍びずして僅々三時間に讀了せるは、以つて如何に此書の趣味あるを證せるものなり、プリユータークの英雄傳そのものに就いては世既に定評あり吾人は只趣味あり實益あるを此譯書によりて窺ふのみ、而も此譯文の多少讀み易からざるは大に遺憾とする處なり、尤も多く逐語的に譯されしものならんも、かく言はてもがなと思ふ節また少からず、例へば『ポプリコラは、ローム人の、その以つて、之を推稱したる名にして』の如き、再讀を要せざれば容易く解し得さるものなりとす、併しながらこは實に大事業なりかくの如き瑣細の事に彼れ是れいふべきにあらず、切に之が完成を望まずんばあらず、而して此書の有益にして趣味深き、吾人は單に歷史專門の人にのみならず、廣く何れの人に向つても之れを推薦せんとす、

(定價三十五錢)

▲經濟進化論

田添鐵二氏著
平民社發行

平民文庫中の一編て四六二つ切り百五十頁の小冊子てある。著者の序文によると「革命は廿世紀の社會が到底避くべからざる變動たらざるを得ない」もので此著は此問題に科學的解決を與へたものてある、「吾科學的解決に血と肉とを與へたものてある」とあるが科學的著述としては頗る疎笨てあるといふ譏は免かれないし、血と肉とを與へたるものとしては甚た惡文てあるといふ嘲りを甘んぜざるべからざるものてある。ツマり社會學者經濟學者の著に於て見るが如き叙述の整正なく、又改革者豫言者の作に於て接する如き文章の生氣がない、惡くいへば少き材料と少き文字を以て大なる問題を解决せんとしたる書生流の著述てある。宜なるかな著者も亦「有體にいへば予が北米シカゴ留學中稿を起せしものて

あるといふて居る。之れは著者が「文明批評」とかの一卷て時があれば今後五卷の著述をなすとあるが、今小し價値あるものを出さるゝことでなければ寧ろ篋底に秘せらるゝ方がよからうと思ふ。文章の事で甚しく目立つたことをいうて見ると卷中數十の誤植は別として、絕對といふことは皆絕體と書いてあるし、又敢てといふ字をつかぬ所に澤山使つてある。又文章の終にはあり又はなりなどの助辭を省いて與ふるものとか、即ち何々とかいひ切りたるもの甚だ多いので重大なる問題をして大に輕からしむるのてある、其れから加之といふ字を而かもといふ所に使つてもの字を其下に付けて置くなどは實にひどい、第二編第四章の前半、四大交通機關其他の發明などが社會の文明に及ぼした影響を叙した所は稍々見るに足る。

(定價十五錢)

▲世界お伽噺第六十二篇　金馬將軍

岩谷小波氏編
博文館發行

希臘のお伽噺て甚だ面白い。構想が奇怪に流れず、小しく想像力の豐かなる人には實物が目に見ゆる樣に書いた所がある、蓋し近來のお伽噺中の白眉といふべしだ。王子を老臣に命じて捨てさせる所などは稍々沙翁の著述に似た所があり、又櫛や石鹼を投げて山や海などの出來る所は日本の昔話に似た所がある。子供に面白いばかりでなく大人にも面白い、流石は希臘の話て流石は小波の筆てある。

(定價八錢)

▲ハガキ文學　第一卷第一號

日本葉書會發行

繪はがきの流行と、短文の流行との機運に乘じて產聲を擧げた新雜誌てある。はがき文の書き方や、文例を主としたものてあらうと思うて開いて見ると、大きな見當違ひ、記者の言に日く「葉書文學とは葉書の大きさに書き切れる文學の總ての種類を集めたものだ、葉書文學だから、候

文の同居だなぞと早合點されては難有迷惑に候」とあるから以て其内容の眞際を知るに足るであらう、然し予輩の考では候文をいやしむる必要は毫もあるまいと思ふ、否なはがきに書く候文などは大に研究を積んで練り鍛へたるものを作り出す必要は大いにあると思ふはがき文學ははがきの文章をのみ掲載するといふ狹い範圍に限ることはよくあるまいが其れを本領として其方に最も力を盡されたら如何であらう、今の處では募集の文章は大抵百字文の小しく衣を改めたものに過ぎぬ、卷頭に名譽賛助員の名をヅラリと並へ、又會員組織にして徽章を作るなどは頗る田舍者の人氣に投せんとしたる風がある、又發刊の辭は冗長にして詰屈、はがき文學の趣意に副はざること甚だしい。アートペーパーの繪葉書は美しく歐洲流行の繪葉書を卷中に入れたのは面白い。（定價六錢）

▲ほとゝぎす

本號より大改良を施し誌中の文字皆讀むべく表裝亦極めて佳致あり眞に中央俳壇オーソリテーたるに背かず、卷頭掲くる角居、壺斗の文學界美術界漫言の如き簡にしてよく肯綮に當る

▲家事經濟學

後閑菊野
大山斐瑳磨　共著
目黑書房發行

經濟學の分類上家事經濟學といふ科目は存在して居る、而もそれは單に名目のみて系統の立つた組織的學問としては東西共に缺乏して居たのである、此書は卽ち家事經濟學として始めて世に出た書て學界近來の大著の一に數へても差支ない、此書は元來女子大學及ひ女子高等師範の家政科專門の教科書とする目的て作られたのであるといふが間々法律經濟の術語が使つてある爲め多少其智識のあるものでないと女子に對しては難解の節もある、けれども由來斯學專門の人の外には無味乾燥たるを免れない此種の書が文章の流暢なると引例の面白き爲め人をして讀了せしむる力があるは喜ぶべし、釘裝はハイカラ、定價は六十錢

▲妾の半生涯

福田英子著
民友社發行

女子の半生涯、全く一の好小說なり、教訓なり、現今腐敗せる女學生の必ず一讀すべきもの也（三十五錢）

▲冷語熱語

松井柏軒氏著
松村三松堂發行

松井柏軒が曾て萬朝報に掲げし論文集也、これが細評は本誌に於て爽中天氏が「柏軒と華山」と題して論ぜられたればこゝに省くことゝすべし（定價四十錢）



荏原中學校設立趣意書

凡ソ國運ノ發展ヲ計ラント欲セバ國家ノ中堅タルベキ人物ノ養成ニ努メザル可ラズ之ガ養成ニ努メント欲セバ高等ノ普通教育ヲ盛ニセザル可ラズ我國ニ於ケル此ノ種ノ教育ハ明治二十七八年ノ戰役以來遽ニ長足ノ歩武ヲ進メ公私立ノ中學校到ル處ニ設置セラレ生徒ノ充溢セザルモノナキヲ見ルハ洵ニ國家ノ慶事ト謂フベシ

然ルニ從來我ガ教育界ニ於テ最モ力ヲ盡シタル所ノモノハ初等ノ普通教育ニシテ高等普通教育ニ至リテハ尚大ニ改良スベキ點少カラズ蓋シ從來高等ノ普通教育ハ動モスレバ純然タル專門教育ノ弊ニ陷リ教師ニハ概ネ一科專門ノ人ヲ採用シ智識ノ注入專ニシテ身體及ビ道義ノ修養ヲ忽ニシタル傾向ナシトセズ之ガ爲メニ卒業生ニシテ直ニ實務ニ當ラントスル者及ビ更ニ進ミテ專門ノ教育ヲ受ケントスル者ニシテ或ハ神經系統ノ疾患ニ罹リ或ハ呼吸消化器等ノ病症ヲ發シ或ハ素行修マラズシテ一身ヲ誤リ完全ナル發達ヲ遂グルコト能ハザルモノ少カラズ是等ハ固ヨリ種々ノ原因アルベシト雖モ苟モ教育ノ方法其宜シキヲ得バ矯弊ノ目的ヲ達センコト敢テ難キニアラザルベシ

本會玆ニ見ル所アリ地ヲ東京府下武藏國荏原郡大井村ニトシテ荏原中學校舍ヲ建築シ本會長子爵加納久宜ヲ校長トシ理事守田勇吉ヲ學監トシ理事高島平三郎ヲ教頭トシ聊カ本會ノ理想トスル高等ノ普通教育ヲ實施セントス大井村ノ地タル北ニ綠樹鬱葱タル一帶ノ丘陵ヲ負ヒ南ニ煙波洋々タル品川ノ海灣ヲ控ヘ冬暖ニ夏涼シク空氣清鮮風光明媚加フルニ東京市ヲ距ルコト數十町電車アリ滊車アリ交通極メテ便ニシテ衞生上ヨリ見ルモ訓育上ヨリ見ルモ青年ノ教育ニハ最モ適シタル所ナリトス而シテ我ガ校舍ハ即チ此ノ地ニ於テ最好良ナル位置ヲ占メタリ

本校ハ文部省令ニ依レル純然タル中學校ナリト雖モ其ノ教育ノ方法ハ本會ノ主義トスル體育ノ完備ヲ期シ之ニ基キテ訓練ヲ施シ之ニ基キテ教授ヲ爲スニ在リ抑モ教育ニシテ生徒ノ身體ヲ害センカ其ノ德如何ニ高シト雖モ其ノ智如何ニ明カナリト雖モ國家ヲ益セザルハ言ヲ待タズ一身ノ不幸之ヨリ大ナルハナシ況ンヤ道德モ智識モ身體ノ修練ニ基カザレバ到底其ノ教育ヲ完ウスルコト能ハザル事實アルヲヤ故ニ本校ハ生徒ヲ教育シテ剛健ナル身體ヲ得シメ之ト共ニ堅固ナル德操明敏ナル智識ヲ具ヘシメンコトヲ目的トス

抑モ教育ノ首腦ハ教師ニアリ故ニ教育ノ効果如何ハ一ニ教師其ノ人ニ由ルナレバ本校ハ努メテ適任ノ教師ヲ擧ゲ以テ教授及ビ訓育ノ任ヲ監サシメントス且ツ通學ニ便ナラザル子弟ノ爲メニハ或ハ寄宿寮ニ或ハ教師ノ私宅ニ或ハ公認寄宿所ニ止宿セシメ學校長ヲ始メ各擔任教師親シク生徒ヲ監督シ日常坐臥ノ間身ヲ以テ之ヲ率ヰ以テ父兄委托ノ重責ヲ完ウセンコトヲ期ス

本會ハ夙ニ體操學校ヲ設ケテ體操科教員ヲ養成シ既ニ全國中等學校ニ奉職スル者數百名ノ多キニ及ビ尚ホ現ニ多數ノ學生ヲ養成セリ從ツテ體育上ノ智識及ビ經驗ニ富メルハ該校教師ノ特色ニシテ海內他ニ類例ヲ見ザルベシ本校ハ是等ノ教師ヲシテ生徒ノ體育ヲ擔任セシムルモノナレバ其ノ成績ノ善良ナルベキハ本會ノ確信スル所タリ抑モ邦人ノ體格ハ之ヲ歐米人ニ比シテ幾多ノ遜色アリ之ヲ改良スルノ必要ハ實ニ刻下ノ急務ナリトス本校ガ體育ニ重キヲ置ク所以ノモノ豈ニ偶然ナランヤ

今ヤ我ガ帝國ハ宇內ノ强國ト干戈ヲ交ヘ而モ戰ヘハ克チ攻ムレバ取リ國光四海ニ輝キ武威寰宇ニ振ノ此ノ無上ノ光榮ヲ維持シテ益々國運ノ隆昌ヲ圖ランコトハ實ニ國民ノ急務タリ本會モ亦千載一遇ノ昭代ニ遭遇シ聊カ國家ノ進運ニ貢獻スル所アランコトヲ切望ス是レ本會ガ特ニ本校ヲ設立スル所以ナリ

明治三十七年十月

東京府下武藏國荏原郡大井村

日本體育會

（電話新橋三一二一番）

投稿規定

毎月十八日を以て編輯總締切日と致し候に就き何卒それまでに着する様願上候猶投稿諸君は**住所記入**を御忘れ無き様被成下度候宛名は**東京市本郷區駒込西片町拾番地反省社**

愛讀者諸君の便宜を計りて今後本社にて**書籍の取次**を致し候東京市内にて發行の書籍は總て正確迅速に取次可仕候に就き申込の諸君は書名著者發行所等を認め代金及び遞送料を前金にて御送り被下度候

中央公論定價表

		郵税共
一冊	金拾貳錢	金拾參錢
六冊	金六拾五錢	金七拾壹錢
十二冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓卅貳錢

中央公論廣告料

一行(五號文字二十四字詰)	一回	金貳拾錢
四分の一頁	一回	金貳圓五拾錢
半頁	一回	金四圓
一頁	一回	金八圓
表紙の二三四一頁	一回	金拾五圓

送金注意

一郵便爲替は受取人指定欄へ必ず弊社町名幷に社名を拂渡局所を**東京駒込**局と指定せられたし弊社印鑑は駒込支局へ差出有之候に付決して途中にて盗取せらるゝ憂なし

一郵劵代用の塲合は必ず壹割增のこと

一誌代、廣告料とも總て前金にあらされは御需めに應せす

一前金切の節は帶封に朱書いたすべくに付早速拂込まれたし然らされは其號限にて發送を止むべし

一雜誌の發送を以て領收の證といたすべくに付別に領收證を望まるゝ向は返信料を添えられたし

一御拂込み金額の端金の塲合には左表に準し御勘定可致に付御注意相成たし

一金七拾壹錢以下　一部金拾參錢の割

一金壹圓參拾貳錢以下　一部金拾貳錢の割

都下大賣捌所

神田表神保町　東京堂
神田裏神保町　上田屋
本郷四丁目　文明堂

明治三十七年十月三十日印刷
明治三十七年十一月一日發行

發行兼編輯人　武田福松
印刷人　清水金右衛門

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所　反省社
(電話下谷九一九)

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場

中央公論前號目次

新刊

慶應義塾譯

獨立自營 續大國民

全一册 定價金八拾錢

今や皇師の向ふ處連戰連捷、渺たる東洋の小國は一躍、厖大なる強國と相頡頏して下らざらんとす、而も大和民族をしてこの戰勝の結果を完うして以て大國民の伍伴に入らしめんと欲せば古今の治亂興廢に鑑み歐米先進民族の長所に就て學ぶ所なかる可からず、本書は曩に出版して江湖の大喝采を博したる獨立自營大國民の續編にして原書題して爭權之弊と云ひ、活眼を開きて希臘羅馬英米等諸民族の卓越せる所以西班牙佛蘭西等の次第に衰運に傾ける所以を論評し史家陳套の陋見を駁撃せる後如何なる人物を養成せば以て大國民として民族の繁榮隆運を期し得可きやてふ一大問題を解決せり、前編と相俟ちて獨立自營主義の眞價を發揮せるもの實に刻下必讀の良書と云ふ可し。經世家教育家は勿論如何なる教育を子弟に施す可きやの問題に焦慮せるの父兄、如何にせば將來の大國民たるの資格を得可きとの問題に煩悶たるの學生共に本書に於て暗夜に燈臺を得たるの思をなさん。

慶應義塾譯◎獨立自營大國民（四版）全一册定價八拾五錢

發兌 東京市日本橋區本町三丁目一七 電話本局三〇二（特）本局一六八一七 金港堂書籍株式會社

發行所（電話下谷九一九）東京市本郷區西片町十番地 反省社